



Auteur : Sôryûken (双龍軒) sensei (先生)
Titre en langue originale : 口よせ の 術 : 神秘 靈魂 [口寄せ の 術]
Titre en japonais : « Kuchiyose no jutsu : shinpi reikon »
Titre en français : « La technique des invocations [magiques] »
Titre en anglais : « The technique of invocations [magic] »
Année : 1918

Ce petit fascicule d'environ 200 pages se compose de deux parties.

La seconde partie n'est qu'une réédition du précédent fascicule : « Ninjutsu mahô hiden :

shinpi kaihô henge jiyû » [忍術 魔法 秘伝 : 神秘 開放 変化 自由], paru un an plus tôt, en 1917.

双龍軒先生著

神秘
靈魂

口よあせの秘

發行所 竹生英堂

序

▲竹生英堂の主人は、易や人相の本を出版して成功した人である、東京の筑波風しは昔しより名代の寒い風であるが、其の最とも寒い風の吹いてゐた或る晩に、一書を持つて吾輩を訪づれ、不思議の良書であるから、能く讀んで呉れ給へと請はる、取つて之れを見るに、僅かの小冊子である。

▲併しながら何れも確然として其の實行方法が書いてある、嘘談であらうと思はれる節がない。若し夫れ人に依つては出来ないかも知れないが、著者其の人のやうに信念があり、猛烈の實行力を持つてゐる人ならばキツと出来るに違ひないと信じられる。

▲吾輩曾て或る軍醫の書いた感應作用の説を見たが、其の中に、奇蹟は神人の行ひでもない、亦た超自然的のものでもない、畢竟するに必然の理のあるものと認められる、禁厭、加持、祈禱、先見、豫言、示現、夢想杯の類でも、或る方法を實行す

れば、誰れにても實現し得らると書てあつた。

▲晋の葛洪や、宋の希夷は、人の運命の善惡を未然に察して、怖ろしい豫言をしたとある、基督は四十晝夜、飲食を廢して平氣てゐたとある、我が國では安部晴明、役行者杯が奇術者の代表であるが、其の傳記は實に不思議の凝まりである。

▲併しながら宗教の祖人であり、高德を以て稱せられてゐる、最澄、空海、親鸞、日蓮等でも、相競つて奇蹟を遺してゐる、之れ全然嘘談であると云ふことは出来な
い、必らず何等かの理論があつて、出来得べき秘法があつたに違ひないのである。

▲吾輩は粹興の餘り、いろ／＼不思議に關する本を見たが、實は未だ此の本のやうに、痛烈なる實行方法の書てあるのは知らなかつた、双龍軒先生とは恐らく武藝の達人であらう。然うてなければ斯のやうに明晰に凡ての秘術を知つてゐる筈がない
何にしても高い安い杯とは云はれぬ、趣味あり骨のある珍書であることを保證する

大正七年一月

人相新聞社長

洗心堂閑叟

▲みこを打つとか、いちこを寄せるとかいふことは心

▲身の修鍊さへ積めば、誰れにても出来る、要するに

▲精神と肉體との統一をはかるといふことである。

我國には古來から神道の修業法の中にみこを打つとか、またいちこを寄せるとかいふことが行はれて居る。これは神に對して懇い信仰を持つてゐる人が、心身の修養を積んで、一種の神通力を得て、他人の生靈や死靈を引き寄せて、その靈魂といろ／＼の會話を交換することをいふのである。

これには由來種々の秘法が行はれてゐるのであるが、近來ではこの秘法に據らず科學的に研究されて來た、そして一步步々々とその實際に行ひ得ることが證明せられて來たが、併し科學で研究した結果は今日迄のところ極めて一小部分に過ぎない。従つて科學に依つて實際に行ひ得ると闡明せられた部分も極めて一局部に限られてゐるのである、今日のところ、また科學の力ではまだ充分説明されぬ箇所は殆んど大部分であるといつて可い、故に鳶飛魚躍の功を收めるには、どうしても、種々の

秘法ひぽうに依よつてこれを研究けんきうするに如ごとくはない。

然しからば、吾人ごじんはこの靈妙れいめう不可思議ふかしぎと思おもはるゝ秘法ひぽうは如何いかなる方法びやうほうに依よつて得えらるゝか、先まづ心身しんくの修鍊しうれんを積つむといふことが根本こんぽん義ぎである、心身しんくの修鍊しうれんさへ積つめば、誰だれにでも、この秘法ひぽうの修得しうとくされないとはいふことはない。では心身しんくの修鍊しうれんとは如何いかなることを言いふのであるか、一言げんにしてこれを言いへば、吾人ごじんの亂みだれた慾望よくぼうや本能ほんのうを整理せいりして、これを統一たういつすることである。即すなはち精神せいしんと肉體にくたいとを統一たういつすることである。

▲吾々われくの心こころや身體しんたいの中うちには不可思議ふかしぎな力ちからがある、適當てきとう

▲な修養しうやうに依よつてこの不可思議ふかしぎな力ちからを現あらはしさへすれ

▲ば可よい、それが靈妙れいめうな働はたらきをするのである。

吾々われくの心こころや身體しんたいの中うちにはもと／＼この不思議ふしぎな力ちからが潜ひそんでゐるのであるが、吾々われくは世間的せけんてきな種々しゆくの生活せいかつのために、この不思議ふしぎな力ちからを現あらはして、これを實際じつさいに用もちゐることを知しらない、何故なにゆゑかなれば、吾々われくは世間的せけんてきな種々しゆくの生活せいかつをするため眼前がんぜんの利慾りよくや、それから生活上せいかつじやうの忙事ぼうじのためにさまざまに心こころを煩わづらはしてゐる、先まづ早い談はなしが、

吾々は衣食住のために心を煩はすことも一通りではない、又假令衣食住のために心を煩はさないで済む人も、多くは衣食住以外の諸問題に心を悩ますのである、這麼ないろくの生活上の問題に心勞することが、常に吾々の内部にある心靈を分裂してしまふのである、吾々の慾望や本能といふものの中には不思議な力が存してゐるのであるが、それが、色慾とか、利慾とかいふものになつて、分裂するため折角の不思議な力が失はれてしまふ。

て吾人は先づ種々の秘法や、秘術を學ぶには、第一に修養に依つてこの生活上の種々の煩累を拂ひ去つてしまふことを考へねばならぬ、これが最も肝要のことである、其處で最初先づ或る修養法に依つて、この外界の刺戟、即ち生活上の誘惑や、煩累を拂ひ落すのである、さうすれば如何なる秘法も秘術も自然に會得の出來て來るものである。

▲大古の日本人は大低種々の秘法や秘術を心得てゐて
▲それを實行した、然るに現代の人にはそれが出來ぬ

▲のは何故であらうか

大古の日本人は多くは種々の秘法や秘術を心得てゐて、然も平氣で易々とそれを實行してゐた、或はフトマニ即ち大古といふ法に依つて、自分等の父祖の意見を聽いたり。或はクシミタマ即ち奇魂を走らせて、遠法にゐる友人の消息を知つたり、或は氣合をかけて人を棒のやうにしてしまつたり、或は死んだ人を蘇生らして、色々のことを聞いたりした、其他種々の魔法見た様なことを行つたが、この道が現代では全く廢つてしまつた。これは人間の生活が、歴史と共に日に復雜になつて行つて、種々な煩累のために心や身體を悩ますからである、大古は人々の生活が單純で、今日のやうに生活の煩累とか、外界の透惑とかいふものが無い、至つて純粹で素朴な生活をしてゐたので、従つて、斯かる法や術を行ふことが、容易に出来た、彼等は事を行はんとする時には、直ちに精神や肉體の統一が出来たのである。

今日のやうな、復雜な、何やかとゴタ／＼した、世の中ではこの大古の人のやうに容易に法や術を修得することは出来ぬ、どうしても、心身を鍛練して、修養に修

養を積んで習得するの外はない

▲如何なる秘法を學ぶにも、又如何なる秘術を修める

▲にも、自から勵むといふこと、難行苦行することを

▲忘れてはならぬ、これが第一の入門である

故に單純素朴の大古人なら兎も角も、復雜な現代にあつて、人並優れた秘法や秘術を學ぶには、どうしても、先づ自から人並優れて、その道に勵むといふことが肝要である、現代は何もかも物質の世の中で、斯ういふ内部の生活の事業にたづさわるものはどうしても、或る程度まで世間から冷笑されたり、またさまざまの非難を受けたりするのであるから、這ういふ世の中の冷笑や非難のために中途から努力を怠つてしまつてはならぬといふことは覺悟して居ねばならぬ

それから今一つは、現代のやうな誘惑の多い、外界の刺戟の多い世の中では、斯る秘法や、秘術を習得するといふにはどうしても、いろ／＼の修養を經なければ、精神や肉體の統一をはかるといふことが出來ないから、幾多の難行苦行を經なければ

ば、その境地に到達することが難しい、所で、折角修めかけた道も中途から挫折する場合が多い、併しそんなことで到底この至難な術が修められるものではない、故に遊び半分に研究しやうとするやうな者や、雷だに書齋の中だけで修得しやうとするやうな者は、始めからそんな秘法や秘術を習得しやうといふやうなことを考へぬが好い、苟くも一旦、這の道に志した以上は、どこ迄も貫徹しなければやまないといふ堅い決心と覺悟を以つて進まねばならぬ、難行苦行は心身の靈妙不可思議なる境地に達するの第一の關門である。

- ▲人間の靈魂の不思議には吾人と雖も今更ながら驚く
- ▲その作用と活動とに至つては千態萬狀顯幽出沒自在

▲科學では到底説明出來ぬ。

人間の靈魂を研究するといふことは今日では世界各國の科學者が相競ふてゐるやうな有様であるが、遺憾ながら現在の科學では、吾人が祖先から傳つてゐる秘傳に依つて實驗するやうなことの百分の一にも達して居らぬ、吾人は強ひて科學者を非

難するものではないが、どうも今日の科學者のやり口を見ると、却つて科學といふものに囚はれてゐるやうな處が多い、従つて、その研究法が憶病で、徒らに指先の針を針の尖てつゝいて満足してゐる如き觀があるのであるから、偶々非凡な靈能を持つた科學者が現はれてゐても科學者同志で、相倚つてけし潰し、揉潰してしまふことは今日の科學に於て靈魂の研究のはかどらない理由である。

人間の靈魂といふものは、普通吾々が世間一般の生活をしてゐる時には、何等の靈能も、不可思議も發見することはないが、一朝その神秘力を發現して來ると忽ちに千態萬狀の作用を示し、顯幽出沒自由自在であつて、到底今日の科學が説明してゐるやうなものではない、これには科學的方法のみに依らず、實驗的の修業に依つてゐる我々でも今更ながらその不可思議に驚くのである。

- ▲靈魂はみな各自が持つてゐてそれ分らぬ、それ許
- ▲りではない、各自誰れでも靈妙不可思議な能力を持
- ▲つてゐて思ふやうに使用することが出來ぬ。

靈魂の不思議な作用について、三四の例を挙げると、第一に先づ靈魂の速度は實に恐ろしい程速いものであるといふことである、到底無線電信などの比でない、吾人は以前に或る、修業者が仙術に依つて、遠方の修業者と談話してゐるのを實際に見たことがあるが、それは日向の山奥であつた、其の修業者は先づ咒文を唱へて、次ぎにエイエイと氣合を掛けたが、直ちに談話を始めた、相手の修業者は木曾の山中にゐるといふことであつた、談話は修業上のいろ／＼の問答の如きものであつたが、十分間も續いた、これはその修業者が吾人に實驗して見せるために、業々談話して見せたのであるが、普通は言葉で談話しなくても直感で分るといふのであつた併しこの修業者の相手は何を言つてゐるか少しも分らない、唯だこれと應酬してゐる日向の修業者の言葉を聴くのみである、修業者はこれがニギミタマ即ち和魂といふ靈魂の作用であると説明して呉れた、吾人はその靈魂の速度の大なるに驚いた、併しこれは自分で實際に修業して見れば何も驚く程のものではなかつた、靈魂作用にはこれよりもまだ不可思議なものがあつた。

斯ういふ風な靈魂はみな各自が持つてゐるのであるが、それであつて人々はその靈魂を疎かにしてゐる、それ許りてない各自誰れてもこの靈妙不可思議な力を使用することを知らないのである。

▲獨り靈魂の活動はその速力が早い許りてはない何物

▲をも排して進む能力を持つてゐる空氣の中を無線電

▲信の電報が傳はるよりも、もつと自由である。

更に第二の例を擧げると尙不思議なるは靈魂の自由なる活動力である、人間の靈魂は電氣の如く傳はつて行くものでないから電氣の如く導體、不導體といふ様なものも無い自由自在に如何なる、物體の中にも出入する、無線電信の電波が空氣の中を傳はるよりもつと自由なものである。

吾人は曾つて或る乙修業者が、神通力に依つて、巨大なる神木の前に立つて秘言を唱へてゐるを見た、彼は忽ちにして、兩眼を赫つと見開いて、「この神木の幹の中は空洞となつてゐる」といつたが、更に言葉を繼いで「その空洞の中には枝の空洞

を傳つて入り込んだ蛇が居る、最早二年以上この空洞の中から出ることが出来ない
 て餘程困つてゐる、今私がそれを出してお目にかける」と言ひ終つて再び咒文を唱
 へたすると不思議にも幹の高い處から差し出た枝の空洞の孔から眞白い蛇が出て來
 た。

この實驗は唯だ樹木の幹の内部を靈魂の力で見たといふに過ぎないが、獨り樹木
 のみならず、吾人の靈魂は巖石を積んだ窟の中でも或は鐵石で圍つた庫の中でも自
 由に出入することが出来るのである、故に靈魂の力にかゝつては如何なる金城鐵壁
 も何の役にも立たぬ、靈魂の力は何の障害も感ずることなく進み且つ這入り込むの
 である。

- ▲蒸氣や電氣は機械がなければ仕事をしないが、人間
- ▲の靈魂は、何等機械を要しない、而かも驚くべき作
- ▲用をするものである。

第三の例は、人間の靈魂の他の物體に働く作用である、吾人は或る丙修業者が氣

合に依つて、手を下さずして自由に戸を開閉するのを見た。彼は靜かに呼吸しながら聽て、口の中で何事か咒文を唱へたがその刹那エーイ、エーイと鼓膜の痺れる位鋭い聲で氣合をかけると、其處に閉つてゐた障子がすうと開く、修業者は靜に立ち立つて障子の外へ出て行つたが、その時またエーイ、エーイと氣合を掛けると今開いた障子が元のやうにすうと閉つてしまつた。

これは言ふ迄もなく全然の靈魂の作用で、吾人は修養に依つてはただこれ以上のことが出来るのである、我國の武術の一つである忍術などにも這ういふ秘術は採用されてゐる。

斯くの如く人の靈魂の作用は、蒸氣や電氣と異なり、機械なくして他の物體に働くものである、而かも多くは距離などに頓着しないやうである、或る念力に依つて吾人は十里も二十里も遠方に逃げのびてゐる盜棒や、落人などの足を動かさぬやうに金縛りにすることも出来、またその人等の靈魂を攪亂して、途を迷はせもと來し途に引返へさしめることも出来る、これはみな靈魂の作用である。

▲又人間の靈魂の作用は、時間を置いても、他物に働

▲くものである、蒸氣や電氣の作用は其場限りである

▲が、靈魂の作用はそれとも異ふ。

第四の例は、人間の靈魂の他の物に働くのは距離に頓着がないのでなく、又時間にも頓着がないといふことである、無線電信の電波なども可能自由なものであるけれども、時間に頓着なく働く靈魂の力には及ばない。

吾人は更に或る(1)修業者に依つて行はれた不思議な靈能を見ることを得た、その人は祈禱に依つて三日先の朝の暫くの間、鋏の刃を封じてしまつた修業者は長い祈禱の後三度程ふらふらと息を吹きかけた許りであつた、するとその日から三日目の朝、或る婦人がその鋏を使つてゐたが偶としたことで急に剪れなくなつてしまつたその婦人は色々に苦心したが、その鋏はどうしても剪れない兎角する間に一時間許りも經つたが、鋏はピンと音がして元のやうに剪れ始めた。

これは、人間の靈魂が、時間を置いても作用するといふ一實驗に過ぎないが、此の

外に更に時間を越えて働く幾多の作用がある、即ち幾百年以前に死んだ人の靈魂と會話したり、或はその靈魂から作用を受けたりすることなどが之れに屬するが、これは猶ほ精しく後章で説明する、兎に角靈魂は吾人の所謂時間といふものに全く無頓着であることが分かる、言葉を換へて説明すれば、吾々に幾百年といふ永い年月でも、靈魂にとつては一刹那たるに過ぎないのである。

▲吾人の謂ふ秘法といひ、秘術といふものは、日本支

▲那印度の諸國に行はれた東洋式のものであるが、西

▲洋にも靈魂の上の奇蹟は少なくない。

以上二三の例は卑近な實驗を示したに止まるが普通吾人が此等の秘法といひ秘術といふものは日本、支那、印度に古來から行はれて來たものを言ふのである、併し這麼簡單な實例は西洋にも少なくない。けれども西洋のは、雷だ偶然に或る人の靈魂の上に突如として起つた實例に過ぎないので、これを或る人が自から行はんと試みたといふのではない、勿論自から自發的に研究した人も二三はあるけれども、そ

れは今も尙ほ多くのの人々からいろ／＼に疑はれてゐるといふ風である。

次章で述べる瑞典の科學者にして神學者を兼ねたるスエデンボルクヒといふ人の如きは全然自發的に靈魂の秘法を體驗してゐたが、其他の多くの人は偶然に斯くの如き場に遭遇したといふに過ぎない。

日本でも、支那でも、印度でも古來から斯かる靈魂の秘法は、一つの法として、術として實驗せられてゐるので、西洋の多くの奇蹟や魔法といふものが、偶發的なるに反して、東洋のは自發的、意識的である、其處で吾人はこれを研究せんとするには、廻りくどい科學的な西洋の方法に依るよりも、直感的な、實驗を主とした東洋の方法に従つた方が捷徑である、以下西洋に於ける三四の例を示して見やう。

- ▲ 遠方の火事を知つて、その火事の様子を一々説明して聽かしたといふ話、また天國を旅行して、天人と
- ▲ 談話したり、地獄へ行つて地獄の状態をも見たとい

ふ話

スエデンボルクといふ人は西紀千六百八十八年瑞典に生れた彼は幼時から往々不思議なことを言つて両親を驚かしたといふから、並みの人間ではなかつたといふことが知れる、彼の父は國王チャールス二世に仕へ宮中の僧侶であつたが、彼は早くから羅典語で詩を作ることに、數學や、レンズを磨く術を學んだ、稍長ずるに及んで、英國、佛國、和蘭、獨逸等を遊歴したが、二十二歳の頃から、水雷艇や水時計や空氣車や特種の樂器等を考案した、彼は工學上の造詣が深く、天文學、鑛物學、機械學、音學、數學、經濟學、殆んどあらゆる學問に通じた、政治家としてもエリアノーラ女王位に即くに及んで貴族院の一席を占めるやうになつた。そのスエデンボルクが五十四五歳の時不思議なことが彼の心靈の上に起つた、彼の前に突然神（基督教の神である）が現はれて、潜心して聖典を讀む時は、必ず鑰が得られると告げた、彼はこの時より科學者としての前生涯を全然投棄してしまつて、宗教家、神學者神秘家となつてしまつた。それより彼は死ぬる迄、孜孜として日も猶ほ足らざる努力を以つて、聖典の研究に従事したのであつた。

彼は千七百五十六年コツテンブルクで、ある名士の招待を受けてその席上にあつたが、この時彼は忽ち非常の憂色をその顔に現はして外に出た、そして外より歸つて來てそのゴツテンブルグから三百哩遠方のストックホルム市で火災のあることを告げた、一座の人々は日常深重な行爲をしつゝあるスエデンボルクが言ふことなので、非常に驚愕したが、彼は一々火災の情況を談じて聞かせた、さて其日を経てストックホルム市から使者が來たのであつたが、使者の報告した所と、スエデンボルクの談話した所とは、寸分も相異なる所が無かつた。

其他、スエデンボルクは多くの著述に於て、或る一日天國に旅行して天使と遇つて天界の家庭や衣類や禮拜を見せて貰つたことや、それから、地獄に下りて行つて地獄の精靈の怨恨し切齒する有様を見聞いたことを書いてゐる。

▲英國の詩人が希臘の詩人の實際の姿に接したといふ

▲談 それからまた書齋の隅で、聖書の中に現はれて

▲ゐる惡魔に接したといふこと、

英國にウキリアムブレイクといふ、詩人があつた、彼は神秘派の詩人であるが、一方に詩を作つたと共にまた、一方では繪も書いた、繪の方は文藝復興期で有名な畫家ミケランゼロの流派を受けた畫家で、好んで聖書の中の惡魔の繪を描いたが一見しても極めて神秘的な趣がある、このブレイクはある時、偶としたこととて、希臘の詩人ホーマーの歩いて來るのに遇つた、幻影であるか、事實であるかハッキリしないが確かにホーマーであるには相違なかつた。又彼はある日書齋の隅で、綠色の光の降りそゞいでゐる中で、惡魔のゐることを發見して驚駭した、彼はそれを繪に書いた。

このウキリアム、ブレイクの實驗したのは、極めて偶發的のもので、固より自分から、ホーマーなり、惡魔なりを見やうと意識して見たのではない、然しこれは確かに生靈の不思議な神秘的な作用であることと言ふ迄もない。

▲西洋にても死靈の乗り移つたといふ事實がある、死

▲靈は偶然にも一少女に乗り移つたがその時、その少

▲女の靈能は驚くべき活動を示した。

更に今一つの例を挙げると、英國の一少女に、有名な小説家ヂッケンスの靈魂が乗り移つて何百頁のヂッケンスの小説の文章をすらくと讀み續けたことがある、この少女は何心なく遊んでゐたが、突如として大きい聲で喋り出したとしてドウも何物かゞ乗り移つてゐるやうであつた。

然しこの實例も偶發的のものである、この少女は秘法に依つて、ヂッケンスの靈魂を喚び起したといふのでもなければ、又術に依つてヂッケンスの、生靈を引き寄せたといふのでもない。

この事は精しく後章で説明するが西洋でも、東洋でも一人の人に他人の靈魂の乗り移る時は非常の靈能を示すもので、日本でもある人の未亡人に、或る水難で變死した婦人の靈魂が乗り移つて、二時間に渡つてその婦人の水難當時の情況を物語つたが、最後に水に溺死する時の有様を説明する時は、最後水がその婦人を溺らしてゐるやうにあふくと云ひ乍ら、苦しさに物語つてそして、其の談が終るや否や

未亡人はばつたりと仆れてしまつた、その未亡人とその溺死した婦人とは何等の關係もないのである。

▲米國の寫眞師が誤つて空中を寫したが、その寫眞の種板を現象して見ると人の像が現はれた、這麼

▲ことも尠なくないと言はれてゐる。

更に今一つ興味のある例は、靈魂は或る場合寫眞に映ずるといふことである。米國のある寫眞師が、偶としたことで、誤つて空中を撮影したが、その時、その寫眞の種子板を現象して見ると、不思議にも人間の像が映つてゐる、これには流石の寫眞師も喫驚したが、ドウ考へても空中に人の居やう筈がない、去りとして種子板を取り換る筈もないので、種々考慮を費して見たがどうも自分には分らない、それで其の寫眞師は、その種子板に現象した人の像について方々を聞き合せたが、その人は確かに一二週間前死亡した同市の或る町の者であると知れた。これも偶然の機會に斯くの如き、不思議が現はれたのであるが、吾人の實驗に依れば、その位なことは敢

て不思議とするに足らない、吾人の實驗を基礎として推論すると、これは人爲的に出來得る筈である、即ち秘術に依つて、其の死靈を引き寄せる、次いでこれを撮影すれば可いのである。但しその死靈が寫眞に作用するものであることを發見したの
 は彼等の賜である、以上の四例は單に實例のみを示したものであるが、然らば現代の科學者は人間の靈魂について如何なる研究をなしつゝあるか。以下少しくこの方面について説明して見やう。

▲今日の科學者の一部には、靈魂の秘密を探索しや

▲うとして血眼になつてゐるものが甚だ多い、必ら

▲ず一道の光明を齎すであらう。

現在にあつては、自然科學の方からもいろ／＼に靈魂の研究がされつゝある、生理學や心理學や、發生學や各方面から研究されつゝある、然し前にも言つた如く、これ等の科學者の歩みつゝある道は極めて確實ではあるが、亦極めて一部分に偏してゐるといふ傾きがある、又其の研究の進歩も頗る遅々たる觀がある。

然し近來になつて、物理學上からエネルギー（精力）の不滅といふことが唱導されて以來、萬物の靈魂もどうやら不滅のものらしいといふことが、ぼんやりと分つて來た、従つた人間の靈魂も先づ以つて不滅のものらしいといふことが信ぜられるやうになつた。其のために靈魂について今一層の研究を積んで見たいといふので哲學者も、科學者もこの方面に眼をつけるやうになつて來た、一方では又生理學者の方の側から細胞の研究が進んで行つて、人間の生命の起元といふやうなものが研究されるやうになつた。それやこれやで科學者は誰れも皆な人間の靈魂といふことに注意するやうになつた。

併しながら人間の靈魂活動、作用の實驗と言ふ方面の研究に最も預つて力のあつたのは催眠術の科學的研究といふことである、

▲催眠術を研究してゐると誰れしも、或る點まで人

▲間の靈魂の不可思議なる作用に氣がつく催眠術に

▲かゝると、夢中で自分の思ふ所へ旅行が出来る。

所で吾人は先づ催眠術に依つて自分が術者（催眠術をかける人）となつてAといふ被術者（催眠術をかけられる人）を催眠せしめたとする。すると吾人はそのAなる人に暗示さへ與へれば、Aなる人の靈魂だけを自由自在に旅行せしめることが出来る、例へば東京にゐてそのAなる人に京都に旅行せよとの暗示を與へると、Aの靈魂は直ちに京都へ飛翔するのである、そして此處が丸山公園であるからよく見よとの教唆を與へると、直ちにその霧魂は眼のあたり丸山公園の光景を見ることが出来るのである、又催眠術の技術が上達して來ると、被術者に暗示を與へてその身體を棒のやうに硬直にせしめ、二個の椅子を臺として、硬直になつた身體を以つて橋を掛け其の上に四五人の人を上げることにも出来る。

這麼な身體の状態は普通の場合では考へられないことで、不思議とする所であるが、誰れても一度催眠術に熟達すれば、其の位の程度迄は習得することが出来る、其處で、人間の身體が何故この様に異様な状態を呈するかといふ疑問を起して來るこれが何より靈魂を研究する好奇心を起さしめたのである、そしてこの催眠術が科

學的に研究されて來ると勢ひどうしても心理學の研究といふ問題となつて來る、其處で心理學で潜在意識の研究のいふやうなものが行はれて來るやうになつた。

▲潜在意識と言へば心理學者のいろ／＼の喧しく言

▲ふ問題であるが我が國では古代の人々はこれに就

▲いて今日よりも深い研究をしてゐた。

この催眠術でAならAといふ人の魂が旅行して東京から京都に至り、丸山公園の光景まで見て歸るといふのは、人の心の中にある潜在意識といふものゝ作用である、心理學者は説明する。そして其の潜在意識といふものに就いては、今日いろいろに議論せられてゐるが、何ぞ圖らん我が國の古代では、この潜在意識の研究は盛んに行はれたのみならず、これを應用して種々の生活上の便宜をも得たのである、唯だその研究したり應用したりする方法は今日と著しく異つてゐたのである。

或る神様の如きはこの潜在意識を自分で自由自在に使用することが出来たので、坐つてゐながら天下のことは何んでも知つてゐた。日本の古代ではこの潜在意識の

ことをナホビ、即ち直靈すまはといつたのであるが、このナホビといふのは、人の心の中にある靈魂れいこんの一種しゆである。このナホビといふものは、人が修養しうやうさへすれば發輝はつきせられるので、このナホビを自由自在じゆうじざいに使用ししようすれば、坐まして東西南北とうさいなんぼくに交通かうつうすることも出来れば、また過去未來くわこみらいとも感應かんおうすることが出来るのである。

▲日本にほんの太古たいこでは、この潜在意識せんざいいしきの不思議ふしぎな力がい

▲ろくに活用くわつようせられた、現在げんざいにもその方法ほうほうは傳つたへ

▲られてあるのであるが、それを活用くわつようする人は尠すくな

▲す。

日本にほんの太古たいこに『天あまの鳥船とりぶね』といふものがあつた、或あるる神様かみさまはこの『天あまの鳥船とりぶね』に乗のつて、支那しなや印度いんどや埃及えじふとの方ほうまで出でかけて行いつたと傳つたへられてゐるが、これは多おほくの人々ひとぐは或あるる船ふねの一種しゆであると言いつてゐる。併しかしこれは單たんなる船ふねではない、靈魂れいこんの船ふねである、自由じゆうじざいな靈魂れいこんの船ふねに乗のつて、至いたる處ところを旅行りよかうして歩あるいたのである、さういふと現在げんざいの人々ひとぐは何なにか夢ゆめでも見みてゐたのであらうと思おもふてあらうが全く夢ゆめでも

空想でも無い、靈魂の活用は實際に行はれたので、神々は獨り世界の諸國を旅行して廻つた許りてなく、或は諸國の冶金術や醫術などを見て歸つた、我が國の古代には文字はあつたが、この『天の鳥船』で外國の文字を見て、その短を補ふことも出来たのであつた、これらの方法は我が國で現在にも傳へられてゐるのであるがこれを修得する人が尠くなつたので、現在では寧ろ外國の心理學者などに教へられて驚くといふ有様である。

▲日本の古代には這麼事について面白い談がある、

▲日本の太古では、この心靈の研究が本になつて、

▲醫術や、冶金術や、其他すべての諸科學が發達し

▲たのである。

日本の太古で最初に國を治められた神様は大國主神である、この神様は産業や政治に御熱心の方であつて、この神様が出てられて日本は大に榮えたのであるが、この大國主神が或る時海邊で、お供の神様と魚を釣つてゐられると、海の沖の方が物

凄く光り輝いて、龜に乗つて來られた神様があつた、その神様はお身體が極めて小造りに出來てゐられたので、大國主神も始めは馬鹿にせられて、何心なく近寄られたのであるが、その小さい神様の敏活であることが一通りでない、稍もすれば、頬などに噛みつかれさうになる。其處で、その時大國主神は『この奴並みの奴でない』と考へられたのでお供の神様達を集めて『これは何物か知つてゐるものはないか』と聽かれたが、どの神様もどの神様も知つてゐるものがない、その時谷間に住んでゐた谷墓といふものが恐るゝ大國主神の前に進み出て『それは山田の愛曾窩騰といふ者が知つて居ります、この者は步行することは出來ませんが、何でも天下のことを知つて居ります』と答へた、所て早速大國主神はこの愛曾窩騰といふ者に使ひをやつてお聽合せになると『恐れ乍ら申し上げます、あれは少名彦名神といふものでござりまする天下の事は何もかも知つて居りますから重くお用ゐを願ひます』と答へた、この少名彦名神といふのは大國主神と同じく、天祖の神裔にましましたのであるが、天祖の指の間から飛び出して海外を漂浪せられたのである

其處て大國主神は、この少名彥名神を重用遊ばして、共に天下の政治を經營遊ばしたるのである、この少名彥名神が即ちナホビの活用を教へられた神様であるが、然しこの少名彥名神の外の谷間の谷墓と山田の愛曾窩騰とがこのナホビの活用を心得てゐたことは言ふ迄もない、彼等は居ながらに天下のことを知つてゐたのである。この少名彥名神はこの靈魂の自由自在な活動力を利用して、日本の冶金術や、醫術の發達に資す處が多かつた、其他の諸科學もこの神の靈力に依つて發達する處が少くなかつた。

- ▲ 心靈の秘密を開發すれば、人間のすることは總て
 - ▲ 了解せられる、發明、發見といふことも一方から
 - ▲ 見ると要するに心靈の秘密を開發するといふこと
- ▲ である。

この少名彥名神といふ方は、今日の發明發見の開祖である、この神様は、心靈の活用によつていろ／＼のものを發明したり發見したりして世の人々を益せしめられ

た。世に發明と發見とかいふものは、偶然に出来るものと思つてゐるけれども、これは決して偶發的のものでない。その偶發的のものであると思ふのは、その發明した機械とか、發見した藥品とかいふものゝみを見てゐるからであつて、これを機械や藥品の方から見ないで、發明し、發見した人の心の方から言ふと全く心靈の開發といふことに歸するのである、ニュートンが林檎の落ちるのを見て、引力説を發見したといふのも、ワットが鐵瓶の湯氣の吹き出すのを見て、蒸氣機關を發明したといふのも、全く心靈の開發といふことに外ならぬ、自分の心の秘密さへ知ることが出来るなら自分の考へてゐることは何でも實行することが出来るのである、大發見家大發見者になりたいと希望せらるゝ諸君よ、先づ靈妙不可思議なる自分の心靈に注意し、その偉大なる活力を研究することを忘るゝ勿れ。

▲我國には幸にも、この靈妙不可思議なる秘傳が幾

▲つもの傳つてゐる筈であるから、修養に依つて

▲太古の神々のなし得た如き、秘法が會得出来る

▲ともない。

太古の冶金術を傳へたものに、『天の磐鍋傳』といふものがある、この『天の磐鍋傳』によると太古の冶金術は非常に發達してゐた、その冶金の方法は、今日の如き複雑したものであるが、その發達は今日の人の夢想し得ない程度まで行つてゐる、ある神様は或る岩石を自由自在に變じて、他の礦物と化せしめたのであつた。これは冶金の談ではないが極めて興味が多い事がある、我が國では徳川時代までは、婦人が人妻となれば『お齒黒』といふものをつけた。即ち鐵漿である。この鐵漿といふものは、焼いた鐵を酒の中に長く浸して置いて、その酒水で製したものであるが、その液を温めて『ふし』といふ植物性の粉末を加へて、これで齒を染めるのである。この鐵漿の製法は、極めて非科學的のものであるが、この鐵から染料を採るといふことを發見して、實際に藍染料を鐵から採るやうになつたのは歐米では最近のことである。これは談が少しく横道に外れたがこの様な卑近な方法の中にも、昔の秘傳に微かに残つてゐる、我が國には今日猶ほ秘傳や口傳として幾つもの

諸種の秘術が傳つてゐる筈であるから、人々の修養に依つては、心靈の開發と共に、驚く可き實際生活の便宜をも得ることが出来るのである。

▲『淵古知新』といふことは、現代の秘術や、秘法を

▲學ぶものの最も心得べきことである、何故かなれ

▲ば、現代では昔からの大切な秘術や秘法が全く看

▲過されてゐるからである。

序にて染料のことについて一言するが、前にも言つた鐵漿の如きは、猶ほ大に一考する必要がある、今日の必要からいふ染料といふものには三つの大切な條件が必要である、即ち一は染料に光澤があつて美しくなければならぬといふことである二には如何なる染まり難い材料にても染め附くものでなくてはならない、三には他の藥品などにあつても、容易に化學變化を受けないものが必要である、所が普通の染料では仲々さういふ風に三調子揃つたものが無い。然るに我國にはこの鐵漿といふ染料がずっと以前から工夫せられてゐる、そして、つや／＼と光澤よく且つ齒の

瑛瑯質びやうりやうしつの如ごとき染そめ難がたいものを容よう易いに染そめ、猶なほほ口こう中ちゆうの如ごとき化くわ學がく變へん化くわの盛さかんに起おこるところでよく光くわう澤たくを保たもつてゐるのである。

そんな何なんでもないことにも、あなどることの出来てない法はふが存ぞんしてゐるのであるから、今日こんにち大たい古こから傳つたへられてゐる秘ひ傳でんや秘ひ法はふを研けん究きゆうするものは、自みづから工く夫ふうしていろくの事こと柄がらから秘ひ法はふを會あ得とくすることが必ひつ要えうである、古こ人じんが『温かん古こ知ち新しん』といつたのは誠まことに各めい言げんで、現げん代だいの如ごとく、心しん靈れいの道みちの癡うたつてゐる時じ代だいには、古ふるきを温あためて、新あらしきを知しるといふことは最もつとも必ひつ要えうのことである、永ながく古ふるくから傳つたはられてゐるものには必かならず何なん等らかの秘ひ法はふが潜ひそんでゐるから注ちゆう意いして見みるがよろしい。その一例れいは日本にほんの正ま宗しゆうの銘めい刀たうにもある。

▲古ふるいものを新あらしい眼めで見みることは必ひつ要えうである、併しか

▲古ふるいものを新あらしい眼めで見みて、驚おどろき可べきものを發はつ

▲見けんするものは、古ふるいもの、中なかに新あららしいものがある

▲からである。

日本の所謂日本刀といふものは日本人の製作し始めてから最も古い歴史を有してゐるもので、今日猶ほ千年以上の日本刀の煌々として輝いてゐるものが數多存するのである、所がこの日本刀だけは外國人に眞似が出来ない、所て獨逸ではこれをこの日本刀、而かも正宗の銘刀を持ち歸つて、これを科學的分解して見た。するとその中から『水鉛』といふ礦物のあることが分つた。所て獨逸の陸軍ではこの『水鉛』を用ゐて、大砲を製造したが、これが開戰當時世界の耳目を驚駭せしめた獨逸の四十三珊砲である、この『水鉛』を製砲に使用するといふことは、歐洲大戰開戰當初には本家本元の日本でも知らなかつたらしい。日本でそれを知らぬ位であるから歐洲連合諸國は無論知る筈は無かつたので、歐洲の或る國の武官等は戰爭以前に獨逸を視察して『這麼な薄い大砲でどうして戰爭が出来るものか。獨逸の戰備は張り子の虎で恐らく獨逸は戰爭などする意志はないのであらう』と言つて笑つた位だ。然るにこの大砲が、レージユの要塞を陥落せしめナミュールの要塞を分碎してしまつた。また海戦では英國の戰艦クキンメーリを擊沈してしまつた。

▲祖先から長く傳つて來た精神を傳統的精神といふ

▲この傳統的精神の中には驚くべきものが傳つてゐる

▲る、秘術とか秘法とかいふものもこの中にある

正宗の銘刀の中に水鉛があつたからとて驚くことはない、こんな事は他に幾らも存してゐる。和歌は日本人が幾千年の昔から學んで來たものであるが、此の和歌にも不思議な力がある『やまと歌は人の心をたねとして』と言はれた如く、永い間人の心を種子として育つて來た三十一字の歌には、驚く可き秘密がある、昔から雨ごひの歌を咏んで昊天に雨を呼んだといふこともあるし、猛獸の吼り狂ふのを一首の歌でなだめたためしもある。吾人は或る仙者が蟻の行く道を阻めた實例を見た。仙者の住む家は極めて質素であつたので、蟻が上つて來て仕方がない、甘いものなどは、柿でも豆でも直ぐに蟻が集まる。所が仙者は『一寸蟻に相談することがありますから。』といつて、一首の和歌を書いて、蟻の上つて來る圓木の柱にはりつけた。すると驚くべきことは、それ以後一寸も蟻が家の中に上つて來なくなつた。その時

仙者は笑ひながら『蟻のみでなく凡て動物は歌の力で相談することが出来る、彼等も甘いものが欲しいから来るのですから、箒で掃き落したり、煮湯をかけたりにしてはなりません、人間の方はそれで好いかも知れませんが蟻の方では迷惑なわけです折角甘いものがあるのを食べに来るといふのですから――。其處で人間の方から蟻に、お前達がそれを食つて呉れては極めて迷惑であるから、どうかこれから来ないやうにして呉れないか、蟻に相談するのです。それを人間の聲で談しては蟻にわからないのですから歌でその意味を傳へるのです。』と言つて聽かした。これは單に一例であるが、斯ういふ風に祖先から傳つて來たものにはいろ／＼の靈能があるものである。この祖先から傳つて來た精神を稱して傳統的精神といふのであるが、この祖先から傳つてゐるものに不思議な秘法や秘術が埋つてゐるから祖先の殘した言葉とか器具とかいふものは特に注意して見ねばならないのである。

▲一體生物の言語にはみな靈妙不可思議な靈力があ

▲るものである。或る言語は人間の靈魂を自由自在

▲に引きつけ、またそれから歡ばせるものである。

和歌に不思議な力のあることはよく人の言ふ所であるが、總じて生物の言語といふものは不思議なものである。我が國では言葉は古來から『言だま』と言ひ傳へられて、一種の靈魂であるとせられてゐる『土佐日記』にも『かく歌ふにふなやかたの塵もちり、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる』と言つてあるが、これは言葉の大靈力を云ひ現はしたものである。

獨り言葉の靈力のあるのは人間の言葉のみでない、言葉は鳥獸もあるので、『四種圖解』といふ書に、伯州に鳥の鳴き聲を解する獵夫のあることが書いてある、それに依るとその獵夫は鳥の鳴聲を解する許りてなく、鳥の鳴聲も自由に出来るので雌鳥の音を發すれば忽ち雄鳥が慕ひ來り、また雛音を發すれば直ちに親鳥が食を啄んで來るといふ、その獵夫の言ふには『俺はこの山中に在ること三十年、遂に能く鳥鳴を解するやうになりました鳥の鳴聲にも自然に音の法があります』と。生物の言葉には皆な靈力の備つてゐるものである、故に人間も或る鳥の音には涙を零してこ

れを愛しみ、ある蟲の音には我を忘れて樂しむのである。方丈記に『山鳥のほろほろと啼を聴けば母かと思ひまた父かと思ふ』とあるのは單に文章の修飾でない人の秘法にヒメゴトといふものがあるのは多くはこの言語の靈力を發輝せしめるためである。ヒメゴトは即ち秘言で、このことに關して後章で精しく説くこととする以上各章は序論と見らるべきものであるが、これから愈々、秘傳秘法の實行について解釋することとする。

▲秘法や秘術を學ぶには修養が最も必要である。現

▲在の人は何故修養しなければ秘法や秘術が得られ

▲ぬか、修養とは何か。

大古では——即ち神代では、この秘法や秘術といふものが、誰れにても行はれたこれ大古人は自然の儘に衣食し、自然の儘に考へ自然の儘に行へたからである、『天地の勢に順ふ』といふ語があるが、これが即ち秘法、秘術を習得する心で、秘法や秘術はみな自然の法則を觀破することから始まつてゐる。自然の法則といつても

これは法則といふものを自己の外に見たからで、自己の内に見ればこれが自己の心であるといふことになる、即ち無慾無心でもこの事に對するといふことが法や術を覺へる第一の要件である。所が現代の世の中は大古と異つて、世俗の事が複雑になつて來てゐるし、またいろ／＼誘惑も多いのであるから大古人の如く、自然の生活が出來ない、種々の世俗の慾望も起つて來る、その慾望といふものが恰も八岐の大蛇の如く、四方八方に頭を擡げて來るから自分といふものが攪亂せられて來る、其處で現代で秘法や、秘術を學ぼうとするにはどうしても、凡てのものに對して無望無心であることを修養しなければならぬ、無望無心といつても決して慾望を全然棄てししまふといふのではない。唯だばら／＼になつた種々の慾望を整然と統一するこゝとである。

▲人間の慾望といふものは大切なものである、この

▲慾望を禁慾し、無視してはならない唯だ分裂した

▲慾望を統一し、整理しさへすればよろ。

世上の人は能く仙者が深山や幽谷で、秘法や秘術を習得したといふ談を聽いて、
 全然人間の慾望を斷つて習得するものと思つてゐるものがある、勿論人の爲し得ざ
 ることを習得するのであるから世俗の慾望を斷つといふことは必要であるけれども
 これは人間の中にある慾望を全然捨てしまふといふわけでない、唯だ前にも言つ
 た如く、八岐の大蛇のやうにいろ／＼に分裂した慾望を統一し、整理して、すつき
 りとした本心、即ち自然の心にするといふことである。であるから何も人間は難行
 苦行してその道、その術を習得しなくてもよいのであるが、併し多くの人は、難行
 苦行しなければ、その分裂した慾望を統一することが出来ぬ、其處で或は減食して
 心を清淨潔白にし、或は斷食して心を無慾無爲にするのである、或は肉食を絶し、
 或は火食を絶す。みなこれ濁つた心を清淨にして澄ませんためである、俗に『正直
 の頭に神宿る』といふ諺があるが、心が統一せられて水晶のやうに澄み渡ると期せ
 ずして神がその人の心の中に現はれて來るものである。

▲修養法の第一は減食である。一定の期間減食する

▲位の熱心ある位なら先づ有望である、忍耐のない

▲ものは到底修養法を會得することが出来ない。

其處で愈々これから修養法の實行といふことになるのであるが、其の數多修養法の中で心身を鍛鍊するに最も單純で都合の好いものは減食法である、即ち最初は三日間の減食であるが、この減食は可成困難な業である、これが出来るやうになると正式に七日の減食をするのであるが、この方法は後で精しく説明する。最初人は先づ日に一合の粥を食つて三日間の減食をして見るがよい、その空腹の苦痛が耐へられるならば有望である。若しその位な忍耐が出来ない人は到底難行苦行などいふ激しい習練は出来ない、況んや術を得て自分の精神を律し、自分の靈魂の自在力を以て、他人の靈魂の秘密まで知らうといふやうな域に達し得られるものでないで、先づその三日間の減食の試験に及第した人は正式に七日の減食をするのであるが、それに先立つて、修業について二三の用意を説明して置かう。

▲初心のものは、成る可く師に就いた方がよい、法

▲と言ひ術といひ、自然の妙法妙術を會得するので

▲あるから、獨習するといふことは、餘程心の確り

▲した人でないと不可ぬ。

法といひ術といひこれを會得するといふことは仲々容易なことでない、譬へば

減食の修業を行ふにしても、減食してゐる中に既にいろ／＼の疑惑が起きて来る、

人に依つては僅かの減食で、非常に心靈の發動を見る人もある、また人の身體の強

弱に依つて減食にも種々結果が現はれて来る、それであるから、秘法秘術を學ばん

とする者は成る可く、斯かる秘法秘術に長じたる仙者若しくは其の道の人を師とし

て習養するが可い、俗に『生兵法は大傷のもと』といふ言葉がある如く、無秩序の

減食や斷食は危険であるから、大に注意しなければならぬ、久米の仙人の如きも女

の脛を見て通力を失つた位のもので、俗人には減食や斷食の中途から食欲や色慾を

誘起して、心身に危険を生じた例は幾らもある、或る修業者は減食の中途で色慾に

誘惑されてしまつて病を醸し、又或る修業者は斷食の中途で大食した爲めに、氣絶

してしまつた、併し飽くまで自分の獨習でやり通すといふ大勇猛心のある人は自ら獨習するも甚だ結構である、秘術秘法は寧ろ斯かる人の學び得る場合が甚だ多い。

▲正式の減食法を教へやう、この方法は誰がやつて

▲も危険はない併し減食などは初めての人が無暗に

▲やるものではない。よくその前後の處置を心得て

▲ゐなければならぬ。

て正式の減食をする方法を教へることとする、先づ第一に場所を撰ばなければならぬ。或る可く俗界を遠ざかつた所がよい、多くは山中や海岸の神社佛閣を撰ぶのであるが冬氣ならば海岸でなければ不可ぬ、また夏氣ならば山中が可い。春秋は孰れでもよい、場所は神社佛閣でなくても茅屋でも、天幕の中でもよいが、成る可く水に近い處を選ぶがよい、これ減食中は常に水浴をしなければならぬからである。そして場所が定まつたらば次ぎは期間であるが、期間は一週間即ち七日である、最初の日の朝食と最後の日の夕食とは都合に依つては普通の食事をとつてもよいが出

来るならば、最初の日の朝から減食の修養にとりかゝつた方がよい先づこれだけの準備が必要であるが、次ぎは減食中の食物のことである。

▲減食中は空腹慾が盛んに起るが、これは絶対に忍

▲耐しななければならぬ、その空腹慾を忍耐するとこ

▲ろに自然と心術の途が開けて来るものである。

次ぎには食物のことであるが、食物は一合の米を粥に炊く、それを一日の食料とするのである、即ち一週間で七合の精米があればよいわけである。この他にこの粥に胡麻鹽をふり掛けて食する、其外に食物は一切不用である、粟一粒と雖も決して口にしてはならぬ、山中ならば大した誘惑を感じずることもないが、海岸の茅屋で減食してゐる、何處からともなく米の炊く香りや、魚を煮る匂ひなどがして来る。そんな時には久米の仙人ならぬ人間、空腹慾を唆られることが甚だしい。併し一旦減食を決心した以上は決して他の食物などを取つては不可ぬ。けれども減食中は斷食と異つて後章で説明するごとく、激しい運動を行はなければならぬのであるから

喉の渴を覺えるものである。この時白湯を適宜に飲むことは自由である、食物は食つてはならぬが白湯を用ふることは許されてある。

然し茲で一寸説明して置かなければならないのは、信仰の問題である。減食中には信仰のある人は常に自分の信仰する神々に仕へることが必要である。

▲どんな人にも信仰の無いものはあるまい、信仰

▲の無いものは幾らあせつても秘法や秘術を修得す

▲ることは出来ない然し信仰する神佛は自由である

秘法や秘術は多くは自分の信仰してゐる神佛の助けを藉る場合が少なくない、宮本武藏の如き、有名な武者でも神の恩澤に浴してゐる、然し宮本武藏の言つた如く『神は敬ふてもお頼みしてはならない』ので、神様の力のみで法や術が授かると思つてゐるのは大なる間違である。然し神を敬ふといふことは心靈を開發すること、大切なことであるから、自分の信仰する神は間斷なく信じて、自分の修養の完成せんことを祈つたがよい。

凡そ人にはどんな人にも信仰の無いものはない。若し神に對する信仰の無いものがあつたにしても其の人は何か信じてゐるのである。譬へば神を信じないにしても自己を信じてゐるものがある、自己を信じないにしても自己の知識を信じてゐるものがある、絶対に信仰の無い人が恐らくこの世の中に無いであらうと思はれるが假令あつたとすると、その人には信ずるものもなく、敬ふものも無く、従つて不思議なものも無いわけであるから秘法や秘術の會得されやう筈がない。

▲減食は間斷なく運動しなければならぬ、併し一定

▲の制限がある、この制限を超えてはならぬし、ま

▲た一定に制限された程運動しなければならぬ。

次ぎには減食中の運動の用法であるが、この運動は所謂難行に屬するものである併しそれが即ち修養の修養たる道であるから苦痛であつても必ず行はねばならぬ、運動の順序から言ふと、先づ神佛を信仰する人は室の一方に神佛の棚を祭る、さうして其の方に向つて正坐する、若し自分を信ずるもの、若しくは他のものを信ずる

ものは一定の方向に向つて正坐すればよい、そして兩手を平行して脊の高さを前方に突き出す、次いで、掌と掌とを合掌し、神佛乃至自己其の他のものに對して祈禱をさしげる。然る後に兩手の五指を組合はすのであるが、この時指と指とは馬の鞍の形に組合ひ、五指は交互に掌の内側に曲するのが普通である。但しそれで指に苦痛を感じるものは雷だ兩掌を合掌したまゝ左右の兩掌を組み合はしても差し支へない。次ぎに合掌したその兩手を膝の上を下す。そして口の中で更に自己の修養の完成せんことを祈禱する、そして下腹に力を充たしながら靜かに冥目する。それと同じ時にその下腹に充たした力をぬくこと無く、その組み合せた兩手を前後に力強く打ち振るのである。この時口の中では靜かに「ウ、ア。アウ」と唱へるのであるがその前後に打ち振る勢は次第に猛烈となるものである。前後に動くのみならず、左右にも振動し、身體も激しく上下左右に動き出し果ては坐つたまゝ一尺も二尺も飛び揚りさうになることもある。組み合せた掌の中には常に鶏の卵一個を入れてゐる氣持で打ち振るのであるが、掌の痛みを覺える時には時々これを解いて兩手を固く握つ

た儘振つてもよければ、又兩方の拳を左右に下げて緩く拳をなして振つてもよいこの間斷なき運動を一時間半づゝ一日に六回行ふのである、その間の休みは十五分乃至二十分である、食事は例の一合の粥を二回に食するを可とするが都合で三四てもよい。食後も二十分位休めば直ちに運動をつゞけてよい、日に六回と言へば殆んどこの運動のために全日を費して修業するのであるから、仲々の難行である、空腹を感ずることが夥しい、最初の一二日は心倦み、身疲れ、唯だく昏倒せん計りである。更に今一つの修業がある、それは水浴である。

▲減食中は冬夏に拘らず常に水浴を行はねばならぬ

▲水浴は最も大切な行事で、如何なる心靈の修養に

▲もこの水浴といふことが必要である。

この運動に次いで重要なことは水浴で、如何なる修養にもこの水浴といふことは伴ふてるものである。減食を實行しても、或は又斷食を修業しても、その修業を續けて行く間に非常に空腹を覺えると同時に、非常の渴を感ずるもので又それと共に

一方では時としては異様の發熱などを感ずることがあるが、その時は水浴をするこ
とを忘れてはならぬ、水浴は獨り身體の穢れを洗滌するのみならず、心の穢まで洗
ひ清めるものであるから、減食中は朝、晝、夕と三度は必ず時を定めて、水浴を行
ふがよろしい、其の外隨時に何度となく水浴するがよい、山中なれば鞆と落ち來
る瀧壺の中に身を投じて一卷の續經を誦するもよい、又白雪の如き急湍に飛び込ん
で、何百度となく神名を唱へるもよい、若し海邊であつたら、澎湃として碎ける波
濤の中に躍り込んで、エイ／＼と氣合を掛けて見るもよい、(氣合のことについては
後章説明する)、減食をして前言つた如く神前に兩手を組み合はして、前後に打ち振
つてゐると、時に依つては身體が左右前後に激しく動き出して、我れ知らず、立ち
上り、身體が火のやうに熱することがある。また或る時は、うと／＼と陶然として
油のやうな眠に落ち入らんとすることがある、斯かる時、冬ならば雪の舞ひ狂ふ波
濤の中に躍り入り、夏ならば肌を劈くやうな瀧水に打たれる時には、眞に吾れと吾
が靈魂の緊張して、時には不思議なる靈魂の作用をも自得することがある。

▲身を洗滌して、神に對するといふ儀式は世界各國

▲の宗教の教義中に到る處に發見せられる。日本は

▲元より印度にも歐米にもある。

水浴の必要なる所以は、一方では身體に最も重要であつて、また大部分を占めてゐる皮膚の鍛鍊をするといふことにも存するが、一面では獨りそれに依つて身體を鍛鍊する許りてなく、心を洗滌するのである、心を洗滌することは即ち凡ての罪と穢とを祓ひ清むることとて、基督教の如きも、先づ神に仕へるに先立つて、洗禮といふものを行ふ、洗禮は即ち心を清めて罪を洗ひ落すのである。印度でもこの水浴といふことは盛んに行はれるので、水浴は宗教の一つの儀式となつてゐる、又熱帶地方でもこの水に代ゆるに砂を以つてせられることがある、水浴でなくして砂浴である、我國でも古代は禊といふものがあつて、歌にも『みそぎぞ夏のしるしなりけり』とある如く盛んに水浴した、水浴は我が國では國民的年中行事の一となつてゐた位である。

▲身體を上下左右に振動せしむるのは、心身を統一

▲するに最もよろしい、諸病の如きも多くはこの方

▲法で癒すことが出来る。

この減食しながら、身體を振動して運動するのは、心身を統一するに非常に効果がある、日蓮宗で『トントソツソツ』と大鼓を打ちながら『南無妙法蓮華經』と唱へるのは矢張一種の心身振動で、心身を統一するのである、故に日蓮宗ではあの『トントソツソツ』の大鼓を打ちながら七十歳にも八十歳にもなる老婆や老翁が四里も五里も道を歩いて少しも疲労しない。又ある宗教の修業法に依ると誦經をしながら兩手を胸の前に合掌して振ひ動かす、これ人の心身には種々靈魂が存してゐるので、その靈魂の中には曲つた靈魂もあれば、穢れた靈魂もある、その幾千萬の靈魂を振ひ動かして活力を與へるのである、即ち靈魂は活力が與へられると、曲つた靈魂は本然として直くなり、穢れた靈魂は卒然として清められて行くのである。

▲動物は振動しながら進化して來たものである。そ

▲これは下等動物の進化して行く経路を見れば分る。

▲振動といふことは靈魂の活力を高潮せしめる。

我々が下等動物の進化して行く状態を見てゐると如何にも振動といふことが必要であることが分る。即ち極めて下等動物——殆んど單細胞のマミーバのやうな動物に神経系統といふものが出來始める時には必ず細胞の振動といふものが起つて來る。太陽の光とか熱とか其他外界の種々の刺激に依つて、細胞が振動し始める、その振動が續いて始めて極めて單純な神経系統が生じて來たのである。下等動物の進化は全く刺激に基く振動に依るといつても好い位で、これを以てしても動物の神経系統と振動と如何に關係が深いかを知ることが出来る。併しながら何も下等動物の振動と神経系統の成立とに深い關係があるから人間も振動しなければならぬといふのではないが、人間は一定の運動即ち振動に依つて靈魂の活力を高潮せしむることを得るといふことは事實である。

▲人の心身の振動と睡眠との間には深い關係がある

▲これは催眠術にも應用されてゐる。單純な催眠術

▲なら誰れにても出来るものである。

心身の振動と睡眠とは深い關係がある、人は軽い一定の振動を與へさへすれば直に眠りを催して來るもので、女が髪を梳かれながら眠るのも、また人が俥に揺られながら眠るのもみなこの軽い振動を感ずるからである。雨の降る音やまた水車の廻る音なども、人の心に一定の振動を與へて眠りを誘ふものである。この定期の軽い振動を人心に與へるといふ原理を應用して出來たものが數呼法といふ催眠術である。この催眠術では術者（催眠術をかける人）が被術者（催眠術をかけられる人）に向つて、先づ『いゝですか、貴方はこれが十五程數を數へる間に眠つてしまひます。』といふ教唆即ち暗示を與へる。そして術者は被術者の眼を閉ぢさせて『一つ二つ——三つ四つ——五つ六つ——』と靜かに幽かに緩やかに數を呼び始める。術者の技倆に依つては十五といふ暗示を與へても十二三位で眠つてしまふものである。これは一例に過ぎないけれども振動の原理さへ會得すれば單純な催眠術位唯

れにても出来るものである。この振動の原理は亦靈魂の開發にも應用出来る。

▲斯様に運動しながら減食を続けることは容易なこ

▲とてない併し何も忍耐であると思つて空腹を我慢

▲して、朝夕の修養を續けて行く。

説明が稍々横道に外れたが、前に述べた如く減食の準備が出来ると直に減食の修業にとりかゝるのである。始めの一日は過ぎた、懸て二日目となると空腹を覺えることが甚だしい、一方では運動しながら『ウア、アウ』と唱へる聲が枯れて來て、渴を覺えることが甚だしい。身體に一種の熱が出て來て、烈しい運動のために諸々方々が痛み出す、唯だ苦しまぎれに大きな聲を出して『ウア、ウア』と手を組んで、身體を左右前後に振り飛ばす。時々水に浴すると、何だか生氣を回復をするやうであるが、暫く運動してゐると、又身體の諸々方々が痛み出して來る、この時膝の痛を感ずるものは端坐を頼して自由に坐つてよろしい。但し十五分乃至二十分の間の休みに身體を横にするといふことは絶対に禁物である。さて二日目も暮れる。夜は運

動の行事さへ濟めば早く眠つてさしつかへないがこの日から陶然として油のやうな眠に落ちることが出来る。

▲この式の減食をすれば三日目の日が一番大切であ

る、大くの人が苦しからうと言つて廢めてしまふ

▲のもこの三日目の日が一番多い

次いで三日目となると空腹を感じることが甚だしい、仕方がないから幾度となく水浴して、思ひ切つて大な聲を出して運動する。すると最う身體が綿のやうになつてしまふ。それに持病のある人はこの三日目の日に必ず出て来るものである、併しこれは何も恐るゝに及ばぬ、如何に苦痛でも、如何に疲勞を感じても猛然として修業を續けて行つたがよい。所が不思議なことにはこの三日目の夕方頃から次第に心が澄み渡つて来る、さうして何處からともなく元氣が出て来る、この時は最う減食の苦業は半ば經てゐるのであるから大に安じてよい。四日目になると不思議な程身體に元氣がついて来る、五日目になれば非常に心が清々として来て、運動するのが

何とも言へない快感を感じて来る、水浴すると身體の靈魂が遽かに眼覺めて來、運動毎に何處も快感が加つて来る、六日、七日となれば心身益々澄み、快感は纏て壯感となり、自分ながらこれ所謂神の域といふものであらうと言ふやうな心境に達して来る、天地萬物みな活き／＼と躍つて来る幽然として心眼が開いて来るのを覺える。

▲この方法で減食をするのみでよろしい、それだけ

▲でも諸君は自分の心にわれとわが心に神境のある

▲ことを知るであらう、これが肝要のことである。

文字で説明すれば何でもないやうであるが、諸君は先づ最初にこれだけのことを行へばよろしい。これ諸君は何物か修得するものである。譬へば撃劍の好きなのはいつの間にか一種の技術を覺てゐる。吾人はある青年が嚴冬にこの減食の行事をしたことを知つてゐるが、その後撃劍の技術がめき／＼と上達して行くのを見た。その時その青年は吾人にさう言つた『私は何故其麼に技術が進んで來たのか自分な

がら分りません。併し確かに敵の體の類れると同時に生ずる敵の隙が、敵の體の類れない前から分つて來た。」と。又弓術に熱心なある老人は、斯ういふことを言つた『減食した後は不思議に弓がよく當る。不思議なものだ。』と。初心のものには單に技術の上達を見て自分ながら驚く位のことであるが、更に心靈上の種々な開發を得んとするには半月乃至一月を置いて今一週間の減食を繰り返して見るがよい。第二度目の減食には大低の人は、第三日目から四日目には必ず何等かの心靈の不思議を實驗することが出来るものである。今茲に二度目の減食に依つて得た二三の人の經驗を説明して見ることしやう。

▲一生懸命になつて運動してゐると、はたと身體が

▲動かなくなつて、夢ともつかず、現ともつかぬ心

▲持になつた。その時の快感は譬へやうがない。

甲は三十八歳の男であるが彼は次の様に語つた『私は最初の減食に非常に壯快を覺たので、第二度の減食を斷行した、その時は夏であつたが、減食してから四日目

の日に、激しく例の「ウア、ウア」の掛聲で振動してゐると遽かに身體の運動が異
 状を呈して來た端坐してゐると、覺えず身體が坐板を離れて、一尺も三尺も飛びあ
 がるやうに思ふ。すると急にはたと身體の動くのが止まつてしまつた、自分一生懸
 命で動かしてゐると思つてゐる身體が少しも動いてゐない、それと同時に自分の自
 體が水のやうにとろ／＼と澄んで來て、遠い村で談してゐる人の聲などがはつきり
 と聽えて來る、「さて不思議だな。」と眼を開くと忽ち身體が元のやうに激しく動き出
 した。」

これは未だ初歩であるが、兎に角心靈開發の第一歩であるとしてよい、その男の
 籠つてゐた山といふのは人里を五里も離れてゐる所なので村人の聲などの聽えやう
 筈がないのであるが、偶然にも心靈が活躍してこの不思議な能力を得たのである、
 併しこれは偶然に出來たのであるから、自分でこれをして見やうといふ要求から出
 たのではない。今一步進んで自分で斯うしやうと思ふ時に出來るやうにならなけれ
 ばならない。

▲ふとしたことから眞赤な玉が見えました。それは

▲餘程美しいものです。私は全く神様であると信じ

▲てゐます、あんな莊嚴なものはない。

乙は二十七歳の女子である、ある夏二度目の減食をしたのであるがその婦人は又次ぎのやうに語つて聽かせた「私の減食したのはある年の冬で、某海岸の神社に籠つてゐたのです。その時は私の外の三四の行者もゐまして、それ等の人は、エイ、エイと氣合をかけて、高い梯子に登り上つたり、又大きい柱に馳け登つたりしてゐました。私はその行者の指導を受けまして、減食して行つたのですが、減食も極端な減食で一日に粥五勺位なものでした、すると三日目の日であつたか冥目して一生懸命に身體を動かしてゐると急に身體の振動が止まつて後の方へたぢ〜と後るやうな氣がしましたが、それと同時に、眞赤な玉が眼の前に現はれて來ました。それは美麗な莊麗なもので何とも名狀のしやうのないものです。またその時の壯快なこと神様と共に何處かへても行つたやうです『私はあの赤い玉こそ世に言ふ神様と

いふものでせう。』この婦人の状態は甚だよろしい。誰れてもこの『赤い玉』は經驗するので、この赤い玉の見える人は臆て、修養して行けば種々の境地を経て、心靈の活力を得來るものである。

茲て特に説明しなければならぬのはこの婦人が粥五勺しか食べなかつたと言つてゐることである、吾人の前に示した例は初歩の人に或る可く苦痛の少ない範圍を示したのであるから、若し指導者があるなら七日間を九日間にしても、又十日間にしても、或は粥一合を粥五勺にしても、蕎麥一椀にしても差し支へはない。或は斷食してもよい。然し斷食には運動は禁物である。この斷食のことについては後章に精しく説明する筈である。

▲次第に心の境地が開けて來ると、更に不思議なこ

▲とが起つて來る、修業者は心の境地が出来る毎に

▲心靈の作用を自得するものであるが決して慢心し

▲てはならぬ。

この眞赤な玉の現はる、境地に續いて來るものは緑の玉、即ち青の玉の境地である。修養者は眞赤な玉を度々見ることが出來るやうになると今度は緑の玉が現はれて來るやうになる、また或る人は最初から緑の玉を見た人もあるし、又緑の雨の降るのを見た人もある。丙は三十五歳の男であるが次ぎの様に語つた。「眞赤な玉の見えることが減食中に三回も續くと、紫の玉に變つて更に緑の玉に變ります。この前後から確かに不思議な心靈の現象が生じて來ます。赤い玉の中に自分の信仰してゐる神が現はれて來たり、またその玉の中から死んだ母の聲なども聽えて來るのである。この赤い玉青い玉と變る時にも身體は無我無宙で振ひ動くのですが、この時の心境はまた赤い玉の現はれた時と較べものにはなりません。尊く、氣高く何だかその中から自分の思ふことを答へて呉れるものがあるやうな氣持がします。」

修業が茲まで進んで來ると今一步である、今一步で洞々たる靈眼が開いて來る。

▲遠くにゐる友人を思ひ浮べて見る、すると不思議

▲や、その友の姿があり／＼と現はれて來る、談し

▲かけて見ると答へて呉れる。

この赤い玉でも青い玉でも、修業者の眼前に彷彿として現はれ来る時は、身體が嵐の如く激動して来ると同時はたと止まつてしまふ、そして何とも名狀の出来ない静かな美しい境地に入るものであるが、これを今假りに神人境と名づける。この神人境にも種々の程度があるが、以上長い間説明して来た減食の修業は、一方では心身の鍛錬、忍耐の修養といふことも含まれてゐるのであるが、畢竟するにこの神人境を求めるとに外ならなかつたのである。この神人境を求めるとが靈魂の自在力を得るといふことなので、この境地にさへ進んで行けば、本書の大眼目である他人の死靈や生靈を自由自在に馳驅せしめることが出来るのである。

さてこの青い玉の神人境は臆で進んで、白い玉と變るのであるが茲に到れば修業は初歩から脱して高級なものとなつて来るのである。青い玉が白い玉に變るまでには、長年月を要するものがある、またいろ／＼邪道に陥るものもあるが、兎に角この青い玉は白い玉の境地に變つて行くものである。最う斯うなれば大丈夫で、靈眼

は洞々として開けて来る。白い洞々たる玉の中に遠い友人を思ひ浮べて見る、すると遠い都の工場で働いてゐる友人の姿か彷彿として、其の白の玉の中に出現して来る。また遠い山中で修業してゐる友人などを思ひ浮べると、『暫くだつたな』と笑ひながらその友人が現はれて来る。此處から談しかけて見ると答へて呉れる。勿論これは、吾々の普通の肉眼で眺めたり、耳で聞いたりしてゐるわけでない。靈眼で見靈音を聴き、靈語を談してゐるのである。尙ほこの境地に達するまでは種々の口傳やヒメコトなどがあるが、これは後章を讀まるゝに従つて自得されると思ふ

▲これで修業に依つて他人の生靈と充分に談話する

▲ことが出来るわけである。この神人境に達するに

▲は以上述べた如く三階段がある、

以上述べた如くして兎も角も修業に依つて、或る人の如きは他人の生靈と談話して、其の意向を聴いたり此處の要求を打ち明けたりすることが出来たのである。畢竟ずるに靈魂の自在自力、即ち神通力、更に換言すれば念力を得ることは、前にも述

べた如くこの神人境を得ることにあるので、本書には減食法の難行に依つて、この修業法を説いたのであるが、尙ほ優秀な靈感のある人は、後章に説く如き斷食法、呼吸法、觀念法等に依つてこの修業をしても差し支へはない。併しこの神人境を得ることは秘法秘術の根本であるからどうしてもこの境地だけは得なければならぬのである。而してこの境地にも程度があつて大凡三階段に分れてゐる、第一階段が即ち偶然に遠方の人聲が聴えたり、赤い玉が見えたりする境地で、全く感應に依るものであるからこれを假りに感應境と名づける。次ぎは赤い玉の中に自分の信仰してゐる神様などの現はれる境地で、これは全く夢とも現ともつかぬものであるから恍惚境と名づける、次ぎは即ち青い玉から白い玉の現はれて靈眼の開く時でこの階段は漸く靈魂の自在力を會得して來るからこれを自在境と名づける。而して法の不思議なるもの。術の靈妙なるものは、全くこの自在境の中にあるのである。此の外境地の開拓に依つては、名刀などの刀止めをする自律境、或は一瞬間に數百里を飛翔する流動境といふやうなものも會得することが出来るものである。

▲世の所謂仙人の術とは何か、これも容易に説明が

▲出来る、また修業に依つて實行も出来るものであ

▲る、主として自在境の開拓である

よく仙人が術を得て空中を飛翔するといふのは、何も仙人の身體が飛翔するといふのではない。如何に仙人なればとて、さう容易に重い身體を空中に運び得るものではない、これは外でもない、仙人が修業に依つて自在境や、流動境を得て、自由自在に靈魂を天翔けらしめるのである。

或る仙人は、鞍馬山から立山に僅か五分経たない中に行つて歸つて來た。その仙人は笑ひながら『何あに一分も経つものではありませんよ。併し五分位かゝつたといふのは出發する用意が必要だつたものですから。』と談した。靈魂の活力は驚くの外はない。其他天狗の術を得て自由自在に天翔るといふのも、靈魂の自在境を得てこれを活用するに過ぎない。

▲斷食は如何にしてするか、斷食でも修業出来るが

▲斷食は減食法より難しいものであるか、斷食に依

▲つて自在境を得ることが出来るか。

これから少し別の方法を記述しやう。減食で自在境が得られると等しく斷食でも得られる。減食と同じやうな場所を選ぶことはかわりはないが、斷食には運動は絶対に禁物である。自分の信仰する神に對して靜かに祈禱する位はかまはないが、身體を振動するやうなことをしてはならない。併し水浴は間斷なくした方がよろしいて先づ修業者は下腹に力を充たして正座してゐるのを普通とするが、或は横臥しても仰臥しても差し支へはない、斷食であるから食物は一切口にしてはならないけれども、白湯若しくは冷水は常に之を用ゆるがよろしい、斷食には身體に水分が不足すると非常に危険を生ずるものであるから白湯若しくは冷水は常に用ゐなければならぬ、餘り氣が倦んで來た時には靜かに、自分の信仰する神名や經典など誦するものよろしい。概して言ふと減食よりも斷食は難行に屬する方で、餘程忍耐強い人でないと終りまで仕抜くことは難しい。併し自在境を得ることは減食より却つて近路で

あるかも知れぬ、減食ではこの境地に達するに順序を経て進まねばならないのであるが、**断食**では直ちにこの**自在境**に到達することが出来るのである。

▲断食中の心得は如何、若し中途で断食を排せねば

▲ならぬやうな事が起きた場合には、どうしたらよ

▲ろしいか。断食には二通りの方法がある。

断食中の心得は數多くあるが要するに身體から水分を絶たぬやうに冷水若しくは

白湯を飲むこと、間断なく水浴をすること、成る可く激しい運動をせぬことであつ

てこれは以上述べた如くであるが、断食すると非常に渴を覺えることは誰れしも經

験するところである。それか断食の日が重ぬるに従つて非常の發熱を起すもので

ある。その時は適宜に瀧の冷水に打たれるとか、海水に浴するとかするがよろしい

然し身體が非常に力を失つてゐる時であるから激流や、深水の中に入浴することは

危険であるから謹まねばならぬ。今一つ、若し中途で断食を廢せねばならぬことが

あつたとすると如何なる措置をとつたらよろしいか、一旦断食を決した以上は自己

の怠慢や挫折で中途で廢めるといふことは無い筈であるが、或は止を得ない事情のために、廢めなければならぬことが無いとも限らない、その時は除々と食事を取ることが肝要である。長い斷食の中途であつたら、始めは蜜柑の如きものを少し取り、次ぎに粥を四分の一碗、次ぎに半碗、次ぎに一碗、二碗といふ風に順次に食物を取らねばならぬ。若し斷食の中途で遽かに大食する如きことがあつたら直ちに大病を引き起すものである。以上の心得が終ると其處で愈々斷食を實行するといふ順序になるのであるが、斷食は大凡二通りある。これらは即ち直ちに斷食に入る方法と次第に食物を減じて行つて斷食に入る方法とである。但し初歩の人は後者の方をとつた方がよろしい。

- ▲ 漸次に食物を減じて行つて、七日目に絶食し、十日間静坐した人の實驗談、最後の一週間は屢々
- ▲ 不思議な状態が生じた。

Mといふ青年が二十七歳の時である。Kは思想上いろ／＼の煩悶を起して、自殺

しやうと思つたが、その決心を齎して、日光の山奥の古寺で二十一日の斷食をした。その時の實驗談は次ぎのやうである。『私は直ちに斷食はしなかつたが最初の七日間に漸次に減食して行つて、八日目の日から斷食に移つた、斷食を始めて七日間は思案の上にて得るところは大にあつたが、心靈上の變化は起らなかつた、最後の七日には屢々不思議なことを經驗した。ふと自分は國元の妹がどうしてゐるだらうと思ふと百里も遠方にゐる妹の聲が聽えて來た。すると誰れかと談してゐるらしいので能く聴くと母の聲である。自分は覺へず「あーい、あーい」と呼んで見た、するとその聲の遠くまで行くこと、十里、二十里と傳つて行くのが如何にもあり／＼と感ぜられた。』と。又次ぎのやうな實驗も語つた。『十八九日目の夕方であつた、私は水浴して靜かに坐してゐると突然、風の音がごうと鳴つて過ぎた。すると自分ははつと思つたけれども仕方がない——その風の音と共に自分のたましひが二里も三里も遠方の方へ吹き飛ばされた。自分はその間風と共に遙か遠方まで飛んで行つたのであつたが、自分の身體は寺の中で何をしてゐたか知らなかつた。斯う言ふと自分は

夢でも見てゐたやうであるが全く夢でも何でもない確りとした現であつた。かゝる
實驗は獨りこの夕方のみでなくその翌日にもあつた。翌日は夕方の鐘の音に驚かさ
れたが、その時も鐘の音と共に五六丁も先きの方へ漂つて行つたが、鐘の餘韻の靜ま
ると同時に、再び元の身體に收まつてしまつた。私の實驗に依ると不意にたましひ
が肉體から分離する時には名狀しやうの無い恐怖を感じるものである。』その青年は
更に談しつづけた。『二十一日目私は蜜柑を一個だけを食しました。その味の好かつ
たことは到底談しやうもない。その翌日は少量の粥、その翌々日は粥に少量の鶏卵
を用ひましたが、これは後で聴くと甚だ惡つたさうです。』以上は實際の談話である
が、斷食中の心の状態を語るものである。

- ▲四日目に鉛色の光が頭の中から湧いて來て、身體
▲中に張つた。その夜は天井を透して空の星が、如
▲何にも鮮かに見えた。

S は四十歳の婦人であるが、一週間の斷食を試みて、透視の經驗を得た。その婦

人の語るところは次の通りである。『私はある事情から思ひ切つて一週間の断食をしました。丁度その時は十一月でしたが、十一月の一日から断然食を絶ちました。その間は常に一室に閉ち籠つて静坐してゐたのであるが、白湯は頂きました、すると四日目の午前でして静坐して、誦經してゐると、忽然として、頭の上が鉛色に輝き始めたと思ひますと、その光が忽ちに身體中に漲つて何とも言ひ様のない快感を感じましたが、併しまた非常に驚駭しました。その間は十分も續きましたでせうか、その鉛色の光が次第に透明になつて行くやうに思はれましたが應てばつと消えてしまつて、ふと我に歸りますと何だか夢のやうな感じがしました。丁度その日の夜で『私の喫驚したのは約三十分間位天井と屋根とを透して空の星が透視されたことです。私は心から驚いて、室から馳け出して空を見ますと、室で見た時と少しも異つてゐないのです。併しこれは全く事實です、私はこれから以後人間の靈魂の不思議な力に全く驚いてしまひました。』

▲断食中には容易に自在境に達することが、出来ず

▲これは多く観念法でやつてゐるやうである。観念

▲法で自在境を得ることは極めて優れた方法の一つ

▲である。

さて斷食してこの自在境に達する方法であるが、これには種々の方法がある。その中でも多くの修業者が行つてゐるのは観念法である。この観念法にも、理路即ち知識から進んで行く観念法と、直覺即ち氣分から進んで行く観念法と二通りある。理路即ち知識から進んで行く観念法は、人々に依つて種々に異つてゐる、甲の人は呼吸法（これは後章に説く）を併用し、乙の人は自分一個の知識を或る一定の方面へのみ集中しそれに依つて自在境を得てゐる。これは人の性格にも依り又知能にも依るので、孰れの方法を採用しても差し支へない、併して茲では初學者の便宜をはかつて、古來多くの修業者に依つて行はれて來た直覺法即ち氣分に依つて自在境を得る方法を説明することとする。尙は進んで學ばんとする人々は後の諸章を一讀せらるれば自得せらるゝ所があらうと思ふ。

▲直覺法、即ち氣分を本として靈魂の活力を得る方

▲法は甚だ多い。併しその中には極めて廻り遠いもの

▲の、極めて困難なものもある。

○○○直覺法、即ち氣分を本として靈魂の活力を得る方法は甚だ多いのであるが、茲て

は斷食中に修業し易いものゝみを説明するのであるから簡單で誰れにも實行し易い

一二の例を選ぶことゝしやう。第一は月觀といふ方法である。これは斷食の中から

修養にかゝるのであるが、正座して下腹に力を集め其の下腹を月と觀するのである

言ひ換ゆれば、自分の下腹が無色透明、明煌々たる月と思ふのである。併し仲々初

の中は困難であるが、氣を落ちつけてさう思ひ詰めてゐると、下腹が次第々に澄

み渡つて來るのである。澄みかけても初めのうちには、容易に澄まない。漸く澄み

かけたと思ふと雜念が湧いて來る、さうすると折角澄みかけた下腹が曇つて來る、

併し段々と修業してゐる中に一分澄み、二分澄み、三分澄んで半分位澄んで來ると

占めたものである。聽て八分澄み九分澄みして來るとその下腹が洞々として月の如

く光り初めるけれども、八分九分といふ所で仲々澄まない、一寸した曇が來ると思ふと全部濁つてしまふ、其の時にはその月のやうな下腹の上に、自分の心でヒメコトを書いて見ると或は自分の信ずる神名や佛名を書いて見てもよい。さうすると又晶然として澄み渡つて來る。

▲下腹が洞々として月のやうに澄み渡ると這度はど

▲うする。其處にいろ／＼の觀念を思ひ浮べて見る

▲すると觀念の實影が映じて來る。

この下腹が洞々として月のやうに澄み渡つたらどうする。其の時は先づその下腹の上に二三の神名や佛名を書いて見る、或は自分の名を書いて見てもよい。それで確かに最う曇が來ないと思つたらその下腹の上に自分の死んだ友人や生きた友人の姿を思ひ浮べて見る、すると時に依つて、自分の友人の顔などがぼんやりと見え初めて來る、最う斯うなれば自分の靈眼は開いて來たので、一生懸命その友人の姿を見んことを努めて來れば必ず見えて來るのである。獨り生きてゐる友人許りでない

死んだ人の姿も現はれて来る、これが即ち自在境である。尙ほ段々と修養して行く。とこの月と観じた下腹に死んだ人の姿を映じて、これと會話を交換することなども容易に出来るのであるが、茲まで到底するには一通りの苦痛ではない。幾回となく修業した人に始めて自得出来るのである。

▲この月觀の修業中には心靈にどんな變化が起つて

▲来るか、種々の現象が起つて、驚くことが屢々あ

▲る、が併しこれは特種の人に限られてゐる

この月觀を修業した人の實驗に依ると種々な心靈の現象が起るといふ。Sは若い學校出の僧侶であるがその人の談話に依ると『私は斷食して、ある僧侶に教へらる儘にこの月觀を修業したのであるが、仲々澄まない、八日目に初めて漸く下腹が洞々として月のやうに澄んで來た。月と言つても丁度水に映つた月のやうである、そして最うその時は斷食の日數が重つてゐたので身體が非常に力を失つてゐましたが不思議なことにはこの下腹が澄み渡ると非常の元氣が出て來ました、自分の小さい

姿が今にもその中に映りさうなのです。自分の姿ばかりでなく世界のあらゆるものが、その下腹の中に映つて来た、自分一つの小宇宙にでもなつたかのやうな感じがします。所が奇妙な現象が生じたといふのは、この腹の中に自分の知らない僧侶がちよいくと顔を出します、一寸小供が『ゐないくばー』をするやうに映つて來ます。終ひにはその人達の談話まで分るやうになつて、『俺は何處の僧侶だ』と名を名乗つたりなどするのです全く驚いてしまひます。これは一寸不思議のやうであるが、修業者の屢々實驗する所である。或る神道の修業者の如きは『天狗にいたづらをされて困つてしまつた。』いふやうなことを談してゐるが、這の間の消息を語るものである。併し這麼經驗は多く特種の人に限られてゐる。

▲隣の室でカツタ、カツタと時計の音がしてゐたの

▲て、下腹にその時間を映して見ると、針が三本あ

▲つた。驚いて行つて見たが矢張り三本あつた。

これは極めて興味の多い實驗談で、修業者には極めて参考になる談してある、N

であるが、月觀について次ぎの

やうな談話をした。「斷食してゐると或る高僧が下腹を海月と思つて見ろといふので、一生懸命で下腹を海月の如くならんことを思つてゐた。すると妙なことには次第次第下腹が海水に浮び漂つてゐる海月のやうになつて來る。すると高僧が來て「どうだ」と言ふので「全く海月のやうになりました」と答へると、「ではこの字を書いて見ろ」とつて「」「△。」の四字を教へて呉れたので、教へられる儘に下腹に書くと、その書いた文字が一つ一つ眞白く光る。そこで「字が奇麗に光ります」と答へると、高僧は「ではそれに隣の部室の器具を映して御覽」と言つて笑ひ乍ら去つた。所で私は隣の室の机を映して見やうと思つたが仲々映らない、靜かに正座してゐると隣の部屋でカツタ、カツタと時計の音がするので、その時計を映して見たが、這度はあり／＼と映つた。針は幾時を指してゐるか見やうとしたが、針のあることは分つてゐるけれどもも分明しない、それで自分は觀念でその映つた時計の針を一寸觸つて見た。すると驚く可きことはその針が何千回とも知れず迅速にく／＼廻つたが、聽てその二本

の針が二個に分離して、次ぎに三個となりビツタリと止まつてしまつた。短針は十時を指してゐて長針は二時を指してゐたので、丁度其の時は午前十時十分と分つたが、今一本の針が六時と七時との間を指してゐるのがどうしても分らない。自分は靜かに立つて隣の部室の時計を覗いて見ると、その時計には確かに二本の針の外に一本の長鍵があつた。これには自分ながら驚いてしまつた。』

▲みこを打つとかいちこを寄せるとかいふのは、多

▲くはこの觀念法に依るのである、併しその中には

▲術の拙いものも優れたものもある

茲まで説明して來ると減食や斷食に依つて修業さへすれば世の所謂みこを打つとかいちこを寄せるとかいふものが可能であることが會得されやう。併し世の多くのみことかいちことかいふものは實際の修業に依らずして御籤や、理由もない占に依つて行ふものが甚だ多い。斯くの如きものは即ち營業的修業法に依るもので、眞の心靈を開發し、それに依つて自在力を得たものではない。我が國の古代から行はれ

てゐる大古即ちフトマニといふものも神人境を得た人に依つて始めて行はるゝもので、單なる祈禱や誦經に依つて得らるものではない。所て茲に一言説明して置かなければならないのは、何故減食や斷食の如き難行をしなければこの心靈の活力を得ることが出来ないかといふことである。

▲減食や斷食をしなくても出来る人は無論ある、併

▲し多くの人は減食や斷食をした方が修業が早い、

▲しないで出来る人は無論必要はない。

人の天分によつて靈能の豊かな人であれば何も減食や斷食をしなくても出来る人がある。併し多くの人は日常生活の羈絆に煩はされてゐて精神の集中といふことが出来なくなつてゐる、幾ら音を聴くまいと思つて、一寸した音を聴くとそれに氣を取られるまた美酒や美色のためにはどうしても心を動かされ易い。これにはどうしても人の精神を一方に偏重せしめる必要があるのである、前に言つた如く、吾人の精神の底には**十〇〇**といふ靈魂があつて、この靈魂が發揮される時、始めて大なる

活力が生じて來るので、その靈魂を開發するにはどうしても人間の物慾といふものを斷たなければならぬ。即ち物慾を斷つて、人の精神を一方に集中する時に始めて、吾人の日常生活に知つてゐない靈魂の力が得られるのである。生れながらに靈能の豊かな人で、靈魂の自在境を得るとまでは行かなくても、透視などの出来る人は往々あるものである。

▲或る人は、毎朝早く起きて、地平線から昇つて來

▲る太陽を見てその中に友人や知己の姿を發見しそ

▲の消息を知つた。

減食にも依らず、斷食にも依らずして靈能を發揮した實例は幾らもある、丁といふ老翁は信仰の深い人であつたが、毎朝早く起きて地平線から昇つて來るのを樂しみにしてゐたのであるが、その地平線を今將に離れやうとするときにその太陽の中に種々の人の姿が現はれるといつてゐる、遠い土地にゐる友人なども、見やうと思へば太陽の中に見ることが出來ると言つてゐる。そしてその太陽の中に現はれて來

る人々の面持に依つて其の人達の吉凶禍福が分かるといつてゐる。その老翁の談話は左の如くである。

『私は七八歳の頃から七八十年の間毎朝早く起きて太陽を拜して居ります、雨の降る日の外は一日として缺かしたことはありません。三萬餘日の間毎朝太陽の面を見て居りますと、つい五六年前からの事ですが、太陽の面に神様の幣帛や鳥居などが見えて来て、次いで私の親戚の人達の顔が見えて来ました。私は親戚の人達の様子を知るには今頃手紙など出したことはありません。朝早く起きて太陽の面を見れば、その人の様子は直ぐ分ります』で『どうしてそれが分ります』と再び問ふと老翁は笑ひながら『あの太陽が地から離れやうとする時、その將に離れんとする一瞬間、その人の顔があり／＼と現れます』と答へた。次ぎは呼吸に依る修業法の例を示して説明することとする。

▲呼吸と心靈とは深い關係がある、呼吸の調節に

▲依つて心靈の活力を得たものも古來尠くない、

▲スエーデンボルクの如きものそれである。

振動して修業する方法、觀念して修業する方法の外に數多の方法があるが、その中に呼吸の調節に依つて修業する方法がある。もとゞゝ人間の呼吸と心靈とは深い關係があるもので、その調節に依つて心靈の開發を得たものが妙くない、前にも言つた如くスカンデネヴィヤの神學者、スエーデンボルクの如きも、呼吸の調節に依つて幽界に入つた。或る時は精靈界に入つて死者の靈魂が如何なる状態にあるかといふことも視察し、また或る時地獄に入つて、地獄にゐるものゝ員數、や地獄の影像などを見聞し、これを著述として公にした。このスエーデンボルクの爲し得た呼吸といふのは内部の呼吸といふのである、スエーデンボルグといふ人は總て世界を内外の兩面に見たのであるが、外部の世界よりは内部の世界は、一層高等の世界であるといふので、人の呼吸にも内部と外部の二様あるが、普通人のするのは外部の呼吸である、併しこれよりも深刻なのは内部の呼吸で、吾人はこの深刻な内部の呼吸に依つて、内部の世界と接することが出来るのであるといふ。即ち彼はこの内部

の呼吸に依つて幽界を旅行することが出来たのである。靈眼の炯々として明ある彼の如きは眞に驚くべきである。彼の傳記に依ると彼はこの内部の呼吸をする間は殆んど呼吸を閉塞して約三四時にも及んだといふ。

▲彼には死人の靈魂がどうしてゐるかはよく分つた

▲がまた遠方の友人の消息なども分つた西洋人とし

▲ては珍らしい人である。

斯様にスエデンボルグには精靈界のことなども明に分つたが、それ許りでなく遠方の友人などの消息もよく知ることが出来たのであつた。彼がジョン、ウエスレーに書を寄せた談は有名である。彼は、或る日ジョン、ウエスレーといふ人に書を寄せて『貴方は私と靈界で會ひたいと思つてゐなさるでせう』と言つてやると、ウエスレーはこの手紙を受け取つて喫驚してしまつた。ウエスレーはその手紙を受けとつた時友人と一所にゐたのであるが、スエーデンボルグのこの書面を見て『全く、あの人と會ひたいと思つてゐるといつた。すると、その時は丁度ウエスレーはある

約束で諸國を講演して廻らねばならぬ筈の時であつたので『私は貴君と是非會いた
 と思つてゐますが、今は丁度旅行に出發しなければならぬ時ですから、どうか
 今から六ヶ月後にお願ひいたしたいものです』と返事をする、スエデンボルグはそ
 れに又答へて『折角ですが私は來月二十九日にはこの世を辭して、靈界に行きま
 すから。』といつた。そしてスエデンボルグは彼の言つた如く翌月二十九日には靈界に
 入つてしまつた。彼の修養は實に驚くべきである。言彼の如く、行亦彼の如くんば
 我が國のみこを打つことやいちこを寄せる位はなんでもないのではないか。

▲呼吸の調節に依つて、靈妙の力を得て、物を透視

▲した婦人がゐた所謂千里眼だといつて世間から

▲騒がれたことがあるこれは全く事實である。

スエデンボルグが呼吸の閉塞に依つて靈妙な洞感力を得たことは以上の如くであ
 るが、我が國で禪の高僧などで、五時間若しくは六時間に互つて呼吸を閉塞してゐ
 た側は幾らもある。猶ほ呼吸の調節に依つて、不思議な力を現はしたもの甚だ多い

以前に千里眼婦人として名高かつた御船千鶴子女史の如きも、十日間訴り深呼吸をしてゐるうちに發作的に物體の透視が出来るやうになつた。世間では唯だ彼女が千里眼になつたことのみを喧しく言つて、如何にして千里眼になつたかをいふものは少ないが、彼女は全く深呼吸に依つて得たものである、併し彼女の透視を爲し始めたのは、彼等が千里眼になりたいたいと思つて、自發的に研究したのではなく、偶然であつたから、いざ試験といふ時、怯病になつたり感情を害したりして思ふやうに出來なかつた。然し彼女が偶然に透視の出來るといふことに成功したのは深呼吸をして呼吸の調節をはかつたためであつた。

- ▲茲まで説明して來ると、秘法といひ、秘術といふ
- ▲もの會得は充分に出來るであらう。然らば愈々こ
- ▲れから秘法、秘術の種明しをする。

茲まで説明して來ると、遠方の人の消息を知る法といひ、人の靈魂を引き寄せるといひ、或は死者の靈魂を呼び起すといひ、或は他人の心を知る法といひ、みな靈

魂の活力を應用するといふことに外ならぬ、即ち自己の内部にある靈魂を開拓して、その力を利用することである。これには各自夫々の性格の異なり、體質の相違に依つて、各自の工夫を盡さねばならぬ、修業と工夫とこの兩者の相並んで修得せられる時、始めて秘法といひ秘術といふものが得られるのである。畢竟するに、秘法といひ秘術といひ其の種明しをすれば、修業と工夫の二字に盡きるのである。凡そ人の爲し得るものは如何なることでも出来ないといふことはない、唯だそれは各自の修養と鍛錬とに依つて修得すること、自分自らの心の境地を截り開いて進むことである。唯だ心靈を研究せんとするものの大に考慮しなければならぬことは吾々の住居してゐる世界は、實際の俗界であるが、神通力の世界はこの俗界の規則が常箴らぬといふことである。

▲吾々の社會では眼でなければ物が見ぬ、また耳で

▲なければ音が聴えぬ。けれども靈の世界ではこん

▲な肉眼や耳は多くは必要がない。

吾々の世界では美しいものが見えるといへばどうしても眼を使用しなければならぬ、また好い音楽が聴えるといへば耳で聴くの外はない。けれども内部の世界、即ち靈の世界では、物を見る強ち肉眼を持つてしなければならぬといふことはない、またどうして耳でなければならぬといふことはない、この點は大に注意すべき點で多くの實驗者の意見を總括して見るにどうも靈魂の力といふものは時間空間といふものに全然超越してゐる所があるやうである。即ち早く分り易く言へば、靈魂は時間や空間に依つて左右されるやうなものではない。千里一瞬といふことを言ふが本當に靈魂の及んで行く力は千里一瞬である。又電流などは甲地と乙地との間に絶縁體あれば絶對に通じないのであるが、靈魂の力はそんなものには一向平氣である。嵐の中も雨の中も之れを貫いて行くものである。

▲今一つ、修業に大切なものは、正しきにつくとい

▲ふ心である。この正しきつくといふ心が無かつた

▲らいつまでも上達しない。

靈魂れいこんの自在じざい力を得るといふこと許りゆるてなく、何事なにごとに依よらず、事ことを學まなぶには今いま一いつ正ただしきにつくといふ心掛こころがけがなければならぬ、それそれでなければいつ迄まで経たつても上達じやうたつの域みきに達たつするものでない。多くおほくのは一つの修業しうげふをし始めはじめると、その修法しうほふが間違まちがつてゐることを知りつゝ尙なほそれを固持こぢする傾向けいかうがある。これは業わざを學まなぶも、是非ぜひ心得こころえなければならぬことである、自方法じほうほふが劣せつつてゐて、他たに優すぐれた方法ほうほふがあると思おもつたら直ただちに初等しよたう八級はつきふからやり直なおすといふ心得こころえがなくてはならぬ、斯かういふ術じゆつを習しよ得とくするものに限かぎつて獨ひとり天狗てんぐになり易やすいものである、術じゆつには又上またうへの術じゆつがあつて、優すぐれた術じゆつに接せつする毎ごとに其その心境しんきやうが開ひらいて行くものであるから獨ひとりよがりよがりは術じゆつを學まなぶもの、禁物きんぶつである。要えうするに正ただしきにつくといふことが修業中しうげふちゆうの心得こころえである。若もし中途ちゆう途とにして獨ひとりよがりよがりになつてしまつて術じゆつの上達じやうたつは止とまつてしまふ、飽あまで自分じぶんは足たらないものとして、自分じぶんの業わざを研といて行くことが肝要かんえうである。

▲要えうするに術じゆつといふものは、自然しぜんに従したがふといふのが

▲原則げんそくで、正ただしい理りに反對はんたいして行おこなはれるものでない。

▲これは柔術でも剣道でも同じことである。

英國の思想家ベーコンといふ人の言葉に『自然は、自然に服従するものに依つて征服せられる』といふことがある。これは術を學び道を體得するものゝ、格言とすべき言葉である、即ち自然を征服せんと欲すれば先づ自然に服従しなければならぬのである、或る武人は『敗けて勝て』と云ふたのは即ちこれで、これは言葉を換へて言へば自然に順應せよといふことなのである。如何なる術も自然に逆つて得らる術はない、自然に順應して自然の道を體得するの外はない。柳生十兵衛が格言とした『降ると見れば積らぬ先に拂へかし、雪には折れる青柳の枝。』といふ古歌はこれまた自然の道に順應するの理を解いたものである。自然に順ふ——柳生流 剣道の秘傳も茲にあつたのではあるまいか。

▲天地の勢に順ふて、自己の靈能を研ぎ、天地の理に從つて工夫を積むことが肝要である、さうすれ

▲ば何事もみな自己樂籠中のものとなる。

術はもと理より出たものである。理は即ち天の攝理であつて、自在力を有する人の靈魂と雖もみなこの攝理の中にある。故に修業者は修業の效を積むに従つて天地の攝理を鑑照する能力を得て来る、即ち天の理を悟つて来るのである。人は如何なる術を工夫するにも、その工夫は、工夫の優れたるものだけ天の理にかなふものである。歐陽明が工夫を説いて、天理即效夫といつたのは意味ある言葉で、人間は正しきについて正しき工夫をすれば、其處に自然の道を會得して来るものである。故に俗言に『正直の頭に神宿る』といふのもこれを言だに外ならない。天地の勢に順ふて自己の靈能を研き、天地の理に従ふて工夫を積むことが道を學ぶものゝ取べき最後の方法であらう。以上は修業の方法を説いた後には却つて蛇足を附するの觀があらうが、これからヒメコト即ち秘言を傳授するにこれ等のこと理解して置かないと種々の誤解を生じ安いから一言附して置くのである。

▲ヒメコト即ち秘言とは何か、これは如何なる効果

▲を有するものであるか、これは説明すべき限りて

▲ないが、茲で敢て説明して見やう。

ヒメコトとは秘言即ち秘密にしてゐる言葉である、日本の古來からの思想にはみなヒメコトといふものがある。この秘言といふものは普通の文字や言葉で現はすことの出来ない意味の言葉を、簡単な數語の言葉や、身振り手振りて傳へるので、非常に貴い秘言でもその道に達し、その心境を開いたものでないと何のことであるか分らない。武藝者が「エイエイ」と掛ける氣合（氣合のことは後に説く）の中でも劍道の流儀に依つて種々の秘言がある。併しそれはその流儀の外のもの聽いて何のことだか分らない、徳川時代に谷泰山といふ學者があつたがこの人は、内外の學に造啓の深かつた學者であつたが保建大記や同打聞等多數の著作を残したが、彼の著作には書中重重の箇所はみな書するに秘言を以つてした。即ち谷泰山先生の著作はこれを読むと雖も、其の道の人に就かなければ分らない、この如き書は直接に師から言葉で授けられなければ分らないもので、これ師から直接にその秘言を傳授して貰ふことを口傳といふ、古來の劍道の秘傳とか柔術の極意とかいふものは多くは秘言

て口傳を以つて授けられたものである。であるから他人の人がその秘傳などの書かれたものを見ても分らないやうに出来てゐる。然らば何故昔は一般に公開せずして其の道の奥儀を秘してゐたのであらうか。これは東洋の一つの習慣で、西洋でも昔はさうであつたが一面では自分の道は長く後世に傳へたいといふ傳統的の精神にもよるものであるが、一面からいふと道を尊敬するといふ貴い觀念からである、又第二には道の深奥なものはこれを文字で傳へることが到底出来ない、禪でも『不立文字』といふて決してこれを文字の上には現はさなかつた。尙ほヒメゴトといふものは、種々の内義を有してゐて、天理の攝理鑑照と相俟つて會得の行くものである。それからこのヒメゴトに關聯して今一つ説明しなければならぬことは我が國の言葉といふことである。

▲『敷島の和の國は言靈の咲榮ふ國ぞ、眞幸あれか』

▲『し』と古歌にあるは、我國の言葉の地民族の言葉

▲に比較して優たる所以を言ひ破つたものである。

前に一寸我が國の和歌には不思議な力が籠つてゐることを述べたが、我が國には言葉に秘密の力が溢れてゐるものが澤山ある、一體我が國では古來から言葉をコトタマ即ち言靈といふて、一つ一つの言葉を一つ一つの靈魂であるとした。故に言葉を尊重し言葉の中に不可思議力なる靈能のあることは一種の國民的精神であつたと見てよい。古歌に『敷島の大和の國は言靈の咲榮ふ國ぞ、眞幸あれかし』といふが如く、我が國の言葉位豊富な意味を有してゐる言葉はこれを外國に求めることが出来ない、その一つ一つの言葉には百千萬の意味を有してゐるのである。我が國の言葉には一つの音にも百千萬の意義がある。さういふと徒らに誇大して言ふ様であるが全く日本の國文學を研究したものは誰れしも言ふことなので、この日本の五十音といふのは世界に冠絶した内義を有してゐるものである。明治以前にはいろ／＼と日本の言葉の音韻について研究した學者が尠くなかつたが現在では殆んど無いといつてよろしいこれは斯の道のために惜しむべきことである。日本の音韻や言葉について一々説明してゐると長くなるから前に減食法の時用ひたる掛聲「ウ」と「ア」と

について説明して置かう。減食の修業をしたものは誰れしもこの「ウ」と「ア」との不
思議な音韻に氣がつくてあらうが、この「ウ」は心霊の榮えくる聲である、「ア」は
心霊の漲り放つ聲である。「ウ」は内から出て行く聲、「ア」は出てから總てを包む聲
である。斯ういふと何でもないやうであるが、あの減食行事の場合外の「カ」音や
「サ」音では到底疲榮して出来るものではない。これが日本語の研究すべき點、また日
本の音の興味ある點である。

▲日本には昔から秘法を行ふ時に九字といふものを

▲切るこの九字とは何であるか、九字は如何にして

▲切るか、これにも種々の秘事がある。

日本には昔から秘法を行ふ時に九字といふものを切る、この九字とは何である。

これには道々に依つて種々の秘傳があるが茲に其の一つを明かさう。九字とは指を
以つて空中に九つの縦横線を描いて、心霊の活力を得る法である。多くの人は空中
に縦横九つの線を引きながら臨兵闔者皆陣列在前の九語を口の内で唱へるのである

が、これに依つて自由に心靈の自在境を得ることが出来る、併しこの臨兵闔者皆陣
列在前の九字は他の語を當嵌めたに過ぎないので、秘義は別にあるのである。これ
九つの線を以て空中に日本の古代文字の神といふ字を描くのである。田若しくは田
といふ文字は日本の古代の神といふ字で又田とも書く、田の中の米といふ字は、埃
及でもこれを神と譯する、或る學者の説によると米即ちコメはカミ即ち神であると
も言ふ、要するに九つの線を空中に描くのは神を一吸吸の間に顯現せしむるのでこ
の秘法を九字といふ、或る術者の如きは隱身法即ち忍術にこの九字を用ひて自由自
在に姿を晦ましたことがある。また或る修業者は盛んに燃えてゐる猛火の前にこの
九字を切つたが悠悠々として猛火を渡つてしまつた。併しその實驗は一々説明すると
限りがないから茲には簡單に説明して置く。

▲修業者は病人の前でフワフワフワと息を吹いた。

▲すると病人が矢庭に立ち上つて、神名を唱へたが

▲段々健康が恢復した。

今一つ我が國には伊吹きといふ術がある、これは或る神道の修業者などに待つてゐるものであるが修業者が、或る種の病人に對つてブーッ、ブーッと息を吹きかけるとその病人の病氣が直ち恢復してしまふ、これは我が國のみでなく基督なども、山を下つて種々の病者を治したといふ史實があるので、世界の各國にあることである。併し基督のやつたのはこの息を吹きかける法ではなくて手を觸れる法であるがこの手を觸れる法も我が國にあるがこれは後章で別に説明する。吾人の知る婦人は三十二歳で或る生靈に崇られたと稱する婦人であつたが、この婦人はこの伊吹きの方法に依つてわけも無治療せられてしまつた。婦人は數ヶ月に亘つて床に伏し、時々譫言などと言ひ、また胸に激しい苦痛を起して『あの女が此處を噛みつくく』と叫びながら胸を抑へて走り廻つた。或る有名な修業者が來て、數時間に亘つて神名を唱へてゐたが、時々「エイエイ」と激しい氣合を掛けてゐた、女はその氣合を掛ける毎に臥してゐた床から起き上つては倒れたが、最後に大きい聲で『行きますくお許し下さい』と叫び出した。すると修業者はその婦人の方に向つてブーッ、

ブーッと息を吹きかけたが、その時は恰も狂人のやうになつて神名を唱へて其儘床の上に倒れてしまつた。修業者は、『最うこれで大丈夫ですから。』と言ひながら辭して去つたが、それからその婦人の病氣は濕紙を剝ぐやうに恢復して行つた。この修業者の行ふた術は即ち伊吹きといふ術である。人間の息は言葉と同じく靈で、その靈の不思議な作用に依つて、病氣が活つてしまふのである。猶ほこの伊吹きにも種々のものがあつて、その方法も一定してゐないが、この伊吹きの中に刃止めはぶの法といふのがあるが、これは多く武藝者に行はれた方であるが序に述べて置く。

▲甲武藝者はエイと許りにて武藝者に向つて白刃を翳したると乙武藝者は口の中で神名を唱へてゐたがブーッブーッと息を吐き出した。

道に達したる人が息を吹きかけると如何なる名刀と雖も一寸の間刀が止まつてしまふ。吾人は或る甲武藝者が乙武藝者から秘傳を授かるのを耳聞したが、兩武藝者は是初白刀を以つて激しく切り結んだ。すると最後に乙武藝者がエイと氣合を掛けると覺えず甲武藝者が白刃を取り落す。乙武藝者が『分つたか』と言ふと甲武藝者は

「分りました」と頭を下げる。これで秘傳が一つ許されたのであるが他人には何ごとであるか分らない。すると今度は乙武藝者が甲武藝者に向つて『その白刃を以つて一生懸命に切つて来い』と命ずると甲武藝者はその白刃を翳して乙武藝者を切らうとするが、どうしても切ることが出来ない、真向から真二つと許り切り下した刃は鳥の羽根のやう外れてしまふ。乙武藝者はと見ると、口に神名を唱へながら甲武藝者に向つてブーツブーツと息を吐いてゐる。これが所謂剣道の極意刃止めの秘術といふものである。應て乙武藝者は大きくブーツと息を吐くと、甲武藝者はあつと許り後ろに倒れてしまふ。古來から斯かる秘術を學んだ人は甚だ多いので、有名な勝海舟翁などもこの術を心得てゐた、翁は或る時は馬に乗つたまゝ平然として彈丸雨下の下や、槍の穂先さて圍まれた中を往來したが、少しも身に危害の及ぶやうなことはなかつた。又或る時は意見の衝突した敵方から覘はれて、砲の名手から覘ひ撃ちをされたがその彈丸は鬚を撃ち落ちたけれども身に當るやうなことはなかつた。また海舟翁と同時代の人で西郷南洲翁もこの伊吹きの術を心得てゐた。翁は重

要な命を帯びて白刃で圍まれながら敵地に使したことも一度や二度でなかつたが、その時は常に二三丁行く毎に大きな息を吐き出したといふ談がある。翁の如きも確かに心靈の開悟を得た人であつたことは疑ひない。

▲掌を兩方の脊の上に置いて、秘言を唱へてゐた。

▲が、エイ、エイと氣合を掛けた、すると兩手の舉

▲がらなかつた人が、易々と舉げ始めた。

これも秘法の一つであるが、手を觸れて諸病を治する方である。これは前にも言つた如く、西洋では二千年前基督が行つたことで、我が國にも古くから行はれてゐる、術者は掌を病者の病所に當て、秘言を唱へて、自己の心靈を其處に集中すると病者の心靈も亦この病處に集まつて、病氣が次第に愈えて來るものである。この術も修練さへすれば或る程度迄は出来るもので、道を得るに従つて上達して來る。吾人は甲術者が或る病者を治療してゐるのを見聞することを許されたのである。

が、術者は両手の掌を病者の脊の上に置いて暫く神名を唱へ、然る後秘言を唱へて纏てエイ〜と氣合を掛けると、術者は病者に向つて『兩手を上げて御覽なさい』と命じた。病者は一寸躊躇したか術者の言ふ儘に兩手を舉げた。すると病者は全く喫驚したやうな面持であつた。この病者は長く脊のこりを病んで兩手を舉げることが出来なかつたのである。吾人は不思議に思つて、『兩掌を脊に置いて氣合を掛ける時はどんな氣持がしますか』と訊くと病者は『何とも申しやうのない氣持がしますそれから掌の置いてある所が非常の熱を感じます。』と言ふ、吾人は重ねて『その熱といふのは』と尋ねると『それは〜熱い熱ですけれども火箸で火傷する時などよりどうも熱さが異つてゐます』と答へた、これは所謂念熱といふものである。

▲人間には念熱といふものがある、恐しく高度に達

▲するもので、到底普通の檢温器などではかること

▲の出来ないものである。

この念熱といふものは、矢張一種の靈の力に依つて生ずる熱度で或る人に依つて

は恐ろしく高度に達するものである。或る學者は次ぎのやうなことを言つてゐる或る患者を試験して見たが、その患者はどうした身體の調子か、檢溫器を腋の下に挟んで置くとき非常に昇る。然も手で觸つて見ただけではそんなに熱があるやうにも思はないのであるが、唯だ不思議なことには檢溫器では非常に昇つてゐる。そこで醫者は驚いてどうしてそんなに昇るのであらうか。懷爐でも身體の中に隠して置いてそんな惡戯をするのではないかと怪んだが、また一方檢溫器の方ではどん／＼と水銀が昇つて行く、四十一度や四十二度ではない、普通の醫者の持つてゐる檢溫器では水銀がすつかり上り切つて到底測ることが出来ない、そこで一層高い熱を測ることの出来る檢溫器で試験したことがあるが恐ろしい程熱が昇つた。醫者は益々怪んで何か細工をしてゐるのではないかと檢べて見たが何も細具などはしてはない、さうかと思ふこの患者は、又精神の持ちやうで、ひとつと熱が降りた時には是迄て高い熱度の人であつたとも思はれぬ、醫者から見ると四十二度三度など、云ふ熱度は非常な大病で殆んど死に近い患者であるが、それがどうかした瞬間に熱が降りると當前

の元氣に恢復する。これは其の學者の實驗した所であるが、全く人間の體內には心靈の或る作用に依つて驚くべき熱度が起る、その念熱を自發に起して病者を治療するのであるが病氣に依つては不思議に治る、恰も虚言でも言つた様に治つてしまふのである。或る學者はこれは一種の肉體電氣を起すので電氣療法と同じ理由であるなどいつた人もあるが、最近では念熱であることが分つた。

▲エイ、エイと氣合をかけると身體がりん／＼と振

▲動する、それと同様に襟元が冷やりとする氣合の

▲力は不思議なものである。

今一つ最後に説明して置かなければならないものは氣合といふことである。大凡修業者といふ修業者はみな氣合といふものを掛けるエイ、エイと天地も澄み渡れと許り氣合を掛ける。武藝者でもみなエイエイと氣合を掛けて術を争ふ、この氣合といふものは何であるか。これに種々の意味があるが第一の意味は氣合を掛けて、自ら雜念を拂ふのである『エ』といふ聲も『イ』といふ聲もみな貴い澄み渡つた聲で鋭い音を有すること五十音中この二音の右に出るものがない、鋭い音であると共にあら

ゆる悪靈を切り開いて進む聲、また榮え昇る聲である、修業者でない唯だの人でも下腹に力を籠めてエイエイと大聲する憂鬱な想念を拂ひ去つてしまふのである。第二の意味はこれに依つて自己の靈能を實現するので、即ちエイ、エイと聲を掛けると自己神人境が開けて來るといふのである。この聲音には古來不思議な力があるとせられ、人間の死靈などで宙を迷つてゐるものなども、この聲を聴くと肅然として開悟の方向に向ふともいはれてゐる。又武藝者などで術に達した者は、エイエイと氣合を掛けると二十間も三十間も天狗飛びをする、又忍術などを研究してゐる人も、エイエイと氣合を掛けられると術がどうも思ふやうに行はれぬと言つてゐる。或る修業者に治療せられた病者の言ふ所に依ると『あの氣合をエイエイと掛かると總身がりん／＼と振動して、それと同時に襟元が冷やりとします。』といつた、氣合の力は恐ろしいものである、猶ほ氣合の掛け方にも人に依つて種々の秘言がある。

▲心靈の研究は東洋が家元で、印度亡び、支那衰へ

▲た今日心靈の世界的研究をやるのは日本人の天職

▲である、又日本人にして始めて出来る。

以上は心霊について一般を述べたに過ぎないが、猶ほこれ等の秘法秘術はこれを求むの心を求むれば日本全國到處に口傳やヒメゴトとなつて残つてゐる。これらのものはみな世界最古のもので日本人たるものこの口傳やヒメゴトを研究し、猶ほ其他の古書に依つてこれを統一し、これを新らしい智識として世界に提供するのは日本人の天職ではあるまい。もと／＼これ等の心霊の研究は東洋が家本であるがその家本たる東洋でも印度亡び、支那衰へ、今世界に威武を示してゐるのは獨り日本のみである。而して日本は西人も批評せし如く『東洋文化の凡のものを納れたる寶地』であつて、東洋文明のあらゆる粹は日本に集つてゐる。これらの粹を組織し統一して行くのは日本民族の責任である。西洋でも曾つて千八百八十二年英國で知名の學者が集まつて精神の研究をしたことがあるが、この時の様子などを聞くと東洋の研究の十分の一も進んでゐないことは知れる。日本人たるも今や大に心霊の研究に力を盡すべき時ではなからうか。

神祕開放
變化自在

忍術魔法術

卽席魔法使ひになれる祕傳

双龍軒主人講述

忍術とは
シノビの
術である

鼠小僧と
業術の修
石川五右
衛門の忍
術

▲我邦では昔から忍術と云ふもの

▲があるが之れを要するにシノビ

▲の術に他ならぬものである

併しシノビの術と言つても、石川五右衛門や鼠小僧のやうな犯罪をする目的で發達したのではない、茲に稱してシノビの術と云ふのは、言葉を代へて言つて見ると、徹頭徹尾心身を練磨すると言ふ意味に方つてゐるのである、去れば忍術とは、其の實は堪へ忍ぶ、何でも辛抱する、辛抱して練磨する、然うすると人間の身體、殊に未だ二十歳以下の人であると、其の練磨の功は實に意外

の境にまで發達するものである、普通の人から之れを見ると、ドウしてアンナに不思議な眞似が出来るかと思嘆極まるやうになれるものである。

▲武士道の精華として日本の守護

▲神になつた乃木大將は近代に於

▲ける忍術の大名であつたのだ

乃木大將の忍術の極意は、日本第一の兵學家山鹿甚五左衛門先生の秘傳にして、山鹿先生から大石内藏之助に傳へ、大石内藏之助は實に此の忍術の極意を極端まで發揮して、然うして成功した結果、不朽の美名を千載に濺はせてゐるのである、世間の人の能く言ふことに、なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍するが堪忍と云ふ道歌があるが、此の意味は人から恥をかゝされても、唯だ徒づらに指を加へて引込んでゐると云ふ譯ではない、大石内藏之助や、乃木大將のやうに、人の出来ない辛抱して、一代に死して百代に生きると云ふ遣り方をす

るのが唖かに忍術の目的とするところである、我邦は昔から此の忍術と云ふことが發達してゐた爲に、其れが一種の社會的暗示となり、謂ゆる日本魂なるものが鍛へ上げられて來たのである、併し凡ての物には一利一害があるのは免れない、正宗の銘刀を狂者に持たせたやうに、忍術の發達と云ふことが害になつて、昔から之れを利用して大盜賊を働いたものも澤山ある。

▲驚くべき謀反を企てた由井正雪

▲のやうな豪傑もあつたが併し泥

▲棒となつても忍術の達人なら

大體に於て卑しい心のないもので、單に義賊として世の中に敬慕される許りではない、鼠小僧の墓は、實に四十七士の義士の墓と相對して、今でも香華の絶へ間のないのは不思議の沙汰ではないか、之れ彼は深く忍術と云ふ事に悟入してゐたからの結果である、更に溯つて忍術の歴史を調べて見ると、世界に於

ける偉人傑士は悉く此の術を體得してゐたに違ひないと判つてゐる、東洋では釋迦のやうな大聖人でも、最初の出發點、即ち如何にして我が此の佛教を宣布しやうと考へた時に、ドウしても此の術の力を借りねばならぬと決心したのであつた、されば釋迦の蹟を次いで、一代の菩薩となつた龍樹其の人の傳記を見ると、斯う言ふことが書てある、龍樹は南天竺の人婆羅門の種であるが、聰明穎智、夙に忍術を能くしたものである、彼は此の術を以て凡ゆる人生の快樂を極めんと欲し、一日志しを同じくする他の忍術者と共に王城に忍び込み、隱身術を以て意の儘に宮女を姦し、面白可笑く數月の間を暮せしが、一朝城内の防禦が非常に嚴重になつてゐたので、終に其の身を亡ぼされんとする危険に逢ひ爾來翻然として忍術を惡用することを止めて、然うして立派な尊者となつたのである、乃て今、龍樹菩薩の遺された大論と云ふ佛典を見ると、口を極めて釋迦の忍術の巧みてあつたことを賞讃してゐる。

▲其れで見ると釋迦に忍術のある

忍術大名
龍樹善

傳教大師
と妖術の
話

釋迦の難
行苦行と
忍術

瓦礫を金
にする術

身を虚空
にかける
修煉

印度の隱
術と忍
術の話

▲のは鳥に翹ありて高翔し得ると

▲同じやうなものだと言つて

心を虚空に繋げ、鹿重の色相を滅じ、常に空輕の相を取つて精進心を發揮し
智慧を以て心の力が能く此の身を舉げ得るや否やを籌量し、進んでけ詰く諸物
を變化せしめて、地を水と作し、水を地と作し、風を火と作し、火を風と作し
諸物をして悉く轉易せしめ、金を瓦礫と作し、瓦礫を金と作さしめた力を有つ
てゐたとある、而かもかゝる忍術は畢竟するに、釋迦が難行苦行して得たとこ
ろである、之れに依つて考へて見ると、我が行基菩薩でも、傳教大師でも、
弘法大師でも皆な忍術の體得に依つて布教されたものに極つてゐる、併しなが
ら降つて此の忍術が武道の方に用ひられるに至つた歴史を穿鑿して見ると、之
れ亦た面白い變遷を有つてゐる、今其の道に詳しい劍客者の話を聞けば、古來
よりの謂ゆる武藝十八番と稱せられる藝術の中で、特殊の三術と言はれて最と
も祕密に傳へられて來たものは寔かに忍術に相違ない、けれども忍術なるもの

は、劍術、柔道、馬術、銃砲の術のやうに、表面に立つてゐた藝術とは思はれないで。

▲ 黒暗々裡の裏面に於て神出鬼没を

▲ 逞くしてゐた術であつたのである

▲ から餘りに尊ばれた術でない

併し其れは蔭に廻つて秘密に策を弄すると云ふを避け、我が武士道の精華として、武士氣質の當然であると思つた風格の爲に、幾分か卑限のこのやうに感じられた所爲である、遂に其の結果から、忍術は極めて特殊な範圍に限られた人々の間に、専修される次第となつて、之れが修得者、俗に言ふところの忍術使ひと呼ばれるものは、多くは甚だ身分の軽いものであつた、其れと共に一方には武士以外にも、例の鼠小僧等は必ず忍術に巧みなものであつて、之れを盜賊する上に應用したものである、然らば鼠小僧は如何なるところから忍術

を習ひ得たかと云ふのに、彼は生れつき機智に富み、僅か十五歳か十六歳かの時にすら、岡ツ引に追はれて永代橋の上から隅田川に飛び込んで、水を潜つて逃げ去つた位の小僧であつたのであるが、併し何人かの系統のある傳授を受けたものでない限りは、後世に名を遺すやうな名人とは成り得なかつたのである。

▲鼠小僧は實に武藝の達人にして

▲忍術の名手であつた今泉霧太郎

▲と云ふ先生から

立派な忍術の極意を授かつてゐたのである、此のことは鼠小僧の實録を讀むとチャンと書いてある、當時其の霧太郎と云ふ先生は彼に對して、イヤ盜賊にしても貴様の了簡は面白い、昔し我が朝の大盜賊、熊坂長範と云ふものは、生涯盜賊を働らいてゐたにも拘らず、九十餘歳の長命を保ち、遂に源の義經の手に掛つて美濃國は青墓と云ふところて斬り棄てられた、其れから又、漢土にあ

つた盜賊の張本、其の名も盜跖と稱するものは、不敵な大惡人でありながら、之れは亦た長壽を保つて壘の上で大往生を遂げてゐる、されば太史公と云ふ當時の大學者が、盜跖は日に不辜を殺し、人の肉を膾すにし、暴戾恣睢、黨を聚むること數千人、天下に横行し、竟に壽を以て終はる、是れ何の徳に従つたものであるか、天道は是であるか非であるかと嘆息してゐるではないか、けれど是等の惡人どもでも畢竟するに何かの善根を施してゐたものに違ひないと考へられる、思ふに貴様も斯うなつては逆も改心は出來まい、賊なら賊でも仕方がないから、吾輩は最早其の方とは生涯絶交を致すに依り、此の後若し何れの所で邂逅つても、決して言葉を換して呉れるナ、其の代りに平素から其の方の望んでゐる法術は授けて遣はすと言つて。

▲ 即ち鼠形變と稱する術を授けて

▲ 遣つたのであつた此の鼠形變と

▲ 云ふ忍術は

隱形五遁の中の一つで、五行即ち木火土金水を利用して自分の形を變ずる
 忍術であつて、例へば水中に隠れても溺れず、火に入るも焼けず、木に依つて
 姿を隠し、或は金屬に依つて其の身を隠し、土に隠れて姿を變ずると云ふやう
 なもので、之れを夫の一代の名人とも言はれた講釋師、俗に泥棒伯圓とまで評
 判された講釋師でも、其の實例を擧げてお話すると言つて、右大將賴朝公が治
 承四年の八月に石橋山の伏木隠れと云ふのは、此の木に依つて形を隠したも
 のである、金に依つて姿を變ずると云ふのは、山伏のする劍の刃渡り杯と云ふ
 術である、其れから火に依つて形を隠す火遁の術と云ふのは、八犬傳の中に
 ある犬山道節が圓塚山の猛火の中で姿を隠すの類である、亦た修驗者の中には
 火渡りの術と云ふこともある杯と云つてゐるが、實際は甚だしく間違つてゐる
 講釋であると言つて可い、五行を利用する五遁の術と云ふのは、素と之れ易學
 の中から割出されたもので、鼠形變と云ふのは睨かに土遁に屬した忍術のこと
 を指したのである、要するに家の棟を歩行いたり、梁の上を歩行いたりするの

てはなくて、却つて大塊を利用し、土と云ふものを利用するのが本體にして、夫の鼠を利用するやうなことはホンの附屬した術であるのだ。

▲忍術使ひの方で云ふ鼠の術と云

▲ふのは別に人間が鼠に化け得ら

▲れる譯ではないのである

併しドウかすると忍術者は鼠を使用せねばならぬ場合もあるから、其れが訛傳されたものである、一體鼠と云ふ動物は、住み馴れないところへ行くと必ず狼狽するものである、即ち忍術者は此の鼠の狼狽する作用を利用して見るところがある、かゝる場合には普通の法則では、大概は二匹の鼠を持つて行つて、室内へ夜中に忍び込む場合に、先づ此の中の一匹の鼠を放して見るのだ、然うすると鼠は甚だ狼狽して室中を駆けまはる、グツスリ寝込んでゐるものでも、此の物音に目を覺まして見ると鼠である、何だ鼠かと云ふので安心する、斯ウ

なると鼠ねずみと云いふ觀念くわんねんが頭あたまの中なかに入はいつてゐるので、少すこし位ぐらゐガタスタしても鼠ねずみと思おもふものである、乃そこて更さらに今いま一匹いっぴきを放はなして見みる、又またもや室内しつないを駈かけまはる、けれども既すでに鼠ねずみであると思おもつてゐるので、ヨシ再びふたたび之こを見みても大おほいに安心あんしんして寢ね込んで了しまひ、今度こんどは少すこし位ぐらゐの足音あしおとがしても忍しのびの曲者くせものであると思おもはぬやうになるものである。

▲大體だいたい此この忍術にんじゆつが武道ぶだうの方ほうに用もちゐ

▲られるやうになつてから三つの

▲流儀りうぎに分わかれて發達はつたつしてゐるが

其それは伊賀流いがりうと芥川流あきたがはりうと甲賀流かふがりうとの三派さんぱであつて、各自かくじに獨特どくとくの長所ちやうしよを有もつてゐるとは云いふものゝ、大體だいたいに於おては同じおなひやうな目的もくてきの下もとに發達はつたつしたのであるから、格別かくべつの變かはりはないものである、其その中なかで最もつとも世よに聞きこへてゐるのは伊賀流いがりうであるが、此この忍術にんじゆつの開祖かいそは百々地ももぢ三太夫さんだいふと言いひ、其その幼名えうめいを三吉さんきちと呼よび、

全然山の奥で生長したものである、然うして九十六歳の壽を保つて歿してゐるところを見ると、短軀精悍の小兵ながら、餘程壯健の男であつたに違ひない、然うして彼は幼少の頃には山の奥で猿を友としてゐたものと云ふから、何のことはない淺草公園の江川の球乗りてやるブランコの藝や、凡ての輕業のやうな眞似でも、現今の器械體操をやらしても、優に第一流の名人と云はれる位の素質を有つてゐた男に違ひない、従つて百々地の忍術は猛練習をして稽古すれば誰れにも出来る藝であると信じられたのは無理のない話である、彼は太閤を以て聘せられたのを悉く辭して了ひ、慶長の末年頃から、伊賀の國の名張と云ふところに止つて、町道場を開いて忍術指南を以て一生を了つた人である。

▲此の忍術伊賀流の開祖百々地三

▲太夫の傳記に就ては頗る面白

▲逸話に富んでゐるが其の中で

忍術は夜
陰に乗ず
るもの

豊臣秀吉が朝鮮征伐の時に、大阪から指揮をしては手ぬるいと云ふので、肥前の名護屋へ本陣を進めてゐたのは誰れても知つてゐる通りであるが、當時彼れは秀吉のお氣に入りである曾呂利新左衛門と共に、秀吉旗下の武士となつてゐたのであつたが、或る日のこと、秀吉が退屈しのぎに、百々地三太夫を召し出して、何か多勢の眼の前に於て、極めて巧妙なる忍術の極意をやつて見ると命じられたことがあつた相である、然るに三太夫は直にお受けして、凡て忍術は夜陰に乗じて試むる業なれば、今晚此の陣中の大廣間に於てお試み相成たしと言上して、對手として曾呂利新左衛門に秀吉の御佩刀を確か握らせてゐて其れを三太夫が少しも手を掛けずに奪ひ取つて御覽に入れると云ふので、秀吉も頗る興味を感じられ、コレ三太夫、首尾能く此の太刀を取つた時には、之れは手が年來祕藏のもので、日本に唯だ一つしかない微塵丸と號する名刀ではあるが暎と其の方に興へるぞと仰せられたので。

▲三太夫は甚だ勇み立つてそれ〴〵

▲支度を調べて日の暮るゝを待

▲ち受けて廣間へ行つて見ると

蒲生氏郷を筆頭に北國の諸大名が綺羅星のやうに居並んでゐる、中央の一段高いところに秀吉殿下が御出座あり、其の少し前の側のところに、例の微塵丸を駈と押へて曾呂利新左衛門がゐる、更に亦た其の側には、之れも甲賀流の忍術の開祖である戸澤山城守が控へてゐる、而して燈火は萬燈と點ぜられて煌々輝いてゐる、諸大名方一同は百々地三太夫は如何なる手段を以て、此の新左の持つてゐる、太刀を取るのてあるかと、眼ばたきもせず眺めてゐると、何れからともなく一匹の鼠が現はれて來た、之れを見た秀吉はハ、ア三太夫め、古臭い鼠の手を用ひるワイと思つて見てゐると、いつの間にか鼠が二匹となり三匹となり、十匹となり二十四匹となり、遂には數百匹となつて、座敷中を駆けあぐるき、果ては其の鼠が居並ぶ諸大名の衣へ上り、肩の邊より頭の上へ飛びあがると云ふ光景となつて來たので、アチラでもコチラでも、扇子を以て頭上の鼠

を追ひ拂つてゐる、スルト新左衛門の頭上へは特に數十匹の鼠が飛びあがつたので、ハット驚く途端に太刀を持つてゐた手が一寸放れると、不思議なことに其の太刀が矢を射るやうに何れへか飛んで行つて了つたのである。

▲乃て秀吉公は非常に感服なされ

▲て約束通りに太刀を與へた上に

▲更に一千石の祿を増した

然るに其の跡で段々當時の種明しを聞いて見ると、鼠を放したのは僅かに十匹にして、其の他は木の葉を飛ばせて驚かしたので、新左が驚いてゐる間に太刀の鑑へ魚を釣るてぐすて縋つた糸を引かけ、ツイと引張つて取つて了つたのだと云ふことである、今日と違つて幾ら萬燈を點じても、蠟燭や行燈の火では手早くやれば斯のやうなことは出来たであらうと思はれる、此の百々地三太夫は、前にも言つた通り末年には伊賀の國の名張と云ふところで町道場を開いて

ゐた爲に、伊賀の城主であつた藤堂家は長く此の忍術を以て名高くなつてゐたものであつた、何にしても文化文政年間の頃までは伊賀の城下にはお忍町と云ふ長家町さへ出来てゐた位であつて、多數の忍術使ひが父祖相傳なりと云ふ看板で之れを修業して、其の流儀を傳へ來つたのである、然うして忍術は其の研究法と共に、最とも祕密を守られてゐたものであつたのだから、容易に其の練磨の祕法を他人に洩らすやうなことはせず、従つて忍術に關する記録の類は、若し此の相傳者のない場合には大概焼き棄て、了つたものである、されば今日にまで傳はつてゐる忍術の記録は、僅かに二三の家に傳はつてゐる外には、決して他で見ることに出来なない珍品になつてゐるのである。

▲忍術の名人であつた百々地三太

▲夫が太閤殿下の御前に於て曾呂

▲利の持つてゐた太刀を取りしは

これは近頃になつて其の方法を學問的に研究されて、心理學の方から言へば轉氣法と云ふ術を使つたことに方つてゐる、轉氣法と云ふのは、或る一定の方向へば秀吉の面前に居並んでゐた諸大名や曾呂利新左衛門でも、如何にして忍術使ひが、此の太刀を奪ひ取りに来るだらうと思つて、一同のものゝ精神活動は悉く其の方向に許り注がれてゐた時に、一匹の鼠が出て來た、更に亦た二三匹の鼠が出て來た、斯くして段々に鼠の數が殖へると夜のことではあるし、之れは必らずモツと澤山の鼠が出るに違ひないと豫期してゐたのであるから、最早木の葉をバラ／＼蒔いても一時は其の木の葉が鼠に見ゆるやうになるものである、其の虚に乗じていつの間にか太刀の鎧へ糸をつけたので、かゝることを轉氣法と云ふのである。

▲忍術は學理の上から研究するこ

▲とも出來るが亦た大いに氣轉を

▲利かすと云ふ所に秘密がある

有名なる劍客者として、荒木の前に荒木なし、荒木の後に荒木なしとまで謳はれた又右衛門が未だ幼少の頃、大和の國正木坂の柳生十兵衛先生の道場に於て、此の轉氣法を利用して大勝利を得たと云ふ逸話が遺つてゐる、當時十兵衛先生は、一匹の大猿を愛されて、此の猿に根よく劍術を教へ込んだから、生來より身輕の動物だけに、木劍を持つて人の頭を打つたり、足を拂つたりするところが如何にも機敏になつて、初學の劍術使ひは逆も此の猿に敵せぬ位に上達してゐた相である、されば十兵衛先生が自身で教ゆる門弟は、先づ此の猿と仕合をして勝つたもの許りと定めて、其れ以下のものに對しては、凡て代稽古の先生に依つて教授されることになつてゐたが、幼少の又右衛門未だ其の頃は丑之助と呼ばれてゐた相であつたが、ドウかして此の猿に勝たうとしたが、却々に力が及ばない、然るに或る日のこと、丑之助は意氣揚々として十兵衛先生に向ひ、今日こそは猿を負して御覽に入ると大言を吐いて、先生の目の前で猿と仕合をした時に。

▲今日は不思議にも猿の太刀筋が

▲亂れるので十兵衛先生も妙に思

▲つて氣合の聲をかける

猿は十兵衛先生の聲を聞くと、其の時だけは太刀がキチンと立ち直る、併し暫くすると又亂れて来る、其の中に丑之助が一本打込んで猿の頭をボンと打つた拍子に、丑之助の木劍を握つてゐた手からゴロリと一つ赤い柿が轉げ落ると猿は逸早く之れを拾つて一目散に逃げて行つたと云ふことがある、之れを見て十兵衛先生は丑之助の機智に感じたと云ふことで、劍道の極意も實にかゝる所に存するものであると賞讃されたとあるが、之等は全然轉氣法の活用の方つてゐるものである、かゝる事は武道の方に許り活用されるとは限らない、或る病院の出来ごとであるが、賄方の料理番が俄に發狂して、大きな出刃庖丁を振り廻して誰でも皆殺しにすると騒ぎ出し、院長の書齋へと飛び込んだことがある

然るに其の院長は振り反つて此の料理番を見て、極めて平氣な顔で、何だお前の顔は、額への中央へ紙幣を貼つてゐるぢやアないかと云つて机にあつた鏡を出して遣つた、スルト此の料理番がボカンとしてハテナと云つて、其の鏡を見た透間に、院長は遠く逃げ去つて危いところを助かつたと云ふ話もあるが、之等も此の轉氣法の活用に他ならない。

▲一刀流の開祖として有名なる劍

▲士伊東一刀齋は頗る此の術を驅

▲使した名人であつた。

一刀流を皆傳されて、天晴れの武藝者となつた神子上典膳は、伊東一刀齋の許に足を留めて、毎日薪水の業を取り、又は老人の足腰を叩き、其の合間に武藝の奥儀を訊ねると、否々武藝の奥儀は一朝一夕には知れ難し、自然に會得を致す場合もあるべし、唯だ怠らぬと云ふことを以て第一と致す、手を以て教へ

ずと雖も、凡て武藝者の心持は無暗に人を打つべきにあらず、打たれざること
が專一である、然る故に油斷を大敵と云ふ、今より汝、少しても油斷を致さば
予は必らず汝を打つべし、努々油斷すべからずと云つて、典膳が油斷あれば、
一刀齋は手當り次第にビシヤリと打つ、スルト典膳が恐れ入りましたと云ふ、
乃て先生は、兼々申附けて置いたてはないか、何故に油斷を致す、師弟の間柄
なれば生命には及ばず、萬一敵であつたらば、汝が生命は立所に失くなつてゐ
る、以來はキツト心を附けよと云はれたので、典膳之れより更に油斷を致さず
一刀齋は又、典膳が水を汲みて、谷間から上つてくる所を待ち受けてビシヤリ
スルト亦た典膳が恐れ入りましたと云ふ、之れ決して油斷致すなと申すに如何
致したかと叱られる、今度は典膳が便所に入り、用便をたして出やうとする
ころをビシヤリ、恐れ入りました、或は寝てゐるところをビシヤリ、之には少
し典膳も驚いて、先生に伺ひますが寝てゐるところを御打ちなさるは、作法に
もない少々御手荒いことかと存じますと云ふと、黙れ、汝を打たんと考へてゐ

る敵てきであれば、寝ねてゐると申まをして何なんぞ猶豫ゆうよすべき、之これが武藝ぶげいの極意ごくいであるぞ寝ねたからと申まをして、心こころさへ縮しぢめてゐれば、人ひとの忍しのんで來くるのに眼めを覺ささぬ法ほふやある、乃そこて亦また典膳てんぜんは恐おそれ入りましたと云いふ、サア斯かウなると、寢食しんしょくさへ安心あんしんしては出で來きない、然しかるに或ある日ひのこと、食しょく事じを致いたしてゐるところへ一たうさい刀さい齋さいが進すみ寄よるから、サテはと覺悟かくごしてゐるところへビシヤリと來きたから、ハツと體たいをかはすことが出で來きたので、一たうさい刀さい齋さいも大おほいに喜よろこんで、之これは追々おひくの上達じやうたつ、夫それてこそあれ我われも教をしへ甲斐がひありと申まをすもの、ドウか其その心得こころえを忘わすれて呉くれるなと云いはれたので、典膳てんぜんは嬉うれしくて堪たまらず、御褒おほめに預あづかり恐おそれ入りましたと頭かしらを下さげるところをビシヤリとやつたと云いふ話はなしがある。

▲何なんにしても忍術にんじゆつでも劍術けんじゆつでも共とも

▲に之これを練れん習しよする第一だい歩ほは忍耐にんたい

▲と機智きぢとの修養しゆやうに他ほかならない

忍術の傳書に曰く、忍術の忍の字は忍び込むと云ふ筋とは少しく違つてゐる要するに耐忍の忍であるとなつた、之れが即ち忍術を修業するもの、第一に心掛くべきことである、此の耐忍の忍と云ふことを修むるには、軀幹の練習するよりも先づ以て精神の練磨をするのが肝腎である、實に此の精神の練磨こそ忍術習得の第一歩であると同時に、暇かに之れを以て極意とすべきものであるのだ、一體に昔の人、殊に武士道の盛んであつた時代には、非常に精神を練磨したものである、即ち意志を強固にして詰らぬ感情を抑へつける、故に主君や父兄に對して盡す忠孝の情や、朋友等に對する情に至つては、實に熱烈であつたが、併し悲哀や苦痛ある場合に處しては、其の感情を抑制して、容易に之を顔色や體度に表さない、然るに西洋人や支那人を見ると、彼等は外科的治療を受ける爲に、病院の手術臺に上つて、堂々たる男子でありながら、ワイ／＼泣いてゐる相である、我が邦の武士道に養成された人物になると、かゝる場合に處しても平氣なものである、昔しの豪傑北條早雲の如きは、片腕を切開させつゝ、

悠々として碁を圍んでゐたと云ふ逸話が遺つてゐる、之れを日清戦争や日露戦争の時に就て見ても、支那人や露西亞人の捕虜は、メソ／＼泣いてゐたが、我が邦の兵士は縦ひ敵に捕はれやうが毅然として泣くことなどはせぬ。

▲斯のやうに精神を練磨すること

▲が何流の忍術でも必らず其の極

▲意になつてゐるのである

夫の劇場でやることは、多くは作り話であるとは言ふものゝ、先代萩の政岡杯は我が最愛の兒が死ぬのを見ながら、人の前では更に動じない、其の意志の強くて感情を抑壓する力は實に、驚くべきものがあつた、一體に武士道に育つた女は、許嫁の良人が死んでも固く空聞を守つて、如何なる才子や美男が何と云ひ寄ればとて決して其の情に絆されない、之れ意志が強固にして、感情を抑制する力が練磨されてゐるからである、此の風は所謂武士の仲間に許りあつ

たのではなく、學者の方面にもあつて、甚だしいものになると、大豆を一つ握りづゝ食ひ、漸く三度の餓を凌ぎながら經書を研究した大椿や、豆腐の殻ばかり食つて獨學した徂徠先生のやうな人もある、然うして多く學問した人は老ひて益々盛んに勉強し、斃れて後止むと云つた風があつた、更に極言すれば昔の武士的に養成された人は、悲哀苦痛の場合に臨んでも能く其の悲觀を抑制し、却つて之れを樂觀に變ずる、轉禍爲福の法を講じ、其の情緒を煩悶させぬやうに努めたものである、乃て忍術の秘傳書にも。

▲武士と云ふものは、ならぬ堪忍

▲するが堪忍と云つて非常に忍耐

▲の一事に對つて練磨するやうな

事が秘傳とされてゐる、然うして苟も忍術を體得したものが、若し危険に陥つて捕へられても、決して醜體を人に見せぬやうにと教へてゐる、それ故に忍

術使ひはニツト笑つて切腹するものがあつたり、悲哀苦痛の場合に臨んでも、決して醜い顔や、醜い泣聲などを發せず、殊更に笑に紛らすやうに努めたものである、忍術に入るの第一としては以上のやうな精神練磨をするは勿論であるが、先づ其の初歩として整息と稱する術を學ぶのである、之れは即ち呼吸を整へることである、之れは何の爲であるかと云ふのに、他人の耳へ自分の息の音が少しも聞へぬやうにする爲である、其れから臍下丹田を太くして、殆ど禪的の境に入り。虚心平氣の域にまで達するのである、此の整息の術が調つて來ると、今度は變難に對する臨機の方法として、食はないでも滅多に飢へないやうな習慣を養ふのである、即ち絶食しても少しも身體の弱らぬ練習を積むのである、其れから又、眠らずして疲れぬと云ふやうな練習もするのである。

▲昔の仙人は霞を食ひ露を吸ひ雲に乗つて翩翔したなど、云ふ話

▲もあるが

眠らずに
疲れぬ方
術

雲に乗つ
て飛ぶ妖
術

随分コンナことも出来ぬものとは限らぬ次第である、要するに努めて練習さへすれば、驚くほど巧妙の域に達しられるものである、食はず眠らずして疲れぬと云ふ試しは我が邦には澤山あるが、西洋の方にも其の例に乏しからずである、一體古今の英雄豪傑を見ると其の精力の旺盛なること常に萬人に卓越してゐるものである、精力が絶倫であるから、事に當つて邁往して少しも屈しない業を執つては堅忍にして撓まない、然うして之れを運らすに繼續の精神を以てするのである、されば邁往の氣象と云ひ、堅忍の意志と云ひ、或は繼續の精神と云ふも、要するに源泉の滾々たる一精力の發動したものに他ならない、現代の言葉で云へば、精力主義など、云つてゐるが、剣道の奥儀でも柔道の奥儀でも、忍術の極意とするところでも、凡て此の精神の練磨の産物である、ナポレオン大帝の壯時には、如何に困憊した折でも僅かに二時間の睡眠すれば、心身爽然として忽ち精力を回復したと稱されてゐる、故にナポレオン大帝は不可能

と云ふ語を嫌ひ、之れを辭書の中から削り去らんと欲したことのあつたのも、決して偶然ではなかつたのである、瑞典の英主カール十二世は、夙に覇業を中欧に立て、露西亞のペートル大帝を抑制したことが十餘年にも及び、其れより進んでモスコに攻め入り、一擧して其の志を成就せんと欲したのであつたが、不幸にして嚴寒の候と戦ひ、ポルタワの一戦利を失ひ、退いてトルコに入り、更にトルコの皇帝を動かして露國と戦はしめ、ブリュイツの役に將にペートル大帝を捕へんとしたるも、トルコの將軍の中に賄賂を貪つたものがあつて惜しい媾和をして了つたので、カール大王は怏々として樂まず、トルコに居ること暫らくすると。

- ▲強敵が聯合して瑞典の本國を攻
- ▲むると聞いたので急ぎ歸つて之
- ▲れを救はんと欲して

別れをトルコ皇帝に告げ、千七百十四年の十月一日、其の旗下の兵を率ゐて
デミルタシユの行宮を出發した、時にトルコ帝から鹵簿の一隊を附して、道路
を警蹕させ、且つ國內沿道の總督等に勅して歡待せしめたので、カール大王の
車駕の過ぐるところは送迎雲のやうて、早くも日が經つて一ヶ月餘りになつた
然るに本國から飛報があつて、瑞典領のボメラニと云ふところの首府ストラ
ルサンドの急を告げられたので、大王は單騎之れに赴かんと欲し、左右の之れ
を危險視するの少しも顧みないで、獨り侍從のヂューリングと云ふものを從
へて、急に馬を走らしたのであつた、此の時の大王は身に長套を着け、腰に一
劍を佩び、獨逸の士官だと云つて走つてゐたのであるが、平素より此の大王は
餘りに高名の人であつたので、態々路をハンガリーから、モラヴィ、奥地利、
巴威利、ウルテムベルヒ、バラチナ、ウエストフアリー、メクレムベルヒに取
ることに決したので、之れを順當の路に比べると、殆ど一倍半の遠距離となつ
たのである、其れて出發の第一日には、大王が馬を走らしたと終日、夜に入

つても尙ほ疾驅するので、お供をしてゐたヂューリングは如何に少壯の武士であつたとは云へ、困頓すること實に甚だしく、遂に馬から下りて、路側に箕据して大王に謂つて、何分にも人馬共に疲れて夜も亦た闇黒なれば、冀くば宿舎に就かんと願つて見たが、大王は憐ばぬ色を浮べられて、汝は路銀として幾らを持つて来たのかと問はせけるに。

▲金一千兩なりと答へければ然ら

▲ば其の一半を我に附せよとあつ

▲て更に大王は

我れ今、汝の狀體を見るに、畢竟するに迎も我れの道連れとするに足らず、我れは之れより獨行すべし、汝は後より來れと云はれたので、ヂューリングは哀願して、臣豈に陛下に離るゝに忍びんや、已むことを得ずば唯が僅かに三時間だけ、陛下よ、忍びて此に憇はせ給へ、然らば臣の疲れを醫して、然うして

陛下に奉隨せんと願つたが、大王は固く執つて聽き給はず、チューリングも今は其の争ふても無駄なるを知つて、即ち五百兩を取り出して王に捧げた時に、王は更にチューリングに命ぜられて、驛站に就て繼馬を求めさせれば、チューリングは一計を按じ、二兩の金を馬役人に賄ひて、懇々と頼んで云ふには、自分は兄と共に連れ立つて来たものであるが、今此の地に附けるに心地例ならず、暫らく休息して自分の病氣を醫せんと云つて見たが、兄は其の性質が急激の男であつて、自分の願ひは聴き届けられず、獨り自分を此の地に遣して、單騎で走り行かんと欲してゐる、願くば兄に惡馬を與へて、自分の爲には駿馬を與へられよ、然らば自分は二三時間の休息して發するも、必らず兄に追ひ付くべしと頼んだので、馬役人は其の通りにして呉れたが、大王はソナナことゝは少しも知らず、時に夜は既に十時であつた、馬を代へて獨り出發されて見ると道路は闇黒で一寸先も見へず、雪は雨に交りて降り、疾風は甚だしく馬は瘦馬て如何に叱つても動かない、大王は大いに怒り給ひ、遂に馬を棄て、闇を冒

して行くこと數里であつた、然るにヂューリングは此の間を利用して、驛舎に
 睡ること數時間の後、駿馬を駆つて大王の後を追ひ、天明の頃に至りて、前途
 遙かに大王の歩行して居られるのを見、ヂューリングは飛び立つやうに喜び、
 次の驛に於て漸やく一臺の馬車を雇ひ、大王をして車上に睡らしめ、之れより
 後は晝間は馬で馳せ、夜は馬車を驅りながら僅かに車上に睡り、風雨と戦ひ、
 氷雪を冒し、晝夜兼行、遂に一夜も旅舎に就かずして、十六日間の長途旅行を
 馳せ続け、十一月二十一日の夜の一時と云ふに、始めてストラルサンドの城門
 に達したのであつた。

▲實に其の精力の旺盛にして強膽

▲無双であつたことは驚く許りて

▲はないか

時に大王は歩哨に立つてゐる兵士に語りて、面謁を主將ヂューケルに通ぜし

め、我れはトルコに駐蹕し給へる、我が國王陛下より重要な使命を帯びて來たものであるから、直に將軍に見へて之れを傳へんと欲するのであると云つたが、歩哨の兵は之れを遮りて、今は何分にも深夜にして、總督閣下は就寐せらる是非とも閣下に見へんと思はゞ、明朝早く來たられよと、大王は更に、事極めて急である、若し今夜之れを通ぜぬと、明日汝等は嚴罰を受くるやも知れなると云はれたので、歩哨は已むを得ないと思つて、之れをヂューケル將軍に報ずる、即ち將軍以爲へらく、陛下左右の一將校でも、何等かの使命を齎らして來たのであらうと察して、命じて之れを寢室に案内させたのであつた、時に大王は既に將軍の寢室に入つたのに、ヂューケル將軍は尙ほ臥床にゐて、睡眠未だ定まらぬ状態をして、眼を摩りながら問うて言ふに、貴官何の使命を帯びて來たられしなるかと、然るに大王は突と立つて其の脇を把り、噫、我に忠順なる一將も、亦我が顔を忘れたのかと、其の聲に驚かされて顔を仰ぎ見ると、是れ實に瑞典の大王カール十二世陛下であつたのである。

▲茲に於てデューケル將下は床よ

▲りスベリ落て脚下に伏し大王の

▲膝に接吻して

感極まりて言ふところを知らず、唯だ見る其の眼底より狂喜の涙の滴々として落下し來るばかりであつた、然るに此の報が忽ち全府に聞へて、家々では皆な門を開らき、人々は皆な衢に聚まり、口々に叫んで云ふ、大王單騎城中に入られて、我等を既亡の中より救ひたまふと、忽ちにして祝砲轟々、其の響き滿府を動かし、祝杯を擧ぐるもの、國旗を掲げるもの、一府の人民皆發狂せる如し、將校は王の左右に蝟集して、先づ大王の長靴を脱せしめて、長途の勞れを休めしめんと欲し、手にく之れを曳けども、何分にも十六日間、其の足に穿たれてゐたのであるから、固く膠著して動かんともしない、乃て小刀を以て其の革を寸斷して、漸く之れを除去することが出來たのである、デューケル將軍

は便服を求めて来て王に捧げ、王は乃ち服を改め、茲に於て始めて臥床に就き一睡すること數時間、覺め來れば即ち諸將を聚めて、各種の情報を聽き、一々訓令を與へ、了れば直に諸隊を檢閲し、諸保塞を巡視して、少しも倦み疲れたる色がなかつた相である。

▲如何に忍術を習得しやうとして

▲も精神の薄弱の怠けもので少し

▲も奮發心のないものは駄目だ

我が邦の忍術の秘傳の中には、忍びあるきの術と忍びおよぎの術と云ふことがある、其れて此の歩行の仕方は普通の歩行かたと違つて、ドコまでも足音を忍ばせて音のしないやうに歩行するのである、併し人目に附かない方法と云つても、要するに練習を以てするので、努力さへすれば誰れにも出来る事柄であつたのである、一體何の爲に蟹のやうに横にあるのかと云へば、家並みのとこ

ろや、扉などに沿ふてあるく爲て、然うして横にあるけば割合に音がせぬからである、併しコンナ忍術の秘傳も明治維新となつてからは、格別に用ひ場所がないので、殊に伊賀流の名人連中で、碌に離れて了つたものが、内職に忍術を應用して、樹の上に止つてゐる多くの寐鳥を捕へて歩行いたものなどがあつた相である。

▲併し或る忍術の秘傳書の中に若

▲し能く此の術を體得すると一日

▲に三四十里を行けるとあつたが

これは駈かに横歩行きてはないのである、夫の駈け足の競争して、東海道を僅かの時間で往復すると云ふことが、現に今日でも行はれてゐるではないか、矢張りコンナ按排に大體は猛練習の結果でなくては出来るものではないのである、慶安年間に陰謀の旗上げをした由井正雪の與黨の中に、傳達と云ふ大坊頭

があつて、其れが早足の名人であつたと傳へられてゐるが、彼は最初に増上寺から貳千兩の小判を兩掛けて擔いで、然うして之れを京都の比叡山に納める爲に、東京を出發して其の日は小田原で晝食して静岡で泊つたと云ふのである、今、慶安太平記に依つて當時の光景を調べて見ると、其の道中した傳達の人物が詳しく分かる。

▲忍術を以て東海道を僅かの時間

▲で飛び歩行いたと云ふ慶安時代

▲の傳達と云ふものは

後には正雪一黨の領袖となつた吉田初右衛門のことである、されば慶安太平記に斯う云ふ記事が載つてゐる、今や傳達は川崎宿を越して、其れより鶴見生麥と差掛つて來ると、モシ〜御出家様〜と呼ぶものがある、然うして其の者の云ふには、ドウも却々貴僧はお身装も大きいが足も達者であつてになる

と云つたのが初まりて、傳達は此の男の道づれになつたが、イヤドウも此の男の足の速いこと、云つたら、實に言語に斷へたるもので、小兵の男ではあるが宙を飛ぶかと思はれるばかりで、流石の傳達も實に舌を巻いて驚いたのも無理はない、此の男は當時の天下に響き渡つた大義賊の帳本にして甲州流の軍學をさへ極めてゐる高坂甚兵衛と云ふ男であつたのである、併し此の甚兵衛でも傳達でも別に横歩行きはしてゐない。

▲横歩行きをするにしても或は眞

▲正面に走るにしても兎に角に駈

▲け足の秘訣は呼吸にある

呼吸と云ふものは駈足の耐久力に非常に影響するものである、然うして内臓の諸器官とも極めて密接の關係を有つてゐる、呼吸の急迫を出來得る限り避けるには、先づ呼吸を七八分に加減せねばならぬ、吸呼を常に二三分の餘裕を殘

すことは、數十里を走るに最も緊要のことであつて、其れは少しの注意と練習とに依つて容易に體得されるものである、詳しく説明して見ると、呼吸は充分に吐かないで、二三分だけは肺の中に残して置くやうな氣味にして、何時立ち止つても呼吸は必らず平生のやうに調攝することの出来るだけにせねばならぬ、然うして談話でも駈けてゐながら出来る位でなくては面白くない、誰の身體でも通例として、上の方は疲れるに従つて屈み勝であるが、此の屈むと云ふことが既に呼吸の切迫する原因となるから、如何なることがあつても、決して身體を前方に屈めてはならぬ、上の半身は常に鉛直に保つて、出来る限りは呼吸を整調して、然うして斷乎として銳氣を胸腔に蓄へて邁進せねばならぬとてある。

▲此の呼吸を二三分残して置く

▲云ふことは實に忍術の秘傳とし

▲て深く考へて貰ひたい

初めは誰れても少しく骨を折ると息の切れ易いものである、併し之れも猛練習に依つて必らず調攝することが出来る、一體人間の呼吸と云ふものは、人體の健康に大關係を有するやうに思はれる、古人が臍下丹田に思ひを潜めたと云ふのは、要するに呼吸の整調其の處に適つて、能く身體中に銳氣を充實させた次第に他ならない、何にしても此呼吸を七分目にして、二三分残して置くと云ふことは、駢足敏活の度を加へて、耐久的の力を増し、健康をして益々増進させる原因にもなるものである。

▲世には忍術など、云つて無暗に

▲駢け歩行きの練習を度々すると

▲心臓病になると考へてゐる

馬鹿な人もあるやうだが、之れは全く詰らぬ盲斷に過ぎない、現代に於ける

駢足競争に有名なる日比野寛先生の實驗談に依れば、性來劣等にして病的なる心臟でも有つてゐるものは例外であるが、普通一般の心臟を有つてゐるものは、此の駢足は決して心臟を傷けない許りではない、寧ろ其の強健を著しく増させるものである、即ち駢足に於ける場合の此の呼吸の調節は、之れを常時に用ゆるも心臟の作用をして、益々堅牢に且つ耐久のならしむるものである、駢足を行ひたる爲に心臟病になれりとするものは、恐らく其の身の不養生の罪を妄りに之れに嫁せんとする者共である、其れてなければ駢足の場合に於ける呼吸の調整に周到なる注意を拂はないものゝ自ら招いた罪である、自分は四十歳を超へてから始めて駢足の練習を爲し、五十歳の今年に至るまで、少壯者の間に伍して、予の心臟は更に何等の患ひもない、其の長短距離に論なく平然として疾走踏破し得るものは、予が此の斷案の生ける證據であると云つてゐる、然うして亦た之れ決して予が駢足に於て天賦の力を有つてゐるのではなくて、予の呼吸法が予の駢足に於て最も適當なる方法を得てゐるからであると思つ

てゐると附け加へて云つてゐる。

▲次に水の中で忍術の秘訣とする

▲ところを研究して見ると同じ水

▲泳術でも忍術の方では

少しも水面に波紋をも立てず、亦た何の音をも立てないやうに泳ぐのである之れは俗に言ふところの立ち泳ぎをするのであるが、何にしても極めて熟練した忍術者になると、水の上に浮いてゐる鷗や鴨でさへ手で捕へるのが左まで困難でないと云ふから恐ろしいことではないか、併し水中の忍術となると熟練以外に機智も入用のものである、或る實録に依ると、昔し明智光秀が謀反した時に、若し事を擧げてても肝腎の御大信長公が本能寺にゐねば一大事を生ずるから豫め忍術の名人某を撰んで一週間ほど前に、信長公の在否及び部屋の間取等を探索せしめた事があつた相であるが、當時其の撰に中つた忍術使ひの何某は、

本能寺の奥深く入つて、信長公の夜中の状態から、防備の順序をも搜り盡して悠々として歸り去らうとした時に、曲者待と呼ばれて、蘭丸の爲に追ひ詰られて、仕方がないから裏庭の蓮池の中へもぐり込んで了つてゐた。

▲不思議のことに思つたので本能

▲寺につめてゐる多くの武士が手

▲を揃へて搜索してもゐない

然るに忍術の名人某は漸やくにして蓮池の中へもぐり込んで、刀の鞘の鐺の邊を切つて之れを口に含み、鞘の上端を水面に僅に出して呼吸器を作り、其れで現今ならば夜の二時頃から翌日の夜の二時頃まで、丁度二十四時間ばかりと云ふものは、此の急造の呼吸器械を利用して、全く水中に隠れてゐたのである。水道の術と云ふものはいろ／＼あるが、之れを大きく云へば今の潜航艇は耽かに水道の術の完成したものであると云つて可いかと思はれる、小さく云へば將

に此の某の二十四時間もぐつてゐたのは水遁の術と名づくべき性質のものである、併し亦た少しも器械の力を假りない水遁の術も澤山あるが、斯うなると矢張り激しい稽古をして練磨せねば出来ぬ問題である、例へばツイ此の間のこと、銚子の犬吠岬とやらで、文士の朽葉と云ふ人と、白楊と云ふ人が溺死したことがあつたが、其の死體を搜索する爲に毎日／＼海女を雇つたとあつたが、熟練とは云ひながら海女はいつまでも水遁の術をやつてゐると云つて可い位のものではないか。

▲次に飛び下り飛上りの忍術の秘

▲傳と云ふものがある此の飛び下り

▲の稽古をするには

最初の中は下に蒲團を澤山敷いて、其の上へ屋根から轉がり落るのである、浅草公園などで興行してゐた輕業師が、天井裏の高いところでする藝當である

と、其の危険を防ぐ爲に下に網を張つて置くのも同じことである、屋根の上から轉がり落ちるなどでも熟練して來ると何でもないことである、可なり高いところから轉げ落ても怪我などは少しもせず平氣なものである、亦た少しも慣れないものが高い屋根の上に乗ると、足がブル／＼震へて始末の附かないものであるが、消防人足や昔しの鳶職人などは一本の杉丸太の上をも駈け歩行いてゐるではないか、昔し水戸の黄門卿が日光の山奥へ入り、數百丈もある溪に架けてある丸木橋のところへ來たら、黄門卿は謠曲の橋辨慶を聲高らかに、謠ひながら拍子を取つて軽々と渡つて了つた、お供に立つてゐた劍道の達人、佐々木助左衛門も劍道の極意で軽々と渡つて了つた、けれども一所に附いて來た宿屋の主人公はドウしても渡れなかつたと云ふ話がある。

▲忍術の名人になると高い屋根の

▲上で人と組み打しても滅多に下

▲に轉がり落ちない

其れは虚心平氣にして幾ら高いところでも大地と同じであると観念してゐるからである、勾配の急になつてゐる屋根の上で轉けても身體を堅くしてゐれば止め度もなく轉けて行つて、落つれば大怪我をするものであるが、身體を出せるだけやはらかにしてゐれば、轉げ落やうとしても却々落られぬものである、例へば圓い石を屋根に置くと、ころ／＼と轉げ落て行くが、豆腐を置いたのは、幾ら圓く切つて置いても決して轉がり落ない道理と同じことである其れから又、今度は飛び上りの術であるが、此の練習の第一歩としては、兵式體操の馬飛びなどは最とも適したものであるが、昔しの人の練習した方法としては、廣い庭の中の一定の場所へ、麻の實を一間四方位の地面へ播くのである然うして其の上を毎日／＼飛んでゐるのであるが、麻の草は毎日眞直に成長して、五寸となり一尺となり、果ては自分の脊丈け以上にもなるのであるが、併し毎日順繰りほ飛んでゐると、遂には脊丈け以上になつても、或る程度までは必らず飛び越へ得られるやうになるものである。

▲以上の凡ての忍術に關する秘傳

▲は普遍的に身體を練磨する方法

▲を述べたのであるが

此のやうな練磨に依つて身體を輕敏ならしめ然うして嚴重の防備のあるところへ忍び入つたり忍び隠るゝの妙を得るのであるが、段々と此の効を積んだ忍術家は其の身體が堅くて肥らず、多くは小兵の人物である、一體に劍術でも、柔道でも乃至は忍術でも、其の發達の根本は、小さいものが大きいものに勝るとする工夫から起つたものである、牛若辨慶でも、正雪と忠彌でも、我が邦の歴史的傳説では、多くは小を以て大に勝つた話ばかりである、然うして之れは支那の方には決してない話である、楚の項羽は身長九尺にして其の力能く五千斤の鼎を扛げ、關羽は八十二斤の青龍刀を振り廻したなど云つて、支那の傳説には小さい豪傑は一人もゐない、要するに支那人の間には小を以て大に勝つ

と云ふことは興味も惹かないやうである、従つて小はドウしても大には敵せぬものだと諦められてゐたのであるから、劍道でも柔術でも支那人の間には發達しなかつたものである。

▲其れから忍術の方には獨り自分

▲の身體や精神を練磨する許りて

▲はない忍びの道具もあつて

忍術上必
究の機械

忍術使ひは何れも相當の道具を使つてゐるのであつた、第一に五寸と稱する釘である、夫の五寸釘寅吉など、云ふ盜賊の名は之れから附けられたものである、此の釘は今はないが昔し使つたものを見ると、長さ八寸位ある太い釘のやうなもので、其の上部の三寸ほどをギリ／＼と糸で巻いてあつて、其れに長い紐が附いてゐる、然うして其の紐は忍術者の帯に結んである、之れは何をする爲の釘であるかと云ふのに、彼等は之れを五六本位持つてゐて、忍び入る際に

は塀若しくは羽目へ斜に打込んで足場にして、下の方から順繰りに抜いては上に打込むので幾ら高いところへても上つて行ける譯である、其れから忍術者の使用してゐた刀は普通のものよりも短かく作つてあつて、下げ緒は非常に長くしてある、之れは塀などへ上るときに、此の刀を立て掛けて其れを足場として上つて了つてから、下緒を手繰つて手に取るのであるが。

▲多くの盜賊共は大概此の道理か

▲ら考へ附いて刀を用ひずとも例

▲へば塵箱の蓋でも立掛けて

其れを足場にして容易く塀を乗り越す相である、然うして若し針のやうな忍び返しを塀の上に設けてあれば、豫め灰吹のやうなものを五六本も用意してゐて、何んでもなく忍び返しを乗り越すと云ふ話である、亦た忍術者は自分の姿を暗の色に隠す爲に、二尺四方位の鼠色の布を持つてゐるが、之れは目なし頭

巾きんに縫ぬつてあるものもある、何いづれにしても此このやうな布ぬのを以もつて顔かほを蓋おふて敵てきの目めを逃のがれるのである、夜よに入いると人ひとと云いふものは足あしもとを注ちうい意いして見みるものはない、大たい概がいは上うへの方ほうを注ちうい意いしてゐるものであるから、目めなし頭づ巾きんは大おほいに效かき能のうのあるものに違ちがひない、其それから亦またた、忍にん術じゆつ者しやの持もつてゐる手て拭ぬぐは普ふ通つうのものよりも一しやく尺せき位ぐらゐは長ながくしてある、之これは屨へいを乗のり越こへる時ときに、此この手て拭ぬぐを濡ぬして屨へいの上うへへピタリと叩たたきつけると、濡ぬれた手て拭ぬぐが屨へいの内うち側がはに粘ねん着ちやくするので、之これにつらまつて身み輕かるな身からだ體たいを飛とびあがらすことが充じう分ぶんに出で來きるのである、併しかし盜たう賊ぞくの中なかには自じ分ぶんの締しめてゐる犢ふんどし鼻し禪ぜんを解といて、此この代だい用ようを勤つとめさせる相さうである、されば一本ほんの犢ふんどし鼻し禪ぜんさへあれば忍にん術じゆつ者しやは一ち丈やう位ぐらゐの煉れん瓦わ屨ぞうりでも何なんでもなく飛とび上あがつて、容た易やすく乗のり越こへることが出で來きる相さうであるから驚おどろくてはないか。

▲更さらに又また忍にん術じゆつ者しやは必かならず一しゆ種しゆの羽は

▲織オリを着きてゐるものであるが之これ

▲は道具を隠してゐる爲めと

萬一の場合には武器ともなるものである、若しも敵が手強く切り込んで来たときには取り敢へず羽織を脱いで投げつける、然うして敵が之れを拂ひのける隙に身を免れるのである、此の實例としては昔しからある劍客談を讀むと澤山ある、寛永御前試合と云ふ講談に荒木又右工門と諸岡一羽齋のことがある、極意「皆傳の間に燈明を上げ、極意三卷を堆高く經机の上に飾つて置き、其の傳授の間に一羽齋は寢て居ります、荒木は客室に、岩間、土子の兩名は自分の部屋に寢て居ります、深々と更け行く冬の夜に、密と奥へ行つた難波角左工門、充分に身支度をして荷物を西行脊負にして、拔足差足忍び足、師匠一羽齋の傳授の間へ進んで来て、ソツと唐紙を開けます、心ある武士は霜降る音に目を覺すと云ふ位、況して一流の大先生、唐紙が開く音に目が覺めて。

▲忍び込んで來る角左工門の頭の

▲上から曲者ツと矢聲諸共掛けて

▲ゐた布團をモロに被せた

失敗ツつたと脱がんとする角左工門、何にしても名人の一羽齋に被せられたのであるから、脱ぐにも手間の取れてゐる間に、一羽齋は飛掛つてムンヅと押へ附けたとあるが、忍術者の羽織を擲げる場合は之れと同じやうな譯である、其れから又、時に忍術家が刺客として行く場合には、決して銘の附てゐる短刀は用ひない、諸大名等の隠密と稱するものが、刺客となる場合には、新刀の極めて肉の厚い鎧通しを用ひるものである、然うして敵の部屋に忍び込んで、少しも物を言はずに唯だ一と突きに突き刺して、其の刀を刺した儘で歸つて來るのが法則になつてゐる、若しも刺した刀を抜く途端にキアーツと聲を立てられる恐れがあるからである、之れが妙なもので、刀を刺した儘にして置くと、苦吟の聲は發しても、ウーンと呻く位のもので、大きな聲は出ないものである、然るに刺した儘の刀を置いて來るのであるから、ドウしても其の刀に銘があつては足が付き易い、故に新刀の無銘のものをを用ひる法則になつてゐる。

- ▲次に忍術者は現今で云ふ物理學
▲と建築學とを應用して殊に光線
▲の研究をしたものである

例へば安燈の何れの方から行けば目に附ないとか、提灯の何れの部分は影になつてゐるとかのやうな研究をしたものである、夫の龕燈などは最とも都合よく考へたものである、現今の盜賊は昔の龕燈から考へて、竹筒を拵つて其中へ蠟燭を立てる相である、之等の事は今日から考へると、極めて幼稚な研究にして、懷中電燈を改善すれば、可なり面白い忍術用の燈火も出來やうと思ふが、併し昔の人は、かゝる光線のことを充分に呑み込んでゐて、之れをイザ鎌倉と云ふ突差の場合に應用したのであるから感心である、其の實地應用の例をあげて見ると、床の中に寝てゐる人物の眼と自分との位置及び方向を考へて見て、ドツチから進めば最とも遅く發見されるであらうかと研究してゐる、若し

も先方の人物が仰臥してゐる際には、頭の上の邊に隠れてゆく、斯うすれば氣取られ了つて、萬一置き上られても其の人物が首を後ろの方へグルリと廻さなければ俄に發見されない道理である、尙又建築學と云ふと大業であるが、忍び込むに際しては豫め家の外部の構造と其の大小から計つて見て、何れのところが客間にして、何れのところが居間に當り、何處に廊下があつて、何處に便所があると、其の外部を見て内部にある凡ての構造を鑑定するのである、最とも昔の建築には一定の法式があつて、其れに依つて建てられ居たのであるから、大概は此の見當が外れるやうなことはなかつたのである。

- ▲更に忍術の秘傳の中には不思議
 ▲の幻術をやることが澤山にある
 ▲が之れは妖術の部に屬してゐる

併し妖術の中にも其の身を梁の上に隠したり、或は柱に一寸手を觸れると攀

ぢ上れたりするのは練習で出来るものであるが、之れを稱して魔法と云ふやうなことになる、化学や心理学を應用して始めて出来る藝である、墓を驅使した天竺德兵衛とは如何なる手段をやつたものであるか、白縫姫の蜘蛛を驅使した話や、其の他にも澤山ある傳説中の奇談は果してドンナ眞似をしたのであらうか、之れを説くには先づ變體心理学の方にある多くの不思議の話を紹介せねばならぬ、妖術とか魔術とか云ふと、其れは唯だ人間の五官の缺陷してゐるところに乗じて眼を暗ましたり、心を暗ませたりするのであるが、併し學問の上から攻究した理論を實行して、少しも刃物も藥物も用ひないで、犯罪にも何にもならぬやうに人を殺すことも出来るものである。

▲ 刃物入らずの人殺しは戀に溺れ

▲ てゐる青年男女の間に謎のやう

▲ に語られるばかりではない

人間社會には事實に於て不可思議な手段を以て人を殺したものが澤山ある、然らして其れが妖術でも何でもないのである、今の世界の中心地であるセルビアに、刃物入らずに人を殺した實に面白い實例がある、此のセルビアと云ふ國の首府はベルグレードと云ふ市が一番繁昌のところであるが、此所の市役所の役人にアデスと云ふ一人の屬官がある、此のアデスと云ふ役人は却々身體の壯健な人で、役人になつてから二十年間、未だ曾て病氣の爲に一回も役所を休んだことがない相であつて、極めて精勤家と云ふので、長官の信用を得てゐる人である、然るに世の中には厄介な人物の多いもので、アデスが斯ウ云ふやうに能く役を勤めて長官の氣に入るから、他の役人共が之れを憎んで、ドウかして彼を一日でも休ませて見たいものだ、五六人の同役が共謀して、或る日のことアデスが相變らず役所へ出て來た其の歸り道を見計つて、待伏をしてゐたのである、アデスはソナ事とは露知らず、晩方になつてブラ〜と家の方に歸つて來ると、一人の同役が物蔭から現はれて、やアお前は何處か悪いの

ではないか、大變ドウも顔附が尋常でないと言つて、怪し氣な顔をして別れて行つた、乃てアデスは自分の身體が強壯であるから、別段に何とも思はなかつたが、コンナ事を云はれるのは變なことであると思ひながら家の方に歸へる。

▲然るに又た二三丁行くと今度は

▲別の同役のものがゐてやア君の

▲顔はドウしたものだ

大變に惡るい色ではないか、何處か身體に變つたことはないか、此の頃はコレが流行するから、大いに注意し給へと云つた、ハテ之れは愈々變だと思ひながら又歩行てゐると、今度は亦た或る同僚のものがゐて、やア君と云ひながら顔を見て、ドウも君の顔は眞青になつてゐる、一寸脈を見せ給へと云はれて、脈を見て貰ふと、之れはドウも脈が高い、何ても深い注意を要する、君の脈は今に實に百四十度から打つてゐる、キツとコレラになる前兆に相違ないから、

病院に早く行くが宜しいと鋭く言つた、此の一言を聞いたアデスはアツと一聲叫んで其所に悶絶して、其の儘擔架に乗せられて家に歸つたが、可哀想に其の晩の中に死んで了つたと云ふことである、之れ實に精神作用て人を殺した實例であるが、コンナ事には我邦にも面白い實例がある、著聞集と云ふ本を見ると斯ウ云ふ事が書いてある、其れは蝶々二匹で子供を殺して了つた實例である、或る所に甚だ蝶の嫌ひな子供があつたが、其の親は子供が駄々を捏ねた時は、いつも蝶を持つて來るぞと威かして、效を奏してゐるのを常としてゐたが、或る時に子供が非常に強情張つて單純なる蝶の威かし許りては效能がなかつた然るに子供を最初の間は狭ひ押入に入れて、其の中に蝶を一二匹放して置いたのだが、其の子供は暫らく泣き叫んでゐたが、暫らく経つと聲がしなくなり、妙に靜かになつたので、押入の戸を開けて見たら、いつの間にか死んでゐた。

▲然うして蝶の觸れたところは――

▲面に紫色に變つてゐたとのこと

▲であるから怖ろしい。

又歐羅巴て有名な話となつてゐることは、死刑に處すべき罪人があつて、之れを醫學上の實驗に供して、人間と云ふものは、單に精神作用ばかりで死ぬものであるか、ドウかと云ふことを試験して見たことがあつた、即ち其の罪人には、貴様の腕から血を絞つて命を取るぞと宣告して、其の血は今こゝで吾輩が一つ二つと云つて、何十まで數へると死ぬぞと云ひ聞せて、罪人には目隠しをして置いてサア斬るぞと云ひ、腕を切つたやうな刺戟を與へ、其の上に生温い湯をポタ／＼と落とし、血の流れるやうに思はせて置いて、大聲を發して一二三四と次第に數へ立て、遂には曩に云ひ聞せて置いた數に達した時、何十幾つと特に大聲に叫んで見たら、不思議なるかな其の罪人はバタリと仆れて、其の儘死んで了つた事があつた相である。

▲我邦でも首斬淺右工門の直話に

▲依ると刀の峰打ばかりで大槪の

▲ものは死ぬさうである

實に精神作用ほど怖ろしいものはない、或る富豪のお嬢サンが夜中に水を飲んで、翌朝起きてから水差の中を見たら、其の底に赤い虫が沈んでゐたので、急に氣持が變になり、忽ち腹が痛み出して、嘔吐をしたり下痢したり非常の病氣になつた、然るに主治醫が嬢様附の女中から、前後の経過や事情を聞いて見て、之れは寢かに精神作用から起つたものと考へたので、早速に嘔吐劑を與へて、其の嘔吐物の中に赤い絹絲を小さく切つて密かに入れて置いて、お嬢様に向つて、モウお腹の中の虫は残らず出ました、貴嬢のお腹の中にはモウ何一つ残つてゐないと云つたので、其れて病氣がケロリと癒つたと云ふ話もある、斯ウ云ふ面白い精神作用の成功談は歴史の上にも澤山ある、昔し希臘の全盛時代にスバルタの隣國から、外寇を防ぐに就て、スバルタ一等の勇將を貸して吳

れと頼まれた事があつたが、當時のスバルタは隣國の盛んになるのを好ましか
らず思つてゐたので、評議の結果此の人こそスバルタ第一の名將だと云つて詰
らぬ跛足の文學者を貸してやつたことがあつた。

▲然るに精神の力は怖ろしいもの

▲で此の跛足の文學者を名將と信

▲じてゐたので

勇氣が日頃に十倍したところへ、此の先生が亦た心力を盡して勇壯な軍歌を
作つて之れを味方に謠はしめて進軍したので、實に意外なる大勝利を博したと
云ふ歴史がある、之れに反して源平盛衰記を見ると、平の維盛が關東征伐をす
る時に、齋藤實盛が餘りに關東武士の剛猛であることを話してゐたところへ、
夫の富士川の鳥の羽音がけたましかつたので一も二もなく逃げ去つて、笑ひ
を千載に残したことがあるではないか、日清日露の兩役に就て研究して見ると

いつも我邦の軍隊が連勝してゐる、少しても負け癖がついては逆も戦争には勝たれぬものである、然うして又、將軍の中に名の高い不思議な勇將がゐると、其の軍隊は強いものである、乃木大將がアラビヤ種の大きな馬に乗つて、其の英姿を戦闘線に現はすと、一軍の兵氣が非常に亢奮して、ドンナ彈雨の中でも平氣で突撃するやうになるものだ相である。

▲更に又不思議なことは廻狐術と

▲云ふことがあつて俗に狐つかひ

▲と云ふものである

此の廻狐術に達することが出来ると、單に之れを武道の上に流用し得られる許りではない、處世の上の實用にもなるものである、昔から自分の身の上に係ることを豫知したり、或は天變地異を豫言したり、人の秘密を探つて吉凶禍福を卜知したりするものを狐使ひてあらう抔と云つてゐるが、此の狐使ひと云は

れる者の中で、俄かに成金になつたり、幸福の身の上となると、多くの人から嫉まれる、然うして其の嫉むものは皆な口を揃へて、彼れは狐を使つて他人の金錢を狐に運ばせるので、其れが爲に金持になつたと云ふが、併し誰れ一人として狐に金錢を窃されたものはないではないか、シテ見ると之れは嫉むもの、誣言に他ならぬ評である、然らば此の狐使ひと云ふものは悪黨であるかと云ふのに決してさうとは定つてゐない、由井正雪などは、アレが維新の當時であつたならば、駢かに彼れは總理大臣になつた人物である、彼を兎や角と誹議するのは、畢竟するに幕府の全盛の時代であつたからである、由井正雪は眞に此の廻狐術の名人であつたのである、更に其の昔に溯つて見ると、阿部の晴明なども此の術の名人であり、弘法大師も名人であつたに違ひない。

▲一體狐と云ふものは其れが人間

▲と話をしたりして人間以上の靈

▲能を備へてゐるであらうか

其れは頗る疑問とするところであるが、此の狐を使ふ者は、例へば京都の稻荷山とか伏見の稻荷神社とかへ往けば、二十五圓から五十圓までの奉納金で授かることが出来る相である、然うして彼等に云はせると、之れさへ買つて來れば何んでも云ふ事や思ふ事が通ずると云つてゐる、併し實際は五十圓は愚なかと百圓出してもソナ都合のよい狐は手に入らぬものである、更に或る人の云ふところでは、京都のある神社へ行くと、嚴肅なる誓言の下に、七十五日間の修行をすると、暗魂と云ふ靈物を授つて來ることが出来る、之れを崇拜してゐると、自然に神通力を得られると云つてゐる、然うして其の暗魂と云ふものは矢張り狐の異名だと評されてゐる、兎に角に何れにしても、此の神通力を得たものは、特に不思議なことが出来るものである、例へば世の中の事々物々が、何でも電話で聞くやうに、耳に感通し、或る場合には騒々しくつて困るほど、いろ／＼の話が輻輳して來ることがある相である、今其の感ずる話の二三の例

を擧げて見ると、

▲今日は何國の某氏から手紙が來

▲る筈であるがドウであるかと自

▲分で自分に聞くと

忽ち耳の邊で誰か側にて答へるやうに、其の手紙は今に配達されると答へる者があるやうに感ずるのである、スルト果して間もなく其の手紙が手に入ると云ふやうに、全く事實となるのである、若し亦た自分の心で、何所の何某は今何をしてゐるだらうと云ふ念が起ると、其の人は今日中に此の家に訪問することになつてゐる、然うして其の用向は金談であると答へるやうに感ずる、スルト果して其のものがソクナ用向で訪問して來る、或は亦た自分には何の氣も起らなかつたのに、突然耳を突くやうに、大變く、今此所へ刺客が二三人襲撃しやうとしてゐるから、早く何れの方角の地へ身を避けよと警告される

やうに感ずると、果して其の刺客が來ると云ふ始末である、其れから又、國家の問題のやうな大きな事件でも、必らず豫知することが出来るのである、例へば今、歐州の戰亂地で、獨軍が聯合軍に向つて猛襲するが、其れはドウ云ふ結果に終るだらうと思ふと。

▲其れは既に聯合軍が奮闘した爲

▲に獨軍は數十萬の死屍を殘して

▲退却したのであると

答へる、或は又、農作物の豫想のやうなことも能く中るものである、例へば今年は早稻の豊作であらうか、或は晩稻の豊作であらうかと思つて、自分自分の心に聞いて見ると、早稻が良いくと教へて呉れる、其れをその通りにすると、果して秋の大嵐の爲に晩作は凶年であつた、或は又、米の相場でも株の相場でも百中するものである、例へば今、米を賣らうとして、其の如何を聞

いて見ると、賣ると損するとか何とか明瞭に答へる、スルト果して大暴騰したりする、又或る場合には他人と對話中に、俄然として耳を突いて來るやうな大聲を張りあげて、對手の人にも聞へはせぬかと思はれるやうなことを聞せられることもある相である。

▲けれどもかゝる事相を科學的に

▲研究して見ると何れも皆な自分

▲の觀念の刺戟で

自分の頭腦を衝動させるところから起る幻聽であるから、決して他人に聽へる筈はないものである、又グツと古い昔しにあつた事でも現在の事實に見へたり、今現に起らうとすることが前知されたりすることもある、ドウかするとコナ人は、ソレ其處に首縊りがあると云ふ聲を聞くことがある、乃て其の人は仰いて其の方を見ると、果して古木の枝に首縊りがゐるのを見たりする、併し

其れが自分には現在あるやうに見へても、其の實は二十年前に此の通りに死んだ歴史があつたのだと云ふ位の間違ひもある、然るに廻狐術の名人になると、コンナ間違ひは少しもない、例へば廻狐術を體得してゐるものが或る所を通行しながら、此の家では今に急病で死ぬものがあるとか、今夜此の家では赤ん坊が産れると云つて往くこと杯は幾らもある、然うすると果して其の通りの事がある、弘法大師などはコンナ事はザラに遣つて歩行いたものである、鍛練した狐術者になると、二十年でも三十年前でも、百里でも千里でも、ドンナ遠方のことでも、如何なる未來の事でも何ても透見するのは實に奇妙である、併しながらかかることが實際に出来るかすると、其れには必らず出来るだけの理由がなくてはならぬ筈である。

▲其れで段々と科學的に調べて見
▲ると決して狐でも稻荷でもない

▲のである

之を要するにかゝる魔術的行爲は、自分で見たり又は自分で聞いたりして、其れを自分で見せたり聞かせたりしてゐるのである、言葉を代へて云つて見ると、一人でありながら二人若しくは二人以上の精神上の働きをするに過ぎないものである、心理學の方で云ふところの意識が分裂して狐の幻覺となり、稻荷の幻想となるのである、従前の狐使ひなどは斯う云ふ理由を少しも知らないから、全く稻荷や狐が話をして聞かせて呉れるものと信じてゐたのである、シテ見ると之れは單純なる迷信であると許りは否定し去ることは出来ないもので、殊に其れが能く百中するに於てをやである、けれどもかゝる事に練達するには、大體に於て人間の持つて生れた個々の素質に依つて、出來得るものと出來得ないものとの區別がある、曾て明治四十二年の頃に新聞紙界を賑かした藝仙人の片田源七と云ふ爺さんがあつた、彼れの魔術は以上のやうな話と違つて、全然練魔の結果で誰にても出來るものであると解釋されてゐる。

藝仙人の
練磨的
魔術的大

熱湯へ手
を入れた
法

焼く火箸
を扱ぐ法

▲ 藝仙人の事を書いた當時の新聞

▲ 紙を見ると藝仙人こと片田源七

▲ は今回關西地方へ十日間の

興行に行くので、お名残りとして七日午後四時から上野の常磐華壇で仙術を演つた、源七は例の通り、天照皇大神宮、大天狗、小天狗、東京では水天宮と、八百萬の神を元氣よく叱るやうに怒鳴るやうに唱へてから、先づヤアツと氣合の聲をかけるが早いか沸々と煮へ立つてゐる大鍋の湯の中から茶碗を三つ取り出して見せる、然うして其の湯の中へ兩足を踏み入れる、藥罐にグラ／＼沸騰してゐる湯を見物人に瀧のやうに自分の掌に注がせる、然うして又、兩手で抱へる程の石塊で我と我が頭をコツン／＼となぐる、けれども手も足も頭も更らに何ともない、今度は長さ三尺、太さ拇指位の二本の鐵棒、其れを焼いて烈々たる赤熱の、見るから凄まじいものを、大喝一聲ヤアツと言ひさす、手で芋握

りにした儘ツイと扱く、右手左手一回二回、五回六回七回八回、トウ／＼鐵は素との黒色に歸つて了つた、ドウだ、手は此の通りだ、何ともない、チツとは臭いだらう、錆があるからな」と云つて得意のものである、サテ此の藝當の殿りは劍の刃渡りである、之れは實に千番に一番の兼合。

▲足の踏み方にお目止めて御覽じ

▲ろとも何とも言はずにヤツと聲

▲を掛けて

踏み上つたのは一個の梯子、其の横木にはスラリと抜かれた白鞘の業物六本、明晃々たる刃を上方にしてさながら人の血潮に渴へてゐるかのやうに列んでゐる、見物席の醫學博士岡田和一郎氏、夫人並に令嬢を始め、女中も半玉も藝妓も顔を背けてゐる、ヤツと一段上る、又ヤツと二段上る、トウ／＼六段上つた、又一段／＼下りる、實は記者も此時こそはハラ／＼したのであつた、岡田

和一郎博士曰く、仙人の技術は少しも不思議はない、一つは精神作用で、最初に神に祈りを捧げて一心を其の技術に凝め、如何なる苦痛も我慢して退けやうと云ふ一種の教唆サツヂエスチオンを精神に受ける、第二は身體の修練で、長い間練習に練習を重ねた結果、肉體は學語で所謂角質變化をしてゐる、我々の家庭でも、自分では熱くて持てぬ鍋を女中は平氣で兩手で持つ、其の兩手は練習を経てゐるからである。

▲又我々が催眠術に掛つて赤い火
 ▲を握る其の當時は熱いと思はな
 ▲くても

手は物質であるから、火は必らず其の細胞を焼く、従つて火傷は立派にしてゐる、詰り此の仙人は精神的修養と、肉體の角質變化とを兩方備へてゐるのであるから、熱くも痛くも我慢が出来るのである、其れのみならず、肉が厚くな

つて所謂るタコが出来てゐるから火傷もしない、又切れもしないのである、思ふに斯の如きことは、一つは教育上に取つて可いことである、精神を一所に集中すれば、何事でも出来る、錬磨に錬磨さへ經れば何事でも出来ぬものはないと云ふ、實物教育を與へるものであると思ふ云々と、然るに之れを源七に就て聞いて見ると、ハイ當年六十八ですが、六十一の八月から練修を始めまして、此の七年間と云ふものは、女色を絶つは勿論のこと、肴や肉類をも全く絶ち、然うして技術を遣ると云ふ日になれば、其の朝から鹽絶ちをして、御飯と水計り用ゐます、例へば興業が三日續けば三日間とも御飯計りですから、却々辛い事です、今度は關西で十日續けざまに遣るのですから、辛い事ですと。

▲之れを要するに墓仙人の妙術は

▲精神と身體との双方の練修から

▲鍛へあげたものであるが

心理學者の研究の方でも、之れは寤かに誰にても出来る理窟のものであるが、唯だドウして之れまで修練し努力したものであらうか、ソコが大いに驚くべき筋のものであると説明してゐる、乃て精神と云ふものは實は頗る不思議にして、未だ今日の學者には解釋の出来ないことが澤山にある、精神の靈動など、云つて奇藝を演ずるものは澤山ある、例へば自分の思つてゐるやうに、いろ／＼の動物を自由自在にすることなどが出来る、西洋では猛獸使ひと云ふものがあつて、獅子でも虎でも思ふやうに働かせる、之れはドウして出来るのかと云ふのと、之れも矢張り精神の練修から生ずる作用である、今は故人となつた人であるが、桑原と云ふ催眠術の先生は、コンナ妙なことを遣つてゐる、其れは桑原と云ふ人が静岡の學校に奉職してゐた頃の話であるが、或る晩のこと、鼠の群が天井へ來て、矢鱈に駈け廻るので、其の物音のすさまじいと云つたら、恰かも雷鳴でもするやうであつた、乃て桑原氏は兼てより催眠術の達人であり、精神練磨の功を積んでゐる人であつたので、一生懸命に思ひを凝らして、汝、鼠

の群よ、何故に然う跳ね廻るのであるか、下には人が寝てゐるではないか、人を害して快きものにもあらざるべし、早く跳ね廻ることを止めたがよい、然し、若しも汝等が食物のない爲であらば、吾輩は汝等に何程にても食物を與へて遣る、決して跳ること勿れと精神にて云ひ聞せつゝ、暗に吾輩の心を以て彼れ鼠等の精神に告げた。

▲然るに不思議なるかな忽ちにし

▲て鼠は跳ね躍ることを中止して

▲ガタリとも音がしない

實にアレだけの鼠が何處へ潜んだのであらうか奇と云はんか妙と云はんか、自分ながら頗る吾輩の精神作用の靈妙なることに驚いたと云ふことがある、乃て桑原氏は彼等の仲間に違約せじと思つたので、早速に下女に命じて、一椀の飯を臺所の隅に置かせた、下女は之れを怪しんで、何故にかゝることをなさる

のかと云つたが、桑原氏は笑ひながら、明日になれば能く判かると云ひながら眠りに就いた、然るに果して明朝になつて、其の臺所の隅の椀を見ると、一粒の飯だに残つてはゐない、甚だ奇麗に喰ひ盡してあつたと云ふ事實がある、又名古屋の人で吉田と云ふ人が、催眠術を練習してから、或る日のことであるが、庭に澤山の雀が飛んでゐるのを見て、ドウか自分の精神の力で此の中の一羽だけても、飛んで行くことの出来ないやうにして見たいと思ひ、凝らした精神を一羽の雀に注入したところが、都合よく効験を現はして、其の雀が飛ばんとして、立ち上がらうとすると、何物かゞ之れを制肘してゐるらしく見ゆるやうな風をして、少し飛びかけては、直ぐに止まり、又、飛びかけては立ち止まつて、トウ／＼一羽の雀は一群のものと後れて了つて、一處に飛ぶことが出来なかつたと云ふ事實もある。

▲更に人の心と小鳥との關係に就

▲ては梅溪と云ふ坊さんと桑原氏

▲とで面白い實驗をしてゐる

眞宗の僧侶で梅溪と云ふ人は、獵師が小鳥を狙つて撃たうとするときに、桑原氏に向つて云ふには、自分は必らず其の鳥を撃せないやうにするから御覽あれと云つて、左の通りの實驗をして見せたことがある、梅溪氏は或る時に法要の爲め二三里隔たつてゐる家へ行つた、其の途中で氏の友人と自分とも一處になつて、いろ／＼の話をして歩行きつゝあると、一丁ばかり向ふの處で、獵人が切りに小鳥に向つて銃を擬しつゝ狙ひながら近寄つて行くのを見た、乃て梅溪氏の云ふには、今自分はアノ鳥を撃たれないやうにするからと云つて、獵師に見へないやうに木蔭に這入つて、つく／＼獵師の方を見てゐる、面白いことには獵師が今、引金を曳かうとすると、鳥が一二丁飛んで他の樹に移る、獵師は一生懸命になり汗を垂らして又々近寄つて行くと、やがて狙ひも定まり、愈々引き金を曳かうとすると、前の通り又もや一二丁飛んで外の樹に移つて了ふ、かくて四五回も獵師は鳥を狙つては進んだが、トウ／＼撃つことが出来なかつ

たので、梅溪氏の友人は變な顔して驚いたことがあつた。

▲然らばドウして此の僧侶が鳥を

▲逃げさせたのであつたかと云ふ

▲のに先づ斯うである

獵師が鳥を狙つてゐる時に、彼は一心不亂に念佛を唱へたのであつた、然うして彼は凡そ一心不亂に念佛を唱へるときは、彌陀の救ひ給はぬことは一事一物としてないと信じてゐたのである、要するに彼には金剛の信と云ふものがあるたのである、斯う云ふと皆さんは、念佛の爲に鳥の命が助かつたのだ、佛の力で助かつたのだと簡單に御考へになると、其れは所謂る迷信のやうであるが、併し其の念佛を唱へると云ふのは、自己の精神を統一する一つの方使であつて、其れと同時にアノ鳥を助けずには措かないと云ふ一心の力が鳥に通じて、獵師の頭にも變に響いて、然うして其の效を全からしめたのである、故に迷信でも

何でもないのである、要するに精神の力で出来たものである。

▲曹洞宗の禪僧に松野良英と云ふ

▲人があつて此の人は流石に本職

▲だけあつて字内を家とし

天地を身としてゐた、さればかゝる知識名僧と語ること一夕なれば十年書を讀むに勝ると評判されてゐた人であつた、或る人が此の禪僧に就て精神上の談話をいろ／＼交換し合つた時に、此の禪僧の云ふには、吾輩は河邊の散歩の時に能く魚釣りをしてゐる人を見るが、かゝる時はキツと魚の釣れないやうにしてやる事が出来る、吾輩が釣らせまいと思へば必らず釣れないやうにしてやる、然らうすると一日鉤を垂れてゐたとて、不思議に一尾も釣れないものである、之れ皆な何れも精神作用の然らしむるところの異力であるが、或る寺の僧侶は池の中にある金魚を自由自在に動かして見せたことがある。

▲されば兒雷也の墓の妖術でも或

▲は白縫姫の蜘蛛の妖術でも何れ

▲も精神練磨の産物である

精神の練磨が出来てゐると不思議な妖術のやうなものでも魔術のやうなもの

でも何でも出来るものである、昔の我邦の武士は随分強いものであつたが、之

皆な精神の練磨が出来て、然うして其の結果として體育が能く發達してゐたか

らである、併し西洋にも昔は随分強い國も強い人もあつたのである、夫の人口

に膾炙してゐるスバルタと云ふ邦では、少數の貴族が國權を握つてゐたので、

其れをいつまでも自分等に握つてゐるには、ドウしても多數の平民や奴隸を御

して行かねばならぬと云ふので、一種無類の憲法があつて、其れが爲にスバル

タ人は非常に強いものになつてゐたのであつた、即ち其の憲法に依ると、生れ

た子が弱蟲であつて、逆も國家の役に立つ人間にはなれないと見ると、谷へ捨

て、野獸の餌食にして了つたと云ふ傳説さへあつた、思ふに其れほどまでに慘酷では無いので、弱蟲の子が生れると、貴族にはしないで、谷のあたりに住んでゐる平民に遣つて了つたことを云つたのであるが、斯ウ云ふ風にして貴族は強さうな子供許りを育て、其れが七歳になると、其の兒童達を親の手から離して國家が之れを教育することになつてゐる。

▲忍術でも劍術でも柔道でも凡て

▲精神と體育との産物に過ぎない

▲のでスバルタが能く證明する

スバルタの教育訓練は非常に嚴重のもので、多少は文字をも教へるが、精神と體育が重なるもので、其れから百般の武藝を教へるのである、然うして特に身體を鍛練することに非常に骨を折つた、寒い時でも暑い時でも、能く之れに耐へ、長い間、飲まず食はずにゐても、辛抱が出来るやうに、慣されてゐる

る、然うして國家の爲には死を見ることが歸するが如しと云ふ風に精神を養はれてゐた、此の兒童の教育に就ては實に面白い試験が行はれるのであつた、其れは兒童を神殿へ連れて行つて裸體にして背を鞭ち、泣き出さないで黙つて受けた鞭數をもつて、試験の成績を判断する標準にしてゐたやうなことがあつた、其の多くの兒童の中には飽くまで耐忍して、氣絶するまで聲を出さないものもあつたと傳へられてゐる。

▲實に之れを見てもスバルタの貴

▲族が強い人間を育てることに何

▲れだけ骨を折り

心を苦しめたかと云ふことが察せられる、然うしてスバルタの兒童は、教育される組々に依つて、其所に兄弟分と云ふやうな關係が出来る、其の兄分になつたものは、弟分の教育に就て萬事の世話をするのである、弟分に若し卑怯な

舉動でもあつたとすると、其の責任は兄分が引受けるのである、彼等の眠るところは共同の寄宿舎であつたが其のベットは、自分の川の岸へ行つて取つて来た葦を乾して、其の枯草で造つたものである、彼等には食物も充分に與へないで、勝手に食物を盗ませるのであつた、之れは敵陣などへ間諜に行くときの訓練の爲に許したのであるから、決して無暗に盗ませるのではない、若しも見つけられると、其の時こそ實に酷い目に會はされる又、食事の時には、國民一般の共同テーブルと云ふものがあつて、皆な其所で會食するのであるが、其の食物は、豚の肉を豚の血で煮たソップのやうなもので、大王から以下何れも同一無差別の粗食をしてゐたのである、併し兒童は大人と共に此のテーブルに就くことは出来ないのて、唯だ其の傍にゐて、勇敢の戦の話や狩の話を書いて精神の修養をしたものである、然うしてスバルタの兒童は二十歳になると、初めて共同テーブル組へ入れるのである、其の時は組員の無名投票で承諾を求めて決定する、去れば平生が卑怯な舉動でもあると、却々此のテーブル組に入れない

此のテール組と云ふのが、スバルタの軍隊の單位になつてゐるので。

▲彼等は戦ひに臨んでは飽迄も互

▲ひに生死を共にする性質を發揮

▲することになつてゐた

其れてスバルタ國民は、此のテール組に入ることになると、兵役に立ち亦た民會へ出席し、三十歳にして官吏になり士官となることが出来るのである、實に彼等は貴族とは云ひながら粗食にして粗衣で、常に武器を携へてゐなければならなかつたのである、然うして政府の命令がないのに、市街の外へ出ると、脱走したものと同様に、死刑に處せられるのであつた、又彼等の家を建築するにしても、第一に勝手に立派な家を造ることは許されないのであつた、又家中に具へるものでも、自由には出来ないものである、若し金や銀の器具を持つてゐればドシ／＼罰せられたのである、當時のスバルタの政府は建築でも馬鹿に

質素しつそのものを奨勵しょうれいし、室内しつぱいでも詰つまらぬ裝飾さうじやくを嫌きらつてゐた、結婚けつこんするにしても、政府せいふの許可きよかがなくては出來でないのので、政府せいふは出來でるだけ結婚けつこんに干渉かんせふして、勇ま
しい男をとこに賢かしこい女をんなを配偶はいどうさせるやうに努力どりよくして、良よい兒この生うまれるやうに心こころを盡つく
てゐた、結婚けつこんしても久ひしく兒こが生うまなければ、國家こくかの役やくに立たたないと云いふので
政府せいふは之これに離婚りこんを命めいじ、又また年としを老とるまで妻つまを娶めとらずに獨身どくしんでゐれば、不都合ふつご
だと云いつて、政府せいふは之これを罰ばつしたのである、スバルタは又また、今日こんにちの日本にほん人じんなど
の考かんがへられないやうに、金錢きんせんを卑いやしむ風ふうが養やしなはれてゐて、通用つうようする貨幣くわへいは鐵てつ
重おもいもので、多おほく貯たくはへたいと云いふ考かんがへを起おこさないやうに造つくられてあつた。

▲併しし流石りやうじのスパルタ人じんも、ユン

▲ナ生活せいかつでは一向かうに面白おもしろくないの

▲て慰なぐさみの爲ために

時々ときどきに大おほきな狩かりの會かいをすることもあり、又また一つとところに集あつつて、歌うたを謠うたふ事こと

もあり、秀句の言ひ合ひをすることもあつた、彼等は寡言を貴び、電信の文句のやうに、出来るだけ簡単な文句で、云はんと欲するところの意味を充分に現はした秀句を愛した、今其の一例を云ふと、或るものが戦場に臨んで、劍が短かいと言つたのに對して、秀句に長じたものは直ちに之れに應じて、自分で長くせよと云ふことを以つてした、此の短い句に依つて、劍の短いのを歎ずるな勇奮して一足前に履み出せよ、然らば汝の劍は自ら長くなると云ふ意味が充分に現はれてゐる、又母が子に楯を與へて、汝は此の楯を持つて歸るか、或は此の楯に載せられて歸れと云つた、楯を持つて歸へるとは、勇奮して凱旋することとて、楯に載せられて歸るとは、名譽の戦死を遂げることである、此の句のうちの子を勇まし戒める意味が充分に籠つてゐる、總じてスバルタは斯う云ふ風で、其の軍隊の強い事は天下無比であつたのである、去れば當時のスバルタは忍術でも、劍術でも柔道のやうなものでも非常に發達してゐたのであつた、其れにしても凡ての武藝は、先づ以て粗衣粗食で大骨折をする覺悟が必要のもの

のてあり、之れが練達の要素となつてゐるものである。

▲以上の話を以て大概は忍術や精

▲神的武藝の要素は判つたであら

▲うと考へられる

乃て最後に臨んで忍術と云ふものゝ要素を今少しく具體的に話して置うと思ふ、一體に人を欺くと云ふことは道德上甚だよろしからぬことである、併しながら他の一方に於て我々は、他人を欺き、或は自ら欺かるゝことに興味を感じて、時に之れを喜ぶと云ふ心を持つてゐるものである、平凡なる正直や、詰らぬ眞實よりも、奇抜の虚偽、詐欺は却つて我々に好かれる傾向がある、悪黨が奸智を廻らしてゐる物語、若しくは探偵が之れにも劣らぬ巧妙なる手段を用ひて、之れと戦ふ物語などは、我々に非常なる愉快を與へることは何人でも否定はされまい、或は時に我々が悪商人の奸手段によつて詐欺にかゝると、自己の

損害を憤りつゝも、一方に於いては彼等の巧妙なる手段を歎賞する心の起ることを禁じ得ない、忍術のやうなものは即ち我々の此の精神状態を満足せしめて之に依つて快感を興ふるのである、忍術の起源は極めて古いものである、之れは支那や日本ばかりではない、古代の埃及には法術士と云ふものがあつた、古代の希臘や羅馬には忍術師が澤山あつて、能く市民を驚かしたものであつた、彼等は地下の暗い室で、種々の神様が見物人の前を通るのを見せたりした、之れは香の煙りの上に、金屬の凹鏡を以て反射した肖像を投ずるものであつた、或は又燃え易いもので、暗い壁の上に神様の姿を書いて、突然之れに火を點じて、同時に雷光雷鳴をさせるとて、石松を燃やし金屬を鳴らしたりしたさうである、總じて古來の宗教と云ふものは、殆ど悉く所謂の奇蹟と稱する忍術をやつたものである、例へば耶蘇が水上を徒歩したり、葡萄酒を急に作つたりしたことが、新約全書の中に書てある、若しも實際さう云ふ事があつたならば、其れは駭かに巧妙の忍術であつたに違ひない。

▲昔むかしの羅馬人ろまじんは頗すこぶる忍術にんじゆつを好このんで

▲之これれを市中しちゆうで興行こうぎやうすることも澤たく

▲山さんあつたとの事ことである

其その後ご羅馬ろまの衰亡すいぼう期きに入いつた、所謂いはゆるる中世紀ちゆうせいの暗黒時代あんくわくじだいにも、忍術にんじゆつの技藝ぎげいは滅亡めつぼうしないて、近世きんせいに入いると共に、更さらに復興ふくこして來たきのである、特に當時たうじ著ちやくしく勃興ぼつこうして來た科學くわがくの進歩しんぽを應用おうようして、種々しゆくの目覺めさましい手品てひなをやる人ひとが出來でて來た、即ちすなはちからくり仕掛けじかけの人形にんぎやうが物を云いつたり、眼めを動うごかしたり、步行はかうしたりするものだの、或あるひともは鳥とりの羽はばたきをするものなどが盛さかんに作つくられたのである、其その中なかの巧たくみなものは甚はなはだ有名いうめいのものもあつて、當時たうじの王公貴族わうこうきぞくの間に珍ちん重ちゆうされて、珍品ちんぴんとして傳つたへられたものも少なくない、近世きんせいの始はじめの魔術師まじゆつしは、多くおほくは伊太利いたりから出でてゐるので、十八世紀せいじの末頃すまごころに、伊太利いたりにピネツテイと云いふ人ひとが出でて、魔術界まじゆつかいに一新紀元しんきげんを造つくつたと云いはれてゐる、其その後に十九世紀せいじの

半頃になつて、千八百四十五年（一八一五年）に、有名なるフランスのロベール、ウーダンと云ふ人が、巴里に魔法宮殿と云ふやうな名の大看板を掲げて、魔術の見世物を開業し、最新の學理を應用して見事に不思議な技術を示した爲に、非常な人氣となつて、此の人に依つて魔術界は非常の發展を來たしたのである、此の人は實に魔術界の天才であつたので、其の以後世界各國で行はれてゐる魔術は此の人の系統を引いてゐないものはないと云はれてゐる、即ち此の人は今日の魔術の祖人とも云ふべき人であつた、此のロベール、ウーダンは新しい魔術を多く工夫した許りではない、魔術師の衣服や舞臺の設備にも大なる改良を加へて世間を驚かしてゐる、之れまでの魔術師はテーブルにテーブル掛けを掛けてテーブル下を觀客から見えないやうに隠して了ひ其のテーブルの下に助手がゐて魔術の手傳ひをしたものである、其れは觀客の方でも始めから承知してゐると云ふ光景であつたのである、其れから魔術師の着るところの長い上着は、其の種々の部分に物を隠したり何かするに便利なやうに作つて置いたのである、然

るにロベール、ウーダンは之等のことを悉く改良して了つた、即ちテーブルにはテーブル掛を廢し觀客の方からテーブルの下がよく見えるやうにして、テーブルの上に蠟燭を二本立て、置くことにした、又衣服も魔術師然たる誤魔化しの利く着物を一切止めて了つて、普通のイヴニングドレスを着て遣り始めた尙ほ彼は自ら魔術の練習をしたありさま、及び自分の子供に魔術を教へたありさまなどは、可なり詳しい記録となつて居り、學問的方面から見ても頗る面白いものになつてゐる。

▲併しながら魔術は如何にするも

▲一個の手品たるに過ぎないもの

▲である

けれども天下の英雄は之れを利用して大事業を完成する先驅たらしめてゐる要するに英雄が手品を利用すれば魔法となり、凡人が魔法を利用すれば手品と

なるのである、現代に於ける文豪福本日南翁は曩に英雄論を著はしてゐるが、其の中に英雄の籠罩術と題した項目がある、今其の要を摘録して、苟も英雄たらんと期する青年の爲に、前途を照らす探險燈となすべく左に之れを掲げて、本書の末尾を飾ることにする、夫れ昔より眞の英雄を以て神の權化であると考へる信念は、有史以後になつても依然として變りはない、故に英雄の此の世に出づる度毎に、必らず何かの靈異を傳へてゐることが、史上歴々として其の蹟を絶たずにゐる、亞歴山大王の誕生した日には、エフエーズと云ふところにあつた月の神様の神殿から猛火を發し、忽然として炎上したので、一府の人民相驚き且つ怖れたが、時の哲人へゼジャスと云ふもの、靜かに之を諭して云ふには、人々驚怖する勿れ、思ふに天神の英雄を此の世界に降さんとして、諸神をオリムピヤの幽宮に會したのである、されば月の神様も亦た入りて其の席に坐したので宮殿が留守番さへなくなつたので、火を發したのであらうと、然るに此の日には、亞歴山大王の父王、布立夫は戰闘にも競技にも、會々二大捷報を

獲たことがあつたので、狂喜して云ふには、之れ誕兒が未來の運命を開拓する神瑞に違ひないと考へた。

▲然るに漢の高祖も亦た一身に神

▲異のあつた話を傳へてゐる歴史

▲を讀んで見ると

高祖の母、劉媪は嘗つて大澤の陂に息ひ、夢に神と交接した、此の時に雷電晦冥あり、其の夫太公が往つて視ると、蛟龍を雲の間に見た、既にして身ごもるありて、遂に高祖を産んだと云ふのである、高祖長じて泗水と云ふところの亭長となり、常に王媪武負に従ひて酒を買ひ、陶然として酔臥してゐる、武負や王媪が其の姿を見ると、時に龍が來てゐたと云ふことである、高祖亭長として縣の爲に囚徒を鄴山に護送したら、囚徒の多くが道より逃亡した、高祖自ら度りて、斯くては先方に達する頃には、悉く逃亡し去るべし、寧ろ之れを心地

能く逃がしてやるに若かずと、或る夜豊の西澤と云ふところに至りて止つた、此所に於て高祖は、囚徒と共に酒を飲み、悉く解放して曰く、公等皆な去れ、吾れも亦た之れより去るべしと、囚徒の中にゐた壯士の面々は甚だ其の意氣に感じて、従を願ひ出づるもの十餘人、時は方に深更であつた、高祖酒を被り、澤中を歩行いてゐると、前に進んでゐた一人のものの報告して、前に大蛇ありて徑に當つてゐる、願くは此より他の途に引還さんと、高祖聽かずして曰く、壯士行くに何をか畏れん、前んで劔を抜き、撃つて其の蛇を兩斷して過ぎ去つたが、一壯夫あり、後れて蛇の横れる所に至つて見ると、一人の老媪の其の傍に哭してゐるものがあつた、何を哭するやと問へば、人あり吉子を殺せり、故に哭すと云ふ、更に媪の子は何れに殺されてゐるかと問へば、媪曰く、吾子は白帝の子なり、化して蛇となりて道に當る、今赤帝の子に斬らる、故に哭すと、壯士以爲らく、媪妖言すと、將に之れを笞たんとす、媪忽ち見えずなりぬ、來りて之れを高祖に告ぐ、高祖心に喜びて、私に自負したりと云ふ。

▲秦の始皇帝常に曰く東南に天子

▲の氣ありと乃ち東巡して之れを

▲厭したのである

高祖之れを畏れて芒碭山澤の間に隱る、呂后人と俱に求め、毎に其の所在に至れり、高祖怪んで之れを問へば、呂后の曰く、季の居る所の上には常に雲氣あり、故に従ひ至れるなりと、高祖心に又喜んでゐたと。按ずるに亞歷山大王は紀元前四世紀に現はれた人であるが、漢の高祖も亦た紀元前三世紀の人である、されば神人時代を距ること未だ遠からず、其の人の神異の傳説に圍繞されてゐるのも、未だ以て奇とするに足らないが、併し英雄を以て神子神孫となして、之れを人間以上に見るのは妙ではないか、然うして之れは東西の歴史を通じて滲つてゐるところがない、近くは我が豊太閤は天文六年に生れ、今より四百年前にもならないのに、國史は之れを傳へて、其の母、太陽の懷中に入ると

夢みて身ごもるあり、然うして此の英雄を産んだのであると云はれてゐる、故に字して日吉と云へりしとぞ、之れ晉に傳記的記録に許りあるのではない、太閤が海内を統一したる後、兵を明韓に用ひる際は、當時スペインの藩屬であつたフィリッピンの太守に移牒し、其の入貢を促せる文中、亦た之れを徴すべきものがある、其れを見ると。

▲夫れ我國は百有餘年、群雄國を

▲争ひ、車書、軌文を同くせず、

▲予や誕生の時に際し

天下を治むべきの奇瑞ありしを以て、壯歳より國家を領し、十年を歴ずして彈丸黒子の地を遺さず、域中悉く統一せり、之れに繇りて、三韓、琉球、遠邦異域、塞を款いて來享せり、今や大明國を征せんと欲す、蓋し吾の爲す所に非ず、天の授くる所なり、其の國の如きは、未だ聘禮を通ぜず、故に先づ群卒を

して其の地を討たしめんと欲すと、コンナ按排で見ると、太閤自身も亦た其の誕生の奇瑞を認めてゐるのであつた、併しながら考へて見ると、之れ何れも風氣未發の時代に於ける英雄の籠罩術の存する所のものである、蓋し英雄に取りて幸なるは、英雄を以て神の權化なりと思つてゐる一般人の信念である、之れ此の信念は、神代以來より深く人の心の上に印象して、世を歴、時を易へるも尙ほ斯の生民の腦裏より去らないのである、故に大に天下に爲すことあらんと欲するものは、先づ人をして彼は神人である、人間以上である、到底人力の企て及ぶ所にあらずと信仰せしむるより便利の可い方法はないのである、若し一たび此の信仰を惹かば、統馭に、征服に、力を用ひること一半にして、功を收むること倍加するものである、願ふに漢の高祖の如き芒碭山中夜行の際に、青大將の一匹やそこら斬り棄てたる事實はあるべし、後れて至れる一人が聽き得たる老嫗の赤帝白帝談は、恐らく漢の高祖が方寸の自作である、若し然うでないとしたならば、後れて至りし彼の一人、亦た此の際より山氣があつて、當時未

顯の英雄に豫め箔を附けたものであらうと思はれる。

▲其の他の雲龍五彩の譚り亦た又

▲た之れに類する話にして太閤の

▲時代は近いけれども

尙ほ此の故智を用ゐたものに違ひない、其の母の夢みたるところのもの、果して太陽であつたのであらうか、其の光り赫々として太陽のやうに、其の形ち團々として日輪のやうに、之れ恐らくは父親筑阿彌の禿げ頭であつたかも知れないのである、更に太閤の後、未だ百年を出でざるに、由井正雪、英雄過去の籠罩術を假りて、信を一世に博せんと欲し、豫め菊水の章旗を造りて、之れを淺間の山巔に藏し、一日夢想に託して、之れを發掘し、自ら楠子の裔なりと稱し、信従するもの十百人にして、懷疑するもの千萬人、之れ僅かに百年の間で、國民の講學大に進んで、又餘りに假裝的の事を信せざりしに依る、従の成

らざりしは全く之れに原因したのである、北條早雲は吾戰國時代の一雄である
一日儒生を召して、黄石公の三略を講ぜしむ、儒生乃ち開卷第一に、主將の法
は務めて英雄の心を攬すると誦するや、早雲聲に應じて曰く、我れ既に之れを
得たり、復た説くこと勿れと、命じて其の講を停めしと云ふ、頼山陽先生之れ
を嘆稱して、足利氏其の綱維を墮して、權臣内に鬩ぎ、海内爭亂す、然る所以
のものは、天下の英雄各々其心を以て心と爲し、主將之れを收攬する能はざるか
らである、早雲早く此に見る所あり、以爲へらく、天下の事知る可きのみと、
故に一劍の任に仗りて、天下を周流し、武を用ゐるの地を求め、一たび其地を
得て、雲蒸龍變したのである、夫の兩上杉氏は百年の故家、財賦の富、兵馬の
雄を以てして、早雲赤手之れを圖る、奚ぞ雖もて山を鑿つに異ならんや、乃ち
能く戰へば勝ち、攻むれば取り、其死命を制せしは、果して何の特む所ありて
然りしか、英雄を結納し、其驩心を得るを以てのことである、兵寡くして、志
一、地狭くして、力合す、同舟江を濟り、期せずして救ふが如し、此れを以て

敵に臨む、天下を横行すと雖も、難きこと無し、然るを況や兩上杉氏に於てをやと。

▲三略の首章に謂ふ所の主將とは

▲自から英雄の英雄を意義し次に

▲謂ふ所の英雄とは

蓋し英物の義である、されば我をして言はしむれば、英雄は務めて將士の心を攪ると云ふの一層適切なるを覺ゆるのである、古今の英雄の籠罩術は、何れも時に應じ世に處して、其の形體は百變すと雖も、要は唯だ此の一語に盡さん其の平素よりして衆心を收攪し、事あるに及びて操縦驅使するのは固より論のない話である、要するに大事に當りて衆の疑懼を釋き、人々をして勇躍して吾が用を爲さしむるが如き、亦た自ら箇中にありである、之れ風氣未發の時代に當り、東西の英雄が屢々神明の靈驗を稱し、三軍の志氣を強くして、寇を取り

敵に克ちたる史實に、歴々として載つてゐる、史記に云ふ、吳起の魏將となるや、士卒の最下なる者と衣食を同くし、臥するに席を設けず、行くに騎乗せず、親ら糧を裏贏し、士卒と勞苦を分つてゐたのである、卒に疽を病むものあり、吳起爲に之を吮つてやつたと云ふことである、卒の母が之を聞いて哭したと云ふ、或る人謂つて曰く、汝の子は卒である、將軍自ら其疽を吮ふに、何ぞ哭すること爲すや、母の曰く、然らず、往年吳公、其父を吮ふ、其父戰ひて踵を旋らさず、終に敵に死せり、吳公今又其子を吮ふ、妾其死所を知らず、之を以て哭すと、起は紀元前五世紀の人、故に史記の傳ふる所のもの、或は誇張、其實に過ぎてゐるかも知れない、然かも後世英雄の爲す所を見て、其の信に然るところを知る、豊臣氏の世に、一日太閤茗謙を開き、手に芳茗を點して諸將を饗す、大谷刑部少輔吉隆も亦た其の中にあり、茗法一椀の點茗を坐客に轉々し、衆口之を分啜味賞するを以て其儀とする、椀は傳へて吉隆の手に到る、吉隆承けて將に之を服せんとす、此の人平生惡疾あり、鼻澳垂れて椀底に落つ、飲み

盡して其痕を匿さん乎、茗法に背く、其まゝ直ちに他客に致さん乎、汚穢を奈
 何せん、吉隆窘窮、其色に見はる、太閤之を瞥見し、徴還して曰く、刑部、其
 腕の點茗甚だ妙ならず、我れ改め點して以て衆賓に供すべしと、命じて俄に刑
 部の持てる腕を取り、一氣に嚙下し、更に清茗を點して、庶上に遞致せしむ、
 其間咄嗟、衆悟らず、實に太閤の意を加へて客を盛饗するのたと爲せり、吉隆
 感激、肺肝に銘せり、他年彼が豊家の社稷に殉せしものは、大端實に此際に發
 してゐたのである、吾が乃木大將の軍にある、卒と兵食を同くし、臥するも亦
 た其席を設けず、故に大將の臨むところ、沙上偶語を絶つと聞く、英雄は務め
 て將士の心を攬る、自ら之れ英雄の襟度、術を弄するに非ずと雖も、術亦た托
 して其の中にあると云ふべきである。

忍術魔法術終

大正七年二月二十日印刷
大正七年二月二十五日發行

神祕
靈魂口よせの術

定價壹圓貳拾錢

著者
東京市淺草區北仲町五番地
高田俊一郎

發行者
東京市神田區猿樂町一丁目二番地
竹生太一

印刷者
東京市牛込區西五軒町五十二番地
福山福太郎

印刷所
東京市牛込區西五軒町五十二番地
福山印刷製本所

東京市神田區猿樂町一丁目二番地

發賣所

竹生英堂

振替東京三二九四〇番

不許
複製

觀相學泰斗玄龍子先生著

必中風鑑 人相千里眼

堅牢美本數
度刷鮮明圖
解百餘箇入
約二百五十

定價一圓卅錢

■流石に廣い東京の事であるから、觀相家も五六百人は門戸を張つてゐる、併し何れもド
ン栗の背鼓べごと、玄龍子ありて、昔から其の雄を争つてゐる、然うして石龍子は學問に於て、
あり日本橋に玄龍子ありて、昔から其の雄を争つてゐる、然うして石龍子は學問に於て、
玄龍子は實地に於て、玄龍子は將に觀相界のやうな先生である、昔し荒岩と云ふ角力
道の名人がゐたが、玄龍子は將に觀相界のやうな先生である、昔し荒岩と云ふ角力
ば玄龍子は村正である、玄龍子は將に觀相界のやうな先生である、昔し荒岩と云ふ角力
て、玄龍子は村正である、玄龍子は將に觀相界のやうな先生である、昔し荒岩と云ふ角力
るに心理學、生理學、精神科學の山口千枝の傳書や、林文嶺の傳書や、正宗を石龍子とすれ
の千里眼となるべき研究方法を講述したる、實に斯界に於ける破天荒の創見なりと云ふべ
き珍書である。

發行所

東京神田區猿樂町一の二

竹生英堂

振替東京三二九四〇番

●人相新聞社長先心堂羽叟先生編述

人相秘傳 虎の巻

●附高等失業者の福音

今日の社會は甚だしく安定を缺いてゐる、要するに凡ての事柄の動搖時代である、従つて觀相、易占、豫言者成金時代とも云ふべく、特に人相判斷を以てすれば、月收百圓以上を求め得ること、眞に朝飯前である、此書は簡單にして面白く一讀すれば誰でもスグに大觀相家となれる、天下一品の人相秘傳虎の巻である、▲眼の相▲鼻の相▲口の相▲齒の相▲眉の相何れも之を科學的に説き實例を擧げて眼で見ると、流暢なる新聞報的の筆致を以て講釋がしてあるから、小説よりも遙かに越味に富んで居り更に觀相家占家として必らず大成功せねばならぬ營業秘訣をも遺憾なく説いてゐる、今の時代に於て資本金入らずに勞役せず、高尙の地位を保つて、世人を指導して行きながら、確實の收入を得るのは何事よりも觀相家になるのが安全第一の道である。

正價八十錢 特價六十錢 送料六錢

講師觀相泰斗 石龍子先生

速成觀相講義

文章は極めて平易なる言文一致體にして、素人にも能く分る。親切のものにて、其の科目は觀相講義總論、腦髓生理學講義、形體格講話、性相器官學講義、觀相講義、歷史講話、應用性相講義、實用觀相講話、畫相豫言秘錄にして如何なる素人でも、文字の上にある人ならば、直に大觀相家となれると同時に、之れを社交の上に応用すれば、自己を贏ち得られることを得て、適材を適用所に配置する成功の基礎を贏ち得られる。若し亦た兒童教育に應用すれば、各自の才能のあるところ趣味のあるところを擧ぐる便利がある。以て、勞少なくして効果の大なる教育の實を擧ぐる便利がある。

合本

上ノ卷
下ノ卷

定價二圓十錢
同 二圓十錢

送料十二錢

入圖 名灸長壽法

本書は徳川時代の儒醫後藤良山先生の秘法にして數百年間の奇蹟
：偉効の確認せられたる名灸極意書なり茲に博愛救済の爲め斯
道大家半田蘇來先生の始めて秘密相傳公開に係る。偉藥無効の
頑固難症も適法に依り可驚卓効あり來れ長壽を欲する人、醫藥
に効を奏せざる人

名灸の大功ある病

胃病・肺病・ね小使・座骨神經痛・肩
引・三里・遺精・夢精・脊髓病・生殖

器・中風其他諸難病に適す素人は勿論鍼灸専門家も一讀せられよ

定價五十錢

三十五錢

送料四錢